
海に散る星

槇田理奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

海に散る星

【Nコード】

N3461U

【作者名】

槇田理奈

【あらすじ】

悲しみに嘆き、遂に彼等は権力者に抗う為に立ちあがる。復讐者たちは全てを破壊してでも倒そうとしている…彼らを救うために、また怒りを抱いた者達は奔走する。絶望から希望を見出す青年たちの復讐劇から結末までを謳う最後の交響曲。 …願わくば、この世界に光を。 ただいま無期限休止中

第一部：悲劇、廻りて

其処に居たのは2人の若い男女だった。

まだ、青年と呼ぶに相応しい男に、少女と呼ぶに相応しい女…。

2人は必死に追っ手から逃げていた。

「大丈夫か？」

「…大丈夫っ！此の位でくたばるものですか！」

「…しかし…」

「貴方の為なの！私は貴方の生い立ちだけで貴方が理不尽な仕打ちに合うのは御免なの！」

額から流れ落ちる汗を拭いながら言った。

青年は目を伏せながら、追っ手が迫って来たと分かると素早く少女の手を引いて逃げ出した。

「もう直ぐで町に着く…。彼処なら頼れるかも知れない…さあ、しつかり。」

「ありがとう…でも。」

少女は既に追っ手から逃げ切れないと悟っており、青年に背を向けた。

「貴方は幸せにね、私達…結ばれてはいけなかったのよ…私さえ捕まれば…！」

「…なっ！待て、待つんだ！君には…！」

「さようなら！……愛してた。愛しているから…貴方は幸せになつて」

悲しそうな表情で、ありつたけの想いを青年に告げると勇ましく、兵士達の群れの中へ飛び込んで行った。

兵士達は勝利の笑みを浮かべ、少女を捕らえる。

「……リア……」

騒ぎが収まるまで出るな！と、青年は少女から言い聞かされていた事もあったが、恐怖で身体が動かなかった。

悔しそくに目の前に広がる悲劇を眺める。

少女は、丁重ではあるが兵士達に連行されていく。

「おのれ……愚かな！…必ず、復讐してやる！思い知れ……思い知らせてやるっ！」

青年は憎しみと悲しみで顔を歪ませ、兵士達を睨み付けた。

「貴方も同罪ですよ？」

暗闇の中で、ニヤリと笑みを浮かべながら容赦なく棒が振り下ろされる。

「この私に逆らうとは！」

力一杯：棒を振り下ろしている。

振り下ろされる旅に赤い痕が身体中に刻まれる。

しかし、ただ悔しそうな表情を浮かべ、唇を噛んでその仕打ちに耐えるだけだった。

其の様子が怒りを増していく。

跪く様子も見られない、ただ黙ったまま見据えていただけだった。

「何か言え！」

「……………」

髪を掴み、上を向かせる。

「何時から反抗的になりましたか？お兄様：私に権力で負けた癖に刃向かうとは：身の程知らずが」

「……………れ」

先程まで黙り込んでいたが、突然口を開いた。

唇が切れて、血が流れ落ちるが、全く構わず…逆に相手を嘲笑う様な表情を浮かべた。

「貴様は哀れな奴だ、権力を盾にして私に対峙する事でしか強さを表現出来ない、あの家に利用されていただけだと言っことを早く気付け」

相手を真っ直ぐ見つめながら嘲笑う様に、憐れむ様に相手に言った。だが、相手には通用しないようだ。

「…小賢しい！二度と私に刃向かえなくしてやる！強さを得る代わりに貴方は私には逆らえない…絶対に、絶対にだ！跪け！」

相手は狂気を露にした表情を浮かべ、剥き出しになった背中に刻印を刻もうとしている。

「そんな事しても誰も救われぬ、誰も支配等出来ない…権力だけが全てではない事を…貴様等は神にはなれない事に気付け。」

生きている限り、決して逃れられない刻印を刻まれ様としているのに、未だに憐れむ様な表情を向けている。

「戯れ言等聞きたくない…さあ、死よりも尚苦しい生き地獄に…一生苦しむがいい！」

ニヤリと笑みを浮かべ、刻印を背中に刻み付ける。

「う……っ！くうっ！」

刻まれる刻印…焼かれるような痛みにも歯を食いしばって耐える。

永遠とも思われる地獄を味わいながらも尚、反逆の意志は曲げない。

「……レイ……どうか、お前だけでも……」

「貴様等さえ居なければ」

青年は兵士達を斬り捨てながら呟く。

「この世は廃れている」

真紅の瞳が青年の怒りを表している様だ。

服は己の血と、兵士達を斬り捨てた時の返り血で赤黒く染め上がる。

服も瞳も髪も赤黒く染まる。

それはまるで炎の様だった…。

「……醜い争いの為に犠牲になるのは力無き者達だ……」

血がこびりついている剣を振り下ろしながら、怒りと憎しみだけを胸に刻んだ。

「今こそ、復讐してやる！」

権力を失った者もまた、微かな目的だけを胸に暗闇を見つめる。

「貴様等が無力だという事を知るがいい……」

憎しみと悲しみと…絶望と微かな希望を抱き、反逆の意志を示した。

今は無力でも、何れはきつと。

全ては歪んだ権力者達の為に。

始まりは一握りの権力者達の為に犠牲になって来た者達の復讐…。

悲しみは憎しみに変わり、幸せを失った者は絶望の日々に暮れ、無力な彼等はただ権力者に跪く事しか出来ない。

だが、何れ権力者に対する反逆を露にして、彼等は密かに権力者達に剣を向ける時を狙っている。

7

「邪魔をする奴等は」

「我等の邪魔をするならば…」

“誰であろうとも斬る”

例え其れが間違っていたとしても、一度決めた意志を曲げる事は出来ない。

彼等は復讐をする。

権力者は其れを嘲笑う。

そして…。

「早く行かなければ！」

復讐者達を止める為に、後に権力者達を裁く為に…動き始める。

「……空が暗いな…動き始めたか？」

窓から空を眺める1人の男が居た。灰色に近い空を見上げながら呟く。

「何も変わらないぞ…こんな事をしたところで」

悲しそうな、苦しそうな表情を浮かべながら、ずっと空を見上げていた。

するど。

「団長」

「……どうした」

部下が声を掛けて来たので、振り向いた。

「…近くに居た商人2人が襲撃されました、1人は背後から刺され

死亡、もう1人は胸を刺されるも辛うじて命を取り留めた様です」

「そうか…2人の身元を調べてくれないか？」

「畏まりました」

部下はそう言っただけ深く頭を下げると足早にそこを去った。

「……復讐の始まりかも知れない…哀れな」

そして、今…始まる。

様々な感情が入り交じった故に生み出された戦いと…悲劇の交響曲が。

灰色の空の下、血だらけの剣を片手に呆然としている1人の男…。

「まだまだ此では終わらない…俺の為に、あの人の為に…」

低く呟き、既に動かぬ者達を睨み付け、剣を突き立てた。

こうして、次々と殺められていく者達。

「…誰にも止めさせはしないさ」

勝利の笑みを浮かべ、男は背を向けて走って行き、やがてその凛々しき姿は闇に消えていった。

第一節：冒険者の唄（前書き）

冒険者は唄う、悲劇の始まりを

冒険者は呻く、忘却の彼方にある記憶を手繰り寄せながら

冒険者は嘆く、おのれの無力さを

…冒険者は往く、悲劇の輪廻を止める為に

第一節：冒険者の唄

当てのない旅：興味を示した場所から場所へと流離^{ちり}う旅人。

「うーん…この辺りには興味深い観光所…あつただろうか」

わざわざ歩いたり、船や列車に乗ったりして向かうのだから満足しなければ割りに合わない。

「此処から定期船で大都市セントか…それよりも先ずはライハード城下町に行った方が良くも知れないな、何か良い情報が手に入るかも知れない…お、夜が来てしまった、と。さて…早く寝ないとな」
言った後に、もう一度大きく頷くとベッドで横になった。

木製の天井をじっと見つめていると、直ぐに眠気は襲いかかって来てしまい、ぐっすりと眠った。

「…どうかしたのですか？」

「……の為なのだ、知られては……困る！」

「……リアー！」

ガンッ！

強い衝撃…響き渡る音…手を伸ばそうとするけれど、届かない。

「……兄貴！兄貴ーっ！」

「……少年」

「兄貴…嫌だ…嫌、お願いだからしっかりしてよ」

ポロポロと涙を溢す幼い少年…その涙を拭ってやれたら良いのに。

それすらも出来ない自分が心底嫌だった。

「……………！」

目が覚めてしまった…あまりにも悲しい夢だった…落ち着かない少年を宥めていたら、訪問者が来て…いきなり殴られた。

鋭い痛みに流れる赤い赤い血…少年は駆け寄って…必死に声を掛けていた。

笑おうとしたのに上手く笑えていない気がする。

安心させようと笑おうとしたのに…上手く出来ない。

少年の悲痛な叫びと涙が胸に突き刺さるように痛い。

とりあえず変な夢だった。

心臓が激しく動いて苦しい…流れる汗を拭いながら壁に掛けられた時計を見る。

「まだ…夜中か…もう少し寝ても良いだろう」

そして、また横たわって薄い掛け布団を頭から被ると深い眠りに落ちた。

随分嫌な夢を見てしまったものだな。

気持ち良く寝させて欲しいと思ったが、やはりこれは何かを暗示しているのだろうか…。

あんな生々しい夢…初めて見たような気がした。

毛布を頭から被って眠ろうとしたけれど、目が冴えてしまって結局眠れなかったのである。

取り敢えず夜が明けるまで時間を潰すしかないか…ベッドに座り、何をするでもなく持っていた本を広げて読み始めた。

「レディンさん…夜分ではありませんが、ちょっと失礼します…良いですか？」

本を広げ、読み始めようとした旅人…レディンのいる部屋の戸を叩いた者がいたのである。

(…何かいい知らせかも知れない…)

別に拒む理由もないので、「どうぞ」と、部屋の訪問者を招き入れた。

「ああ、娘さんか…何か用かな」

レディンは部屋を訪れた人が予想通り宿屋の娘だと分かり、微笑ん

だ。

娘の方もそれに応えるように微笑んだ。

「もうお怪我の方は大丈夫ですか？レディンさん」

「ええ、貴女と宿屋の主人のおかげでこの通りですよ、本当に感謝してもし足りない位です」

レディンは浅くではあるが、娘に向かって頭を下げた。娘は戸惑いながら

「血だらけの貴方を助けなければならぬと必死で…そんな…頭を上げて下さい、レディンさん」

そう言ったのでレディンは顔を上げた。

「…レディンさん、明日には旅立つのですか？」

宿屋の娘が問い掛けると、レディンは頷いた。

「はい、出来れば明日には旅立つつもりです。あまり迷惑をかけるわけにもいきませんから」

「…そうなのですか…残念ですが、何か目的でもあるみたいですし…」

と、言って娘は少し名残惜しそうな瞳でレディンを見つめていたが、レディンはにっこりと微笑んで

「貴女にもお世話になりましたね…ありがとうございます。あ…もう早く寝た方がよろしいのでは？宿屋の主人に色々言われてしましますね」

本を鞆に仕舞いながらレディンは宿屋の娘に寝るよう促した。

娘を目に入れても痛くない程可愛がっている宿屋の主人の事だから、きつと五月蠅く言われるに違いない。

2人は、その様子を想像し、暫くの間、苦い笑みを浮かべた。

「ではレディンさん、ごゆっくりお休み下さいませ、夜遅く失礼しました」

そう言つて娘は丁寧に頭を下げると静かにレディンの部屋の扉を閉めたのだった。

娘が去り、1人になったレディンは少し溜め息をつき、部屋に設置されている風呂場に向かった。

風呂場の中の脱衣場で服を脱いだ。

鏡を見ると、自分でも驚く程深い腕の傷や背中に刻まれた痣を見た。

刻まれた痣や深い傷は一体何処で負ったのだろうか？

何も、何も分からなかった。

自分の名前しか分からなかった。

そう、レディンは自分の名前以外何一つ覚えていなかった。

幼い頃の記憶も、故郷の事も、何もかも。

レディンは自身の体に刻まれた傷や痣を見て、顔を歪め…何故だか分からないが嫌悪感すら覚えた。

これ以上背中を凝視してはいけなそうと思い、汗を流すためにシャワー室まで向かった。

シャワーを浴びながらレディンは自身の事が何故、名前以外の事が何一つ分からないのか？

何処で記憶を手放したのか？

それをずっと考えながら昼間の汗を流していた。

背中には相変わらず長い筋のようなものが目立っていた。

腕には深く切り刻まれた痣…体のあちこちに傷が目立っていたのだが、旅に傷はつきものだと思った彼は治療してもらったただけであったのである。

この痣や傷が後に彼にとって大きな“枷”になることもまだ知らないままだった。

シャワーを浴び終えたレディンはタオルで自身の髪を乾かしながら、ベッドまで向かう。

あれから少しだけ考えてしまったが、知らないことを考え込むよりも、早く体を休めなければならぬと思いい、ベッドに身を投げてそのまま毛布を被って寝てしまったのである。

先程の様な寝苦しさもなければ、込み上げてくる何かも感じない…とても穏やかな眠りだった。

いつしか彼は深い眠りに落ち、昼近くまで目が覚める事はなかったという。

第二節：真紅は嗤う（前書き）

過去の悲劇、悲しみの始まり

全ては此処から始まり、いったんは此処で終わる

憎悪の輪廻は廻り、真紅に染まった者たちは光を嗤う

…さあ、思い知るがいい……！

第二節：真紅は嗤う

今から6年前

「…何？」

報告を受けた男は眉間に皺を寄せた。

此処はライハード城の会議室…騎士の身形をした男2人が言葉を交わしていた。

1人は、剣士風の身形をした青年、もう1人は恐らく黒髪の男が仕える騎士で、軽くウエーブが掛かった淡い金色の髪に黒い瞳に鎧を装着していた。

「…西の村へレナで殺人事件があったと？」

「…まだよくわかりませんが、玄関の前で銃殺されていた様です。被害者は『シャルル・アルベルト』…獵師で今は1人ひっそりとヘレナで過ごしていた…と…ただ意外な人物と関わりがあるのですが…」

「誰だ？」

男はそれが気になり、問いかけた。

すると…。

「ジャン様のご友人だそうでジャン様が騎士団に入団するよう促し

たのも『シャル・アルベルト』なのです、しかも不思議な事に被害者は殺される直前にジャン様にヘレナに来るよう言ったそうなのですよ」

「で、ジャンは行ったのか？」

「はい、昨日休暇を取ってヘレナに向かったそうです…しかしジャン様がヘレナに着いたときには被害者は既に死亡していました」

「そうか……」

男は考え込みながらため息をついた。

何れにせよ自身の部下である「ジャン」に詳しく事情を聞かなければならない。

コンコン。

男が報告書に目を通してしていると扉を叩く音が聞こえた。

「…誰だ？」

「…ジャンです…アレン様にお話ししなければならぬ事があるので…」

「ああ…丁度良い、入れ」

ジャンは静かに扉を開くと報告書に目を通してアレンに一礼した。

「…シャルル・アルベルトの事で話さなければならぬと思います
て」

「…分かっているか…ならば話は早い」

アレンは報告書を机に置くとジャンに向き直る。

「昨日はいつヘレナに着いたのだ？シャルルの推定死亡時刻は午前
2時30分だ…」

アレンの言葉にジャンは頷いて淡々と話し始めた。

「…一度大都市セントに向かつて…買い物をして…それからヘレナ
に向かったので着いたのは午前1時半位だったかと思います。しか
しシャルルに会う前にシャルルの友人に最近の彼の様子を聞いたり
していましたので…午前2時までヘレナに居ました。その後直ぐに
友人達に誘われて大都市にもう一度向かったので2時半には既に列
車の中でした。シャルルの悲報を聞いたのは午前5時頃です」

話し終えたジャンにアレンは頷いて

「なるほど……早速調べてみよう」

と言った。

しかしジャンは直ぐに口を開き

「…実はアレン様にお話したいのは別にありまして…シャルルの友
人から聞いた話なのでよく分かりませんが…」

と言った。

アレンは眉間に皺を寄せながらも

「…何だ？」

と言ってジャンに話すよう促した。

「実はシャルル…子供を預かっていたけど行方不明の恩人を追ったまま帰って来ないとか…恨まれているとか…そんな内容の事を話していたそうです。後は…彼には悪いのですがこのようなメモも残しています」

ジャンはそう言って紙切れをアレンに手渡した。

アレンはその紙切れを開いた。

紙切れにはこのような内容の事が書かれていた。

“ 幽霊が残念そうな表情で赤い糸頂上から垂らしながら異なる理論を持つ悪魔を切り捨てる 224が真実を握る、273036は過去の罪人、これが動くれつきとした機会の元である”

「何だ此は？此がシャルルのメモだと言うのか？」

「あ…はい…裏には…『必ずしも真実知るものが犯人に在らず、黒き布に包まれている者が必ず居るだろう、どうかこれを…』この先はインクが滲んで読めないのですが、どうやら暗号か何かみたいなのですが全く分からなくて…」

ジャンはもう一度、走り書きしたようなメモを確かめた後にアレンに手渡した。

アレンは手渡されたメモを暫く見つめていたが、やはり子供の悪戯書きにしか見えなかった。

文は無茶苦茶、おまけに走り書きしたような事が一目で分かるような感じであった。

「取り敢えず此れをもう一度書いてみたら分かるかも知れないな、ジャンも手伝ってくれ」

「分かりました」

そう言ってジャンは近くにあったペンと紙を取り出し、アレンに手渡した。

「何かを伝えようとしているかも知れない…カタカナやひらがなに換えて書くのもいいかも知れないな」

「やはり分からないのが 後にある文ですね…224が真実を知る…か」

「…今は“224が真実を知る”というヒントを元に考えてみよう」

「あ…はい…」

ジャンは頷き、色々な方法で考えた。

しかし…何一つ分からず、時間だけが過ぎていった。

時計はカチカチと音を響かせている。

この悪戯書きの様な暗号文を前にアレンやジャンは挫けそうになった。

「カタカナに… “ユウレイガザンネンソウニ” …! ? まさか! ?」

アレンは自身が暗号文をカタカナに書き換えたメモを見つめながら、驚愕した。

「ジャン! !」

「分かったのですか! ?」

ジャンはアレンのところまで駆け付けた。

アレンは未だ信じられないといった表情でメモを見つめていた。

「224とは… 2番目2文字4番目ということかも知れない… こうしたら… 信じられない人物の名前が浮かび上がったのだ」

「… 信じられない人物の名前が? それは誰なのですか?」

ジャンは未だにアレンが何を驚いているのか分からないでいた。

アレンは一息つき、声のトーンを落としてジャンだけに聞こえるように言った。

「レイザだ… 2番目と2文字… 4番目の文字を表すとこうなる。」

幽霊”の2番目とわざわざ記したのは“霊”が2番目だからだ…しかし“幽霊が残念”の“残”は読み方を表すと“ザン”なのだ…“霊”は2文字全てを読ませる為に2番目に行っているが4番目は2番目を考慮した上で普通に数えると“ザ”になる。224はこれを組み合わせよという意味だから答えは“レイザ”になる」

「そうですね」

ジャンはアレンの言葉に頷き、紙に例の暗号を全てひらがなに換えて書いた。

アレンも例の暗号をカタカナに換えて書いてみた。

「レイザ…聞いた事のある名前ですね…確か闘技場1の賞金稼ぎと言われている剣闘士ではなかったですか？」

ジャンもこの暗号文に隠された名前を知り、僅かに動揺しながら言った。

「そうだ…賞金稼ぎの冷酷な剣闘士という…しかしそれだけではない…確か牧師殺しの犯人とも言われていた」

「牧師殺し…」

牧師殺しとは8年前に此処から遙か東のファレス大陸の大聖堂で有名になった牧師が刺殺されていたという事件である。

その牧師に遣えていたのがレイザであり牧師を抹殺したという噂が流れたのだ。

勿論、牧師殺しの事件は未だ手掛かり1つないまま闇に葬られたものだった。

「レイザが牧師殺しをして…シャルルまで殺して一体何の得があるというのだ？シャルルはただの村人だ…繋がりが全く感じられないのに」

アレンとジャンはいよいよ頭を抱えてしまった。

牧師殺しと言い、西の農村へレナの殺人事件と言い…奇怪な殺人事件が次々と起こっている。

何かの前触れなのかも知れないと思わずにはいられなかった。

「…レイザ…賞金稼ぎ…剣士…やはり…どう考えてもおかしい」

ジャンはまだ納得がいかないと叫んだ表情で考え込んでいるとアレンもまた調査結果をまとめた書類を眺めて

「シャルルがそんな奴と付き合いがあれば何処かでボロが出る筈なのだが誰に聞いても“彼は好青年だった”としか言わない。

そもそもレイザが本当の名前を名乗っているかすら怪しいところだな」

と言った。

「もう少し調べましょうか…」

「ああ、頼む。だが、深入りはするな。調査をするなら部下達と共に

に…分かったかな？ジャン」

「…分かりました」

ジャンは深々とお辞儀をすると、背を向けて、足音をほとんど立てずにアレンの部屋の扉まで歩き、静かに扉を開き、部屋を出てまた静かに扉を閉めた。

ジャンが立ち去ると、アレンは一人で考え込んでいた。

「…まさかな…レイザが…そんなわけあるまい、出来れば信じたくないが…何れジャンに話さねばならない時が来るのかも知れないな…取り敢えず今はまだ何も話す時ではない」

そう言った後、少しため息をつき、時計を見た。

時計の針はもう朝の5時を示しており、後1時間で会議が始まる時間だった。

会議書類をさつと纏め上げ、急いで会議室へ向かった。

謎を残したまま、夜が明けてしまい、結局あの暗号文が何を示しているのかは分からないままだった。

しかしアレンはレイザと言う人間の正体を暴く事が全ての真実に繋がるとは何故か思わなかった。

レイザという人間の正体を掴んだところから何かが始まるような気がした。

時計の針は確実に時を刻んでおり、早くしなければ会議の進行状態が遅くなってしまふ。

（一度考えるのはやめよう…早くしなければならぬと…）

今は考えるのはやめようと決め、扉まで走り、部屋を去った。

第三節：悪魔のタンゴ（前書き）

悪魔が舞い降りて踊り狂う…それは、「彼等」にとつての悪夢の宴の始まりを告げた。

踊り狂う悪魔と跪く人々…人々は悪魔の為に、ある時は悪魔の欲するものを探し出して、奪わなければならない時は力づくで奪い、悪魔にそれを献上する。

またある時は悪魔の欲望を満たす為の餌を捕らえて献上する。

またある時は悪魔に自分の身体を捧げなければならない。

逆らつた者は清らかなその身体に消えない印を刻まれる。

悪魔を倒せぬ者は、ただ跪くのみ。

第三節：悪魔のタンゴ

薄暗い闇の中… 1人の男が現れる。

薄暗い闇の中で赤々と輝きを放つ長い髪と片方の瞳… やや憂いに満ちた表情を浮かべていた。

「ゼーウエル卿、只今戻りました」

淡々と帰還を告げる声が響き渡る。

「…ご苦労だった… レイザよ、あまり無理をするな。少し休め」

と、男は声を掛けたのだが、レイザと呼ばれた男は首を横に振りながら

「いえ、貴方がこれ以上目を付けられるのは… 貴方もアルディ家の人間なのに… 私みたいな存在を助けただけで反逆者扱いされてしまった… 貴方のお役に立てればそれだけで」

と、レイザと呼ばれた男は答えた。

「すまない」

謝罪の言葉を呟いたのはレイザが“ゼーウエル卿”と呼んだ男だった。

謝罪の言葉を呟いたあと、ゼーウエルは少しだけ悲しそうな表情でレイザを見た。

絶望と悲しみに満ちた表情だった。

「ゼーウエル卿…」

何か言わなければならぬと思い、名前を呼んだが…先の言葉が上手く紡げなかったのである。

レイザの心情を察したゼーウエルは

「…心配するな、レイザ」

そう言つてゼーウエルはレイザに笑みを浮かべた。

笑う事も出来ないのに、無理矢理顔に笑みを貼り付けて。

レイザにこれ以上負担を掛けさせてはならないと彼は思った。

ただでさえ理不尽な命令に背く事が出来ない立場を利用して…言いなりになっているのに、私のせいで彼の立場はますます狭くなつていくばかりだ。

(レイザ…すまない…もう少しだけ耐えてくれるか…?)

扉の前で見張りをしているレイザに向かって心の中で謝罪し、また書類の処理に戻る。

(もう少しでチャンスが巡って来るのだ…!)

ゼーウエルの顔色が変わつたのをレイザは見逃さなかった。

コンコン…

禍々しい装飾が施された扉を叩く音がレイザの耳に響いた。

「誰だ？」

ゼーウエルと謁見するにはレイザが許可を出さなければならぬのだが、ゼーウエルは直ぐに扉の方を振り向いてレイザに通すよう指示を出す。

「レイザ、開けてくれ。客人だ」

と言われればレイザに拒む理由はない。

扉を開けて客人を通す。

漆黒のローブを着た数人の魔術師がゼーウエルを睨み付ける。

様子が可笑しい事に気付いたレイザが素早く魔術師達を倒そうとしたところをゼーウエルは何故か制止する。

「レイザ、止せ。お前が敵う相手ではない……貴様等が来ると思ったぞ、必ずな。さて、誰の命令かな？」

ゼーウエルは数人の魔術師達を嘲笑うように見ながら言った。

「貴方に答える必要はない、ゼーウエル卿」

魔術師の1人が答えるとゼーウエルはニヤリと笑みを浮かべながら

「ほう…まあ大体は分かっている。ラザニア様の命令だろうが…生憎だがラザニア様の命令にそう易々と答えるわけにはいかないのでは…悪く思わないで頂きたい…」

台詞と同時に数発、魔法を放つ。

数発のエアスラッシュが魔術師達の身体を確実に蝕んでいく。

「流石は闇魔術師サイオニックですね…反逆者ながら大したものですよ」

今の魔法で前衛にいた魔術師が息絶えていた。

「お前がどうやら魔術師達を纏めているみたいだな…無駄な闘いはしたくないのでな…退いてもらいたい」

「それは出来ません、ゼーウエル卿」

魔術師の長と思われる男はきっぱりと答えた。

「ならば容赦はしない…悪いが死んで貰うぞ」

ゼーウエルは剣を構え、魔術師を見据えていた。

魔術師達は詠唱を始めた…しかしゼーウエルは魔術師達の魔法詠唱を阻むような真似をしなかった。

何故か魔術師達の詠唱が終わるのをずっと待っているように見える。

「ダークストーム！」

唱え終えた魔術師の掌から放たれる黒い風に紛れた無数の刃…。

しかしゼーウエルはかわす事もしなければ防御をしようともせず、ただずつとその場に佇んでいた。

「…無駄だな…」

低い声で呟き、ゼーウエルは魔術師達の魔法を難なくはね除けながらそのまま魔術師達に衝撃波を放つ。

「私が闇魔術師だと言う事を忘れないで貰いたいな…」

衝撃波を受けた魔術師達を見下ろしながら低く呟き、ゼーウエルは残りの魔術師に向かって更に攻撃しようとして詠唱を始めたが…。

“待ちなさい…貴様等！勝手な事をするな！”

響き渡る甲高い声がゼーウエルと魔術師達を制止する。

「ラザニア様…！」

魔術師達は驚いていた…勿論ゼーウエルも動揺を隠し切れずにいたのである。

驚いたような表情を浮かべるゼーウエルと魔術師達を尻目にラザニアは「ふん」と嘲笑いながら

「貴様等…私はゼーウエルをディアハートに連れて来いとは命令したがゼーウエルを殺せとは言ってなくてよ………」

と言った。

魔術師達は顔を真っ青にしながら、慌てふためいていたが、ゼーウエルは大して慌てる事無く、逆に冷静にラザニアを見据えていた。

「ゼーウエル？うふふ…また私やあの方の許可無く街を歩いたわね？前にも言った筈よ、貴方が歩き回ったら被害を被るのは私やあの方なのだからね、分かってやっているのかい？」

「…申し訳ありません…ラザニア様、法王様の許可無く見張りを行っていた事、お許し下さいませ」

ゼーウエルは無表情で謝罪の言葉を述べるが、その様子を見たラザニアは表情を一変させて

「馬鹿にするんじゃないわよ！ゼーウエル…貴様が法王様の部屋にあつた水晶を動かしていた事位私分からないとでも思つて？レイザが動かないと思つたら法王様暗殺などと言つ恐ろしい事を考えていたなんてね！」

ラザニアは怒りのままにゼーウエルに襲い掛かるうとしたが、ゼーウエルは易々とかわし

「…貴女が過去に私に対してやった事をそっくりそのままお返ししようと思つただけですよ、ラザニア様」

嘲笑を浮かべ、ラザニアに殴り掛かる。

「忘れた等とは言わせないぞ、ラザニア！貴様のせい…貴様等の

せいでこの家は滅茶苦茶になってしまったのだ…貴様が欲に溺れなければイリアはっ！」

「お黙り！ゼーウエルの分際で！」

ゼーウエルの台詞を遮り、ラザニアはゼーウエルに掴まれた腕を振りほどき、そのまま頬をひっぱたく。

パンツ！

ラザニアがカ一杯ゼーウエルの頬をひっぱたく音が響き渡る。

ゼーウエルはひっぱたかれた頬を押さえながらラザニアの顔を憎々しげな表情を浮かべて睨み付ける。

「何だいその反抗的な瞳は？私に逆らうつもりかい……ゼーウエル
！」

「…ラザニア…」

ゼーウエルは沸き上がる怒りと憎しみを抑える事が出来ずに魔法詠唱を始めようとした。

それに気付いたレイザはゼーウエルの腕を掴み

「…なりません！ゼーウエル卿！」

そう言って魔法詠唱を止めさせた。

その声にゼーウエルは我に返り、詠唱をやめてラザニアを睨む。

二人のやり取りを見たラザニアは笑いながら

「まだ抑える事が出来ているのかい？」

と、馬鹿にするような言葉を吐き、勝ち誇った笑みをゼーウエルに向ける。

「良かったわね、ゼーウエル…レイザがいて…レイザがいなければ今頃化け物に成り下がっていたのにな！」

無理矢理怒りを押さえ付けるゼーウエルを見つめ、狂った様な笑みを浮かべながらゼーウエルに近付くと襟首を掴んで言い放つ。

「私や法王様に逆らった事を…一生悔やむがいいわ…哀れなゼーウエル…何れ跪かせてやるわ！」

魔術師達はラザニアの狂った笑顔に戸惑っているとラザニアは魔術師達を睨み付けて

「早く引き上げるわよ！」

と言って部屋から出ていった。

バンッ！

力任せに扉を閉めた音が響き渡り、やがて消えていった。

ラザニアが出ていったのを確かめるとゼーウエルは荒々しい息を繰り返しながら膝をついた。

「はあ…はあ…危なかった…暴走するところだった…くっ！」

ゼーウエルは顔を歪ませて、ひたすら荒々しい息を繰り返している。

「ゼーウエル卿、大丈夫なのですか？」

レイザが心配そうな表情をしながら声を掛けるとゼーウエルは苦しそうな笑みを浮かべながら

「ああ…大丈夫だ、少々魔力の流れが乱れただけだ…レイザ、心配するな」

「…だといいのですが」

レイザは安堵しながらもゼーウエルの様子を見ながら、どうしようもない不安を抱いていた。

ゼーウエルは荒々しい息を繰り返しながら、レイザに告げる。

「まさか此処で魔力の流れが乱れたとは…先手を打たれてはまずい…レイザ…予定を変更する。明日、ヘレナに向かえ。今の時点ではラザニアに対抗出来る力はない…だが、シャー青年なら何か聞いているかも知れん」

ゼーウエルの台詞にレイザは頷く。

「分かりました、明日にでもヘレナに向かいます…」

そう言っただけとお辞儀をしたレイザは背を向けて、部屋を去ろう

とするとゼーウエルは「ちょっと待て」と引き止め

「私も直ぐに行こう、しかし深入りはするな。気持ちは分かるがシヤー青年に罪は無いのだからな……」

と言った。

ゼーウエルの台詞にレイザは一瞬だけ立ち止まり、何かを言おうとしていたが…何も言わずに扉を開いて出て行った。

「…レイザ…深入りはするな…」

ゼーウエルは再度レイザに告げたが、彼に届く事はなかった。

灰色の空の下…ゼーウエルは聖職者のローブを身に纏い、急いで駅まで向かう。

聖職者の格好をしていればこの地域では通じるからだ。

ヘレナに向かう聖職者も多かったためこの格好ならば怪しまれずに済むだろう。

だが問題は別にあつたのだ。

「直ぐ近くにライハード家があると言うことに気を付けなければなら…」

ヘレナに向かう手段が列車しかないのが不便なところである。

元々ライハード家とは敵対関係にあり、貿易等はおろか争いが絶え

なかった為にライハード行きの船は首都から遠く離れた港町にあるのみである。

移動も徒歩のみなのであまり効果的ではないので列車から列車へと乗り換えながらヘレナへ向かうしかないのだ。

レイザが憎しみに囚われて深入りしない事を、過ちを犯さない事を祈りながら列車の窓から見える景色を見つめていた。

列車から列車へ乗り換えながら3時間後：ゼーウエルはヘレナ近くの町の駅に到着した。

駅近くのバスを経由して約10分程である。

徒歩ではラザニア達やライハード家に気付かれるためバス等の乗り物を経由しなければならぬ事に内心毒づきながらも急いでバス停まで走った。

バスはもうバス停前まで止まっており、もうすぐ出発前だったのでゼーウエルは急いでバスに乗る。

バスに乗っている間はもう焦りしかない…先手を打たれては困る。

ラザニアに対抗する為にもレイザの為にヘレナに向かわなければならぬ。

祈るような思いでバスに揺られていた。

ヘレナに到着するとゼーウエルは焦りながら手に持っていたバス代を払うと急いで降りた。

歩いて間もなくヘレナに辿り着いたゼーウエルは村から漂う陰険な空気に眉をひそめた。

（嫌な予感がする…）

ゼーウエルは焦りながらヘレナに住んでいる青年のところに向かう。青年の大体の居場所は分かる…ゼーウエルはただひたすら青年の無事だけを祈っていた。

段々入り組んだ道になっていくが、彼は難なくその道を歩く。

暫く歩いていると、辺りに赤黒い何かが飛び散っているのが分かる。

（まさか！）

ゼーウエルは足を速めた。

程無くして家が見え、出入口が見えた途端、ゼーウエルは驚いたような表情で見つめる。

「そんなバカな…！！」

それもその筈だ、銀髪の青年が血だらけで倒れていたのである…シヤー青年である。

「まさかレイザ…！！」

シヤー青年が決定的な何かを掴んだのかも知れない…レイザが感情

的になって彼を殺したのかも知れない…。

ゼーウエルはいよいよ焦ってしまった。

シャー青年の死に驚いたゼーウエルだが、もう少し様子を見ようと思ひ、さっと物陰に身を隠した。

誰かの話し声が聞こえる…。

「坊や、俺はシャーに言ってくるからね」

「兄貴、僕…待ってる。早く伝えた方がいいよ、シャーさん喜ぶから」

「そうだな…じゃ…言ってくる」

そう言って此方へ走って来る足音が聞こえた。

どうやらシャー青年の知り合いのようだと、ゼーウエルは思った。

…そろそろ玄関のところまで来ても良いのだが悲鳴は聞こえないという事は裏口から入ったということだろうか。

幸い、近くの木に身を隠しているゼーウエルの姿は見えない。

ゼーウエルは早々に其処を立ち去ろうと思ひ、隙を見計らってその場を立ち去った。

シャー青年の家から約20メートル辺りまで走ると…。

「うわあああ！」

空を引き裂くような鋭い悲鳴が聞こえた。

シャー青年の無惨な姿を見てしまい、ショックを受けたのか…と思
いながらゼーウエルは大都市セント行きの定期船のある小さな港町
まで一目散に走った。

見つかるわけにはいかないという思いだけだった。

シャー青年の無惨な姿…レイザはやはり感情に身を任せてシャー青
年を…。

(深入りするなと言ったのに…シャー青年には何の罪も無いのに…
悲劇を繰り返してはならないと言ったのに)

あの時、やはりレイザを無理矢理にでも引き止めていけば良かった。

ゼーウエルはレイザを止められなかった事を悔やみながら、もつど
うしようもないと諦め、定期船の切符を買い、直ぐに来た定期船に
乗った。

レイザを止められなかった事を悔やみながら、定期船に乗ったあと、
列車に乗って…やっこの思いで塔に戻るとレイザが焦った様子で駆
け寄った。

「ゼーウエル卿！」

「レイザ…」

レイザは驚きと恐怖から体を震わせながら言った。

「どういう事ですか？ シャー青年が…射殺されていたというのは…」

ゼーウエルは自分がやったにも関わらず何故レイザがこれ程まで動揺する理由が分からなかったので

「…お前がやったのではないのか？」

と、聞いた。

ゼーウエルの問いにレイザは激しく首を振りながらこう答えた。

「違いますよ！！ シャー青年は2時前後に射殺されていたと報道されていたではありませんか…指令を受けたのは0時半…此処からヘリナまではどう頑張っても3時間掛かるんですよ!？」

と言いながら新聞をゼーウエルに渡す。

ゼーウエルは新聞を見たあと信じられないと言った表情で

「…何だと？ シャー青年は2時に殺害された!？」

ゼーウエルはレイザの肩を揺さぶりながら聞いた。

シャー青年に会いに行こうと言ったのが0時半前後なので、どう考えてもレイザやゼーウエルがシャー青年のところまで行くのは不可能である。

ゼーウエルの予感当たっていた…やはり奴等が分からない筈がな

いのだ。

「やられた！やはり先手を打たれた…」

ゼーウエルは悔しそうに呟いたが気付くのがあまりにも遅すぎた。

先手を打たれた事にレイザもゼーウエルも悔しそうな表情を浮かべ、唇を噛み締めたが直ぐに首を振って頷いた。

（まだ終わったわけではない…必ず…必ず復讐してやる！）

そして…悲劇の齒車が回り始める。

全ては欲望の為に、全ては復讐の為に。

欲望に溺れる者達と復讐を誓った者達…。

何も生み出さぬ…無益なる闘いの幕が開けようとしていたのである。

果たして何も生み出さない悲しみだけが待つ闘いに身を投じた彼等は何を見出だし、何を得るのだろうか…。

第四節：冒険者と騎士の出逢い（前書き）

誇り高き騎士は冒険者を待っていた

光を抱く者達が出逢い、手を取って戦いの中へ向かう

彼らの願いは唯一つ、悲劇の輪廻を止めてありふれた日常を送る平和な世界

第四節：冒険者と騎士の出逢い

宿屋にて…。

「レディンさん…本当に行かれるのですね」

宿屋の娘にレディンは頷いた。

「ライハード周辺に良いものを見つけましたから…今までありがとうございました」

良い観光場所を見つけたレディンは早速ライハード地方に旅立つ事にした。

娘は少し名残惜しそうにしながらも

「お気をつけ下さいませ…レディンさん…貴方の行く道にどうか光がありますように」

深々と頭を下げると、レディンも

「貴女もどうかお元気で…お身体を大事になさって下さいませ」

レディンはにっこりと微笑みながら言うと、娘は照れたような笑みを浮かべながら頷いた。

レディンは背を向けて歩いて行く姿を娘は見送っていた。

「レディンさん…お気を付けて…」

手を振りながら、娘は見えなくなっていくレディンの姿をいつまでも見送っていたが、完全に見えなくなるとため息をつきながら宿屋の部屋に戻って行った。

レディンは、ライハード城下町を目指して、ゆっくりと歩いた。

ライハード城下町と言っても城からは距離があるので、城下町とは言い難い。

そもそもライハード城は元は軍事国家では無く大貴族の家だったのだが、ファレス地方のアルデイ家に対抗するために何もかも発展させ、大貴族の家から町や村をまとめる国家にまでなったのである。

しかし、アルデイ家とは対立していたままであり、和解の目処は立っていない。

そして…… 6年前に奇妙な事件が起こった地方でもある。

それは村人『シャー青年』が殺されたと言う事件である。

皆が『シャー青年』と言っている為に何時しかこの事件は『シャー青年殺人事件』と言われているのだ。

この事件の犯人が特定され、捜査を始めていたが今も未解決のままであった。

『シャー青年』を殺した犯人と言われる人物の名は、ライハード地方の辺境の地にある闘技場で常に勝利を修めている剣闘士『レイザ』である。

この『レイザ』の事については何処に行っても話題が尽きない。

ストレートで長く靡く（なびく）黒い髪と深紅の瞳が印象的な美男子らしく、女性にとても人気がある剣闘士でもある。

最も、仮面を被っているために顔は見えないが、誰もが美男だと言っているようだ。

勿論、レディンもこの剣闘士の事については噂話程度だが知っている。

初めてこの『レイザ』の事を酒場の若い女性から聞いた時、剣闘士『レイザ』の姿を実際に見てみたいと思った。

それから色々な噂を集めてはつきりと分かった事は、美しく…凛々しく…神秘的な何かを持っていた。

一体彼は何者なのだろう、何故剣闘士なのだろう、何故そんなにも魅力を感じてしまうのだろう。

惹き付けてしまう何かがあるのかも知れない。

旅を続けているうちに彼は、神秘的な存在である剣闘士の素性を知る事が今の自分の好奇心を最大限に満たすものになるだろうと思っ

た。

城下町に着くと、真っ先に向かうのは酒場。

酒場には色々な情報を持っている人間がいるからである。

後は…唯一、旅人が寛げる場所が酒場になりつつあると言う事だ。
物騒な事件のせいで警備が厳しくなっており、ゆっくりと観光をするどころではなかったのだ。

シャー青年の他にも多数の聖職者や商人が殺されていると言う事態にまで発展し、総力を上げて捜査するもの全く手掛かりが見つからない。

一部の人間は『隣の家がライハード家の地位を落とす為にこんな事を行っている』と言う噂まで流れている。

それ位アルディ家とライハード家は対立していると言うことらしい。
だが、比較的自由に開放的なライハード家と比べてアルディ家は閉鎖的で統一主義であり、ライハード家と比べて後継者も多く二度も権力争いや派閥争いを起こしている。

一度目はアルディ家の長男であるセイシエルと次男であるアイシアによる権力争い…。

アイシアが勝利し、セイシエルに味方をした者は全て処刑され、セイシエルはアイシアの側近となり監視下に置かれたと言う。

二度目はそのセイシエルがアルディ家に対する反逆行為を行った事で争いが起きる。

アルディ家の子供は長男セイシエルと長女イリアと次男であるアイシアであったが、実際にはセイシエルの下にもう一人弟が居たらし

く、この弟はセイシエルの母親が密かに違つ男と結ばれて生まれた子供。

アルデイ家では女の不倫は男の不倫より罪が重かった。

ましてアルデイ家の人間：子供の両親は裁判で死刑が確定し、処刑されたのだ。

その時は子供の処刑は認められなかったが、その子供がアルデイ家の幹部になった時に、真実も知らないまま何と自身の姉と結ばれ、子供を身籠つたと言う。

所謂『近親相姦』をしてしまったと言う事だ。

当然罪は不倫より重く、子供は処刑され…かけたところをセイシエルが脱走させたのだ。

セイシエルの行為はアルデイ家に対する反逆だと言われたが、周辺の貴族は子供に真実を隠し通した結果がこうなり、父親違いとは言え自身の弟を庇つたセイシエルの気持ちも分かると言う事でまたしても争いが起きてしまう。

アルデイ家を憎むライハード家でさえ長男であるセイシエルが哀れだと言うことでセイシエルを擁護する側の援助をし、ひとまずはセイシエルは牢獄塔ディアハートに送られ、そこで何週間か服役すると言う軽い刑だけで済んだ。

一方、不幸なのはその子供である。

処刑は免れたが何もかも奪われた子供が果たして黙っているだろう

か？

そんな争いが起きてから大分年月が経つと、アルデイ家の最高幹部が何者かに殺されたと言う事件が起きる。

それから更にアルデイ家の最高幹部が次々と行方を眩まし、遺体となって発見されたと言う事件の調査の矢先にシャー青年が何者かに銃殺された事件が起きる。

そして今では警戒を強めており、易々と何処かへ行けなくなっってしまったのだ。

興味本意で調べたらこんな争いや事件が各地で起きていたと言う事が分かったのだ。

分かったところで役に立つかわれれば素晴らしい知識と褒められる…だけなのだろう。

学者になろうとは微塵も思った事はない。

そもそも自分は当てもなくふらふらと流離う旅人である。

興味のあるものを徹底的に追い求めて、興味のないものにはスルーする。

アルデイ家の事については興味があつたから調べたまでであり、それを有効に使おうとは思わなかつた。

以前、別の観光地に行って歩き回っていたが、夜が更けたので宿屋に向かったレディンは雑誌を読んでいた時に一緒の部屋に泊まって

いた旅仲間

『そこまで調べているなら城の調査兵募集っていうやつに応募すればいいのに』

と言われたのだ。

その場で出会った旅仲間と一緒に宿屋の部屋を共にする事は普通であり、それを言った人物も観光地を歩いていたレディンを見つけて声をかけてきて、いつの間にか話し込んでしまった為、そのまま一緒に泊まったと言う事になっただけだった。

あの時は多分曖昧な返事をしただけだったと思う。

今は絶対に応募したくないが。

そんな事をぼんやりと考えながら出てきた酒をまた一杯飲み干した。

レディンがあまりにも上の空でため息ばかりついているのを見た酒場の主人は

「さつきからどうしたんだい？兄ちゃん、椅子に座った時も上の空だったし…。何か考えているのかい？」

レディンに酒を出しながら聞いてきた。

レディンは苦笑しながら

「ライハード地方もなかなか重苦しい雰囲気漂っていて自由に歩けやしないと思ってさ。前も闘技場近くに城の兵士が何人もいたし

な」

と、答えた。

酒場の主人も頷きながら

「仕方ないかな。お隣さんとは未だ緊迫した様子だし西の村へレナでの殺人事件も起こってさ。未だに犯人が捕まってないんだとさ」

「へえ。シャー青年の事件。犯人はもう分かっているのに逮捕出来ないのかよ」

レディンはまた苦笑しながら主人に聞いてみた。

主人は

「それが言われてきた犯人じゃないらしい、犯人と言われてきた『レイザ』って野郎は8年前に右腕の腱切りをされたらしいからな。利き腕ではないが銃は使えんだろうな。実は腱切りされたっていう事は今同時に名を知られている『ゼーウェル』も知らなかったっていう話だからな……」

それは知らなかった。レディンは感心したように頷いた。

「やっぱり凄いなあ。ゼーウェルってよく聞くが。レイザと何か関係あるのかな」

「あはは、色んな奴が酔っ払って話を洩らすからな。しかし関係性は分からんな、アルディ家に反逆を成す奴等として名を知られているがな」

と言って、この話はお仕舞いと言わんばかりに主人は空っぽのグラスにもう一杯酒を注いでレディンに飲むよう言った。

「飲みな、これは俺の奢りさ」

そう言われ、レディンは笑みを浮かべながら「ありがとう」と言って、その酒を飲んだ。

どうやらこれ以上の事は話してはまずいようだ…と思い、その後は主人と会話をしたり絡んで来た旅人や冒険者達と下らない自慢話や互いに知りたがっている観光場所の情報を交換したりしながら昼の時間を過ごしていた。

しかし…治安がまあまあ良いとは言えど此処は酒場…こういった輩も来るのである。

「またかよ…おい、兄ちゃん…此方に来るぜ」

近くにいた旅人が教えてくれた時にはもう近くにいたのである。

大柄の…如何にも盗賊と言わんばかりの男の隣にこれまた盗賊風情の男…。

出来れば大騒ぎになるような事は避けたいレディンは周りを見渡したが、周りはすっかり闘技場の観客と化しており、煽るような言葉や野次を次々と飛ばしている。

(やれやれ…此処まで騒ぎが大きくなるとは)

此処まで騒ぎが大きくなって今更逃げ出せば今よりもっと酷い野次が飛ぶに違いない。

と言う事でレディンはうんざりしながらも渋々二人の男のケンカを買っことにした。

相手は2人…闇雲に攻撃をしては此方に不利な状況をもたらすだけだ。

向こうが攻撃を仕掛けたら此方も一気に反撃しようか。

でなければ、もしも騎士団達に来て事情でも話せと言われたら、此方が積極的に喧嘩を売ったように言われて騎士団達に目をつけられる。

そういった事は断じて避けたい。

しかし、レディンの心配はどうやら余計なものだったらしく、向こうから手下が短剣を振り回して襲い掛かる。

短剣をまずはどうにかしなければと思い、振り上げようとした腕を掴んで制止し、そのままお腹を素手で殴る。

「うっ！」

相手が呻いた隙を狙って短剣を奪い取り、自分の装備に加えた。

今さっきまで武器が無くてどうしようか悩んでいたのである。

思わぬ争奪品が得られたので手下には感謝だ。

次は親玉…さあどうする？

レディンは反撃しようと思構えていたが…。

「そこで何をしている!？」

酒場に入って来たのは軽鎧を身に付けた警備兵達である。

…鎧には紋章がある…と言う事は騎士団であると言う事だ。

「酒場でこの様なみっともない喧嘩をするとは…貴様等、どうなるか分かっているだろうな」

警備兵達はそう言いながら2人の盗賊を素早く捕らえた。

どうやら盗賊達は前々から追われていたようで騎士団達に連れて行かれるのをレディンは見た。

残ったのは他の警備兵達が身に付けていた紋章とはまた違う黒髪の男と数人の部下である。

黒髪の男は呆れながら、しかし感心したように

「見事ではあるが…この様な場所で喧嘩とはあまり誉められたものではあるまい。一応お前にも来てもらっぞ」

最早レディンには抵抗する術はない。

城に連れて行かれたと思ったら地下に降りた黒髪の男に連れて行か

れ、牢屋に入れられた。

レディンは薄暗い中で天井を見上げながらも何度ついたか分からない溜め息をついたのである。

一方…会議室では。

「ジャン、街の警備…ご苦労であった」

先程の黒髪の男…ジャンと金色の髪と青い瞳が印象的な…そう、彼こそが騎士達を指揮している団長アレンである。

ジャンに労いの声を掛けた後、アレンはその後の事をジャンに聞いた。

「で、どうであった？異常無しか？」

と聞かれたジャンは少し苦笑しながら

「…盗賊の輩2人と…恐らくは冒険者であろう男が酒場で乱闘騒ぎを起こしまして…盗賊の輩達は前々から隣町等で強盗や乱闘騒ぎを起こしており漸く捕らえました。一応その場にいた冒険者は見事な働きをしたものの…その冒険者は武道家と言つ事で牢屋で反省を促す…と言つたところです」

ジャンが報告し終わるとアレンは頷き、

「ふむ…お腹に軽く一撃を与えただけで気絶させたとは…その冒険者、名前は？」

と聞いたところ、ジャンは答えた。

「冒険者の名前はレディン…だそうです」

ジャンの言った名前にアレンは目を見開き、驚いたような声を上げた。

「レディンだと！？ジャン、酒場で乱闘騒ぎを起こした冒険者の名前は確かにレディン…なのか？」

驚いたアレンはもう一度ジャンに聞くと、ジャンは頷き

「確かにレディンと名乗っています」

と、言った。

「レディン…何故…この地に居るのだ……」

アレンは驚きを隠せず、動揺しているとジャンは怪訝そうな顔をしてアレンに聞いてみた。

「あの…何かあるの…ですか？」

するとアレンは…ゆっくりと頷き

「…私の推測が当たっていたとしたら…レディンは恐らく17年前の『異端狩り』と6年前の『狩人殺し（シャー青年暗殺事件）』に関わっているのだ…。まだ分らんが…とにかくレディンを釈放して此処に連れて来てくれ、ジャン」

それを聞いたジャンも頷き

「はっ！至急連れて参ります。」

と、言つて足を速めながら部屋を出て、牢屋のある地下に向かった。

そのレディンはと言うと、牢屋の中で、ただじつと座っていた。

脱走も考えてみたが酒場での乱闘騒ぎ… たつたそれだけの為だけに脱走するのは愚かな事だ。

2、3日も経てば釈放されるだろう。

ならば大人しく牢屋の中で待てば良い。

そついう訳でレディンは溜め息をつきながら牢屋の中で釈放されるのをじつと待っていた。

しかし、レディンの予想は見事外れたようだ。

見張りを務めているであろう何人かの騎士が牢屋の扉を開けた。

「出る」

淡々とした声でレディンに出るよう告げた。

2、3日は牢屋の中だと思っていたレディンはいきなりの事に戸惑い、騎士達の顔色を窺っていた。

「ぐずぐずするな、早く出る。団長にお前を連れて来るよう言われたのだ。早く出る」

レディンがなかなか出ない事に苛立っているのか若干声が荒くなっていた。

何故、団長が？と、疑問を抱いたが取り敢えず釈放するという事だ…それに騎士をこれ以上苛立たせる事は避けたいレディンは重い腰を上げ、騎士の後についていく。

騎士の後をついていきながらレディンは辺りを見回した。

何せただの冒険者が城の中を歩いた事などなかった為、見るもの全てが珍しい。

剣を構える騎士の銅像…壁に飾られた絵画…全てが珍しい…その一言である。

地下から1階に繋がる階段を上り、騎士とレディンは1階の広間まで来た。

すると騎士はそのまま2階に上がる。

レディンは戸惑いながらも2階に上がり、ひたすらついていく。

暫く歩くと、騎士は扉の前で立ち止まり

「アレン様、レディンを連れて参りました」

と、言うと扉の向こうから

「うむ、入れ」

と返ってきた。

騎士はレディンの方を向き、中に入るよう促した。

レディンは頭を下げて、恐る恐る扉の中に入る。

ガチャン。

扉が閉まる音が響き、レディンは更に緊張する。

目の前には騎士達を指揮する団長…その隣には先程酒場で見掛けた黒髪の男…恐らく副団長だろう。

「いきなり済まなかったな、冒険者レディン。まずは紹介しなければな…私はアレン、レディンを連れてきたこの男は副団長ジャンだ、以後…よろしく頼む」

「ジャンと申します、よろしくお願い致します。レディン殿」

ジャンが頭を下げるとレディンも頭を下げて

「アレン様にジャン殿…レディンと申します。此方こそよろしくお
願い致します」

そう言った後、レディンは恐る恐る顔を上げて聞いた。

「ありがとうございます…ところで、お聞きしたい事があるので

が…」

「何だ？」

「何故、こんなにも早く私を釈放したのでしょうか。たかが乱闘騒ぎとは言え2日以上は牢屋の中で反省を促すのが普通だと思ったのですが…」

2人の顔色を窺いながら質問してみたが、レディンの疑問は最もである。

酒場等の公共の場で乱闘騒ぎを起こした人間は牢屋で2、3日は反省を促さなければならぬ。故意に襲撃した場合や人を刺した場合などは当然もつと重いが、今回の場合は相手の2人組から喧嘩を売られたとは言え、場所も場所だがどういふ人間であれ喧嘩を売った男を一撃で気絶させてしまった罪は重い。

それに短期間ではあるが格闘士としての訓練も経験しており、強い一撃を与えてはならないと言われている。

なのに半日足らずで釈放されるのはレディンにはよく分からないのだ。

一体、どうして自分みたいな冒険者をこんなにも早く釈放したのだろうか。

怪訝そうな顔色をするレディンにアレンは一息入れて

「何故、こんなにも早く釈放されたのか…と考えているようだな、レディン。ジャン、隣の部屋で待機してくれ」

「…畏まりました」

そう言うとジャンは隣の部屋に向かった。

アレンはレディンの方に視線を移し

「君は冒険者だったな。そして、記憶喪失と言う事も聞いた」

「…何故知っているのですか？」

レディンの疑問にアレンは

「一応調べなければならぬからな。知らなければならぬのは当然だろう…だが君を釈放するのは勿論他に理由があるが…」

と言ってレディンの方をじっと見た。

レディンは緊張した面持ちでアレンの目をじっと見た。

目を反らしてはならない…レディンはそう思い、ただアレンの目をじっと見た。

アレンも満足そうに頷きながらも

「釈放した理由は他にもあるが記憶喪失者である君に早期釈放の理由を話したところで理解されるとは思っていない。だから1つ、君の冒険者としての腕を見込んで頼みがあるのだ」

その台詞にレディンは更に緊張した。

一体何を頼むつもりなのだろうか…それよりも問題なのは自分の事を知っていると云わんばかりの台詞…。

レディンは、ただただアレンの様子を窺うばかりであった。

そんなレディンを見たアレンは一息ついて話し始めた。

「君には向こうの部屋で待機してもらっているジャンと共に西の村へレナへ行つて貰いたい。実のところ我が軍は調査員が大変不足しており、今の状態ではアルデイ家の攻撃を受けたら壊滅されてしまうのだ。我が軍のほぼ全ての兵に守備に当たつて貰う為、ヘレナでの事件調査がままならなくなってしまうのだ。それは私としては大変悲しい事であり、調査がままならないまま犯人の思うがままにされるのは非常に遺憾である。勿論、タダとは言わん。それなりの報酬もある。冒険者には資金は欠かせない…だろう？レディン」

そこまで言った後、アレンは微笑んで「明日までゆっくり考えてくれ」と言った。

レディンは少し考えた。

調査を引き受けて…資金も貰える。

今までと比べたらかなり危険なものになるに違いはないが報酬もそれだけ大きいだろう。

何よりこの男は自分の事を知っているかもしれないのだ。

メリットとデメリットを比べれば明らかにメリットの方が大きい。

引き受けてみる価値はあるのだから。

レディンは頷き、そして

「アレン様、先程の話の事なのですが」

「ああ、もう決まったのか？」

アレンはやや驚きながらもレディンの答えを待っている。

「はい、先程の依頼…お引き受け致します」

そう答えた後、レディンが頭を下げたのを見たアレンは満足そうに笑いながら

「詳しい事は向こうにいるジャンに聞くといい。私も用事が終われば直ぐに向かおう」

「畏まりました、アレン様」

レディンはもう一度アレンに向かって深々と頭を下げ、ジャンのいる隣の部屋に向かった。

「レディン殿」

部屋の扉を開けるとジャンは既に準備を整えていた。

レディンはそれよりもジャンの容姿に驚いてしまった。

女性か？それとも少年か…とにかく細身なのだ、自分よりも。

顔もどちらかと言えば男性と言うよりは少年に近く、随分幼く見える…。

年齢的には20代前半か若しくは10代後半…。

ジャンの年齢が気になり始めたレディンは失礼なのを承知の上で思い切つて聞いてみる事にした。

「失礼ですが…ジャン殿はおいくつですか？」

「えつと…27です」

27歳！？

レディンは驚いてしまった…ジャンはレディンよりも3歳も年上なのだ。

しかしどう考えても27には見えない。

もっと若く見える。

「レディン殿、どうかなさったのですか？武器ならそこにある剣や弓矢を装備してくださいませ」

「わ…分かりました…ジャン殿」

笑顔で言われ、レディンは若干顔を赤らめながら頷いた。

副団長の容姿に驚きながら剣や弓矢を装備する。

矢のチェックを何回も行ったリ武器の手入れを行って、レディンはジャンに大丈夫だと頷いた。

ジャンは安心したように胸を撫で下ろしながらも

「良かった。レディン殿は随分武器の扱いに慣れているのですね…
剣や槍は何とか扱えますが…弓矢になったらもう…」

と苦笑しながら言ったジャンにレディンは

「接近戦が主だから大丈夫じゃないですか？」

と答えた。

ジャンはまた苦笑しながら

「そうなんですけどね。でも飛空系とかになるとやはり弓矢は役に立ちますよ…私は一生使う気もありませんが」

そう言った後、ジャンはレディンから目を逸らし、安置されている弓矢をじっと見ていた。

睨み付けるような、強い決意のようなものをジャンの表情から感じる事が出来た。

その表情は怒りと憎しみと悲しみ…様々な負の感情で形成されている。

何かある…。

レディンはジャンンの表情から恐ろしい何かを感じる事が出来た。

アレンは気付いているのだろうか？

そんな事も考えたりした。

怖い…ジャンンからは何か…とても強い気が滲み出ている気がして怖かった。

背筋を凍らせるには十分過ぎる何かか此方に伝わってくる。

「ジャンン殿？」

レディンはジャンンが何故そんな表情をしているのか疑問に思い、また…その滲み出てくる何かか怖くて思わず呼び掛けた。

呼び掛けに気付いたジャンンはレディンの方に振り向いたが、さっきまでの負の感情に満ちた顔色ではなく、元の人当たりの良い彼に戻っていた。

「申し訳ありません…！色々と考えていたもので…レディン殿、何か不具合でもありましたか？」

慌てて応じるジャンンにレディンは内心ほっとしながら

「いえ、少し気になった事がありました…レディン殿って言うのは少し…ほ、ほら！俺は冒険者ですから…レディンで良いですよ」

と焦りながら言った。

「しかし、レディン殿……」

「ね？ジャン殿…呼び捨てでお願いしますよ」

ジャンはいきなりの申し出に戸惑いながらレディンの顔をじっと見つめてみた。

レディンはずっと笑っていた。

「…行きましようか、レディン」

ジャンは再びレディンから目を逸らしながら小さい声でそう言った。

レディンは笑って頷き、ジャンの後をついていく。

1階に降りるとアレンが待っており、2人に向かって

「期待しているぞ。レディン、ジャン」

と言った。

2人は互いの顔を見つめた後、大きく首を横に振り、背を向けて城を飛び出した。

2人を見送ったアレンはため息をつき

「……ジャン…狙われないといいが…その為のレディンなのだな。取り敢えず気は進まないが…おい」

アレンが合図を送ると

「なあに？兄さん」

金髪の少女が柱の陰から飛び出してアレンの隣まで駆け寄って来た。

「ヘレナに送った兵士達だけではジャンに押されてしまつかもな。だからちよつとお前も行ってこい」

とアレンが言うと少女は

「もつちろん！しかもジャンの隣にいた人がかなり可愛いし！笑った時の顔がかなり可愛かったもん！だから行って来るね」

少女は満面の笑みを浮かべ、はしゃいでいるのを見たアレンは呆れながら

「一応…お前にも兵士をつけておく…私が本当は行きたいが…少し調べなければならぬから直ぐには行けないのだ…頼んだぞ、ティアナ」

ティアナと呼ばれた少女はアレンの頼みに笑顔を浮かべてピースをすると、玄関で待機していた兵士と2人でジャン達を追いかけた。行った。

「やれやれ…フェードに頼んだが…あのティアナの性格だからな…。押される可能性も否めないが…どうしても私は今は離れられないからな」

1人呟いた後、アレンは窓に視線を移し

「ゼーウエル、いつまでこんな無益な闘いを続けるつもりだ？お前にはもう分かってているのではないか？もう終わらさなければならぬと…。少なくとも、私は早くこんな闘いを終わらせてお前と話さなければならぬ、レイザの事も含めて」

1人呟き、俯いて考えていたが数人の兵士達がアレンを呼んでいた。

アレンは直ぐに行くと言った後、もう1度窓の向こうに視線を移し

「悲しい反逆者に成り果てたものだ…。アルデイ家に生まれなければきつとこんな惨めな思いをせずに済んだらうに…。ゼーウエル。せめてレイザだけはこれ以上傷付けないでくれ」

1人呟いた後、アレンは急いで2階へと上がっていった。

一方…。

「此処が…もう1度来るとは思っていなかった」

俯いて低く呟いた後、顔を上げた。

その顔は酷く歪んでいた。

「さて…ジャン・ブルネーゼ…覚悟してもらおうぞ、恨むならシャルを恨むんだな」

不敵な笑みを浮かべた途端に風が舞い上がり、長い髪も吹き荒れる風によって舞い上がる。

剣士の風貌をした若者はとても美しい顔をしていたが、その美しい顔は妖しい笑みで歪んでいた。

獲物が来るのをじっと待ち構えていた獣のようだった。

「俺は、降りるわけにはいかない」

その剣士はゆっくりと向こうを振り返った。

“ 見つけた ”

2人組で歩く夫婦を見た若者は不敵な笑みを浮かべ、さっと動き出し、やがて闇の中に紛れて見えなくなった。

数時間後、男女の無惨な姿を村の人々が悲鳴を上げたのである。

まだ、始まったばかり。

まだ…レディン達は何も知らない。

その頃…ジャンとレディンはひたすらヘレナの村を目指していた。

城からヘレナの村まではかなりの距離がある。

ジャンは地図を取り出して確認する。

まずは1番早い方法で行けるのは城を右折したところに見える『うねる坂道』を下ると『グリーンフィールド』にたどり着く。

『グリーンフィールド』を中心を真つ直ぐ歩いてヘレナに行くと言
う方法。

しかし『グリーンフィールド』には何やら得体の知れない魔物が通
りかかる人達を狙うのであまりおすすめ出来ない。

次は少し歩いた後に東に回り、『グリーンフィールド』を大きく西
に回って『ライトロード』を渡ってヘレナに向かう方法がある。

『ライトロード』を渡り、少し歩いたら南東の方に廃墟の遺跡があ
る。

気にはなるが今はヘレナに行くのが最優先なので、南東の遺跡は無
視してヘレナに向かえば大丈夫だろう。

西回りに回るとあまり強い魔物は出現しないので戦力的にも納得の
行くルートだ。

「では少し歩いた後に左折しましょうか」

ジャンの問いかけにレディンは頷いた。

今は危険なルートを選ぶべきではない事はレディンにも分かってい
る。

しかし廃墟の遺跡は少し気になるが今は行くべきではないだろう。

ジャンは2番目の案を選び、少々遠回りではあるが安全なルートで
ヘレナの村の到着を目指して歩き出した。

彼等は悲劇に向かって一歩踏み出していたと言つ事など知る由もない。

第五節：燃え広がる灼熱

グリーンフィールドを大きく西に回りながら歩くジャンとレディン。2人は思った以上の距離があることにうんざりした。

いくら歩いても見えるのは同じ風景だから歩いてもつまらない。

真っ直ぐ行った方が良かった気もしないではないが、極力戦力を消費する事は避けたいのでこのルートを選んだ。

そう言えばグリーンフィールドに棲む悪魔は一体どれ程強いのか、どんな形態なのかを知りたいのも事実であり、ジャンに聞いてみた。

「さあ…詳しくは聞いてませんが討伐に向かった兵士達によると、生物だと認識した瞬間に姿を消し、空気に紛れて背後に回り、魔法弾を放つとか…もう何人も負傷しているみたいです。ただ、強さが今まで見た悪魔とは比べ物にならない程なので避けて通った方が良いみたいです」

ジャンは説明し終わると、また歩き出した。

グリーンフィールドを抜けるにはもう少し時間が掛かるようだ。

その後は特に話すこともなく歩き続けていると…

ガサツ！ガサツ！

草むらから獣が2匹飛び出してきた。

2匹共小型の犬の姿をした獣のようだ…。

苦戦する相手でもないので取り敢えず何とかしてしまふことにしようと思ったジャンとレディンは剣を抜いた。

ジャンに向かって突撃し、適度な距離で止まると、飛び掛かりながら噛み付こうとしたところをジャンは素早くかわし、そのまま横に

回って斬りつけた。

悲鳴を上げながらもう一度襲いかかったがジャンは難なくかわし、斬りつけた。

レディンも片付け終えてジャンのところまで走った。

「ジャン殿、終わりましたか」

レディンの隣で息絶えた獣を見たジャンは一瞬だけ驚いたが、直ぐに納得して

「…魔法…使えるのですね」

と言った。

レディンは笑みを浮かべて頷いた。

特別魔法を使えるわけではなくて、売られている魔法書と多少訓練さえすれば直ぐに身に付けられる程度のものである。

上級にまでなると魔法書と過酷な訓練と才能が必要になる。

たった1つだけ…才能がなくとも、魔法書がなくとも極められる魔法があつたが忘れてしまった。

「あ…夜ですね、レディン…ひとまずここで野宿…ですかね」

グリーンフィールドの中間点とも言える印である祠を見つけたジャンはレディンにここで野宿しようとすすめた。

異論はないのでレディンも頷いた。

祠の中に入ったレディンとジャンは岩の上に腰を掛け、レディンは地面に座った。

疲れたような表情を浮かべたレディンを心配そうな目で見たジャンは声をかけた。

「レディン、大丈夫ですか？もうそろそろ抜けると思っているのですが…」

「…そうですか…早くヘレナに到着して休みたいですよ」

「…そうですね…。早く、宿のベッドで横になりたいですね」

「…明日には着くと思います。ライトロードは短いですから直ぐに行けると思いますよ。もう、寝ましょう…レディン…」

ジャンは無理矢理話を終わらせると、レディンから背を向けて俯いた。

レディンはジャンの様子に違和感を感じたが、何も聞いてはいけな
いと思ったので何も聞かなかった。

夜は完全に更け、レディンは膝に顔を埋めて眠った。
辺りは気味が悪い程、静かで魔物の気配さえしなかった。

「……………シャルル」

ジャンはレディンに聞こえないように呟き、虚ろな瞳でレディンの
様子を見ていた。

何故か苦しい…。

レディンは苦しみのあまり顔を歪めた。

痛い…痛い…悲しい…苦しい…。

とても、痛い。

胸を抉られるような痛みと耐え難い苦しみ…。

あらゆる痛みと苦しみに耐えきれずに呻く。

『坊や、何かあったらいつでも言ってくれ。君は私を助けてくれた

のだから』

『頼んだ…必ず生きてくれ』

『愚かな…貴様もあの剣士もあの医者の子も』

『俺は貴様とは違う。あの時に死んでしまったのさ…今の俺には復讐だけ、分かるか？分からないか、お前になんか。悔しくないのか？俺は悔しい』

誰かが語りかける…一斉に自分に迫っては罵ったり問い詰めたり揺さぶったり嘲笑ったり。

助けを求めて彼は悲鳴を上げて手を伸ばす。

「レディン…レディン！」

はっとして目を開くと、そこには心配そうな表情で自分の顔を覗き込むジャンが何度も呼び掛けている。

「ジャン殿…」

「大丈夫ですか？レディン…あまりにもうなされていたから心配になっちゃって」

そう言って微笑むジャンを目の当たりにしたレディンは僅かに驚いた後、眩しいものでも見るかのように目を細めて名前を呼ぶ。

「……ジャン」

「どうしました？レディン」

「……ありがとう」

レディンは感謝を込めてジャンに礼を述べた。伸ばした手を何の躊躇いもなく握るジャンに心から感謝した。扱られるような痛みも耐え難い苦しみもずっとおさまっていく。今は、このままでもいい。

ジャンはずっとレディンの手を握り続けた。

そうすれば忘れられるから…暫くは、忘れられるから…そんな事を思いながら。

「ジャン…肩、貸してくれないか？」

「構いませんよ」

ジャンは微かに笑みをこぼしながら首を縦に振ると、レディンはジャンの肩にもたれた。

胸に突き刺さるあらゆる感情が和らいでいく。いつか聞いた癒しの女神に似ている…。

そんな事を思いながらレディンは再び眠りに落ちた。

「……レディン」

うなされていたレディンは何かに怯えていた。よく似ているのだ。

守れなかった…存在によく似ている。

確信は持てない、だがレディンには重要な何かがあるのだ。

何か…耐え難い何かによって彼は記憶を失ったのだ。

人は耐え難い衝撃を受けるとショックで記憶を失ってしまうと言う。

レディンが記憶を失っていると言う事を言った時のアレンの表情はとても残念そうだった。

ジャンの予測から恐らくレディンはアルディ家に関わっているのだろう。

シャー青年もといシャルもきつと無関係ではない。

シャルはきつと…敢えて自分に何か重要な事を伝えようとしたのだろう。

アレンは騎士団を率いている上にライハード家の血を引く人間だ。

アルディ家はアレンを潰そうと狙いを定めているかも知れないのに、団長に話すわけにはいかないだろう。

もしかしたら自身が隠している秘密も知られてしまふと考えたのかも知れない。

したがって親友であり副団長であり尚且つ無関係である自分に話すのは安全なのだ。

それだけにもっと早く気付けなかった事を、察する事が出来なかった己をジャンは嫌悪した。

シャー青年の親友と言う事で監視をつけられながらもジャンは事件調査と言う名目で色々調べ上げた。

そして浮かんだのはシャー青年が書いたメモの人物の正体…確信は持てないが切り札にはなるだろう。

残りはシャー青年が何等かの形で書き残したとされる日記やら文献やらを持ち帰るだけだ。

そんな事を考えていると突然、あの時の光景が浮かび上がった。

目の当たりにしたシャルの死に悲鳴を上げた。

周りは赤い血で真っ赤になっている。

あの時、あの時は思い出せなかったが今は思い出せる。はつきりと思い出せる。

自分が悲鳴を上げた時、何か別の物音が響いたのだ。

何かを落とす音、何か…足音が聞こえる音が聞こえたのを思い出し

た。

思い出した瞬間、ジャンは身震いした。

シャルルは…シャルルは…何かを隠していた！

見えない敵によってシャルルは殺されたのだ。

何かを隠していたばかりにシャルルは殺されてしまったのだ。

シャルルは一人暮らしと言ったがあれは嘘だ。

一人暮らしには十分過ぎる程の設備が整えられていた。

ジャンは青ざめた。

あの暗号に出てきた名前…『レイザ』は…。

あの時は分からなかったが騎士団に入団する前に一度だけ入るなど言われたシャルルの部屋に入ってこっそりとアルバムを見たことがあった。

(…まさか…っ！アレン様も気付いているのか！？『レイザ』…『レイザ』とはまさか…！)

ジャンは嘘であつて欲しいと思つた。

もしも自分が考えている事とアレンが考えている事が同じならば『

レイザ』は紛れもなく…。

昔聞いた事はあつた。

アルデイ家の継承者に相応しい人間には勇ましい『怒りの痣』が表れると。

しかしジャンの思考はそこまでだった。

何かが迫る……。

ジャンは何者かの気配を感じ、剣を抜いて外に出た。

祠から出たジャンは剣を構えながら辺りを見回したが風がざわめいているだけだった。

杞憂か…そう思ったジャンは踵を返して祠に戻ろうとした瞬間、

「私の気配に気付いたのではなかったのか？愚かな人間よ」

低い声が響き渡りジャンはさっと声のする方に視線を移す。

そこにいるのは綺麗な白い毛並みの猫だった…しかし瞳は赤い。ジャンは身構えたが既に遅かった。

< A t t a c k i t ! (攻 撃 せ よ) >

猫は突然高く舞い上がった。

猫の姿が見えなくなった瞬間、突然上空から黒く長い刃がジャンに向かって落ちてくる。

「なっ！」

ジャンは慌てて左に避けるが、黒い刃は落ちる瞬間に欠片となり辺りに降り注いだ。

パリパリパリパーン！

無数の刃が降り注いだ…ジャンは花卉のように舞い落ちる刃をかわしきれずに負傷したが直ぐに他の攻撃が行われた。

先程まで見えなかった猫はジャンの背後に回り鋭い爪を振り下ろした。

ザシュッ！

先程の刃に続けて鋭い爪の攻撃をまともに受けたジャンは痛みに呻き、膝をつく。

<Stand by.(待機せよ)>

猫は攻撃をやめ、その場に座った。

同時に響き渡るのは先程と同じ抑揚のない低い声。

「つけさせて置いて良かった、やはり貴様等はヘレナに向かうつもり…なのだな」

台詞と共に目の前に現れたのは長い黒髪に真っ赤な瞳をした男の姿。

「お初にお目にかかる、ジャン・ブルネーゼ。我が名はレイザ……まあ貴様は知っているか。闘技場の事を知っているのならな」

闘技場では百戦錬磨の剣闘士…レイザ…彼は笑いながら

「ジャン・ブルネーゼ…何の恨みも無いのだが邪魔をしてほしくない。そろそろ消えてもらおうか。<Execute it!(実行せよ)>」

レイザはカツと目を開き、ジャンを指差した。すると一斉に光が集まり始めた…。

その光は徐々に大きくなっていき、終いにはジャンとレイザがその光に包まれた。

<Withdraw it!(撤退せよ)>

その瞬間光は高速で空に舞い上がり、やがて小さくなっていく。

バアアアアン！

爆発音が響き渡り、一斉に鳥が飛び立っていたようだ。

「……………！？」

余りの爆発音にレディンは目を覚ましてしまった。
バツと起き上がり辺りを見回すがジャンの姿はない。

「…嫌な予感がする…」

レディンは立ち上がり、祠の外に出た。

祠の外に出てみると、綺麗な輝きを放つ黒い欠片が野原に散らばっており、微かな血の跡もある。

そして何よりもレディンを驚かせたもの…。

「ジャン！ジャンが連れ拐われた！？」

ジャンは必死に抵抗したが見事に先制を取られて連れ拐われたのだ。
落ちている…刃がボロボロになった剣が証明している。

「一体誰がジャンを？」

ジャンを誰が連れ去ったのかを考えたその時、頭に鈍い痛みが走る。

（愚か者め、お前が奴の味方にさえつかなければこんな目に遭わずに済んだのに）

(レディン様、ご機嫌麗しゅう御座います。貴方もいよいよ…頑張
って下さいまし)

(逃げな、逃げて生き延びるんだ。そして必ずあいつを救い出して
くれ)

何十もの声が響き渡り、消えていく。

罵る言葉も励ましの言葉も心配するような言葉も次から次へと響い
ては消えていく。

「いやだ…やめろ…やめろ…っ…やめろ…!!…やめろーっ!」

レディンは耳を塞ぎ、目を閉じてその場に座り込む。

胸を抉られるような、切り裂かれるような、暴かれるような鋭い痛
みが襲い掛かる。

鈍い痛みは切り刻まれるような鋭い痛みに変わり、レディンは胸を
抑えた。

呼吸が乱れ、動悸が激しくなり、喉が変に渴いてしまって汗が垂れ
落ちる。

しかし誰もいない…このままこれが続くとかなりまずい状況になる
だろう。

レディンは必死に抑えようとするが、動悸や痛み等は激しくなる一
方で止むことを知らない。

「あつれー?」

遠くの方から声がしたのをレディンは朦朧もうろうとなっていく意識の中、
微かに聞こえた。

「どうしたの？お兄さん…凄く苦しそう。何処か痛むの？」

段々大きくなっていく声に僅かな希望を見出だしたレディンは必死に手を伸ばした。

「大丈夫よ、お兄さん」

誰かがレディンを励まし、助けを求めて伸ばした手を誰かが掴んでくれた。

胸を抉るような痛みは徐々に引いていき、次第に意識が覚醒する。段々と落ち着いて来た事は此方にも伝わって来た。

レディンがゆっくりと顔を上げた事にホッとした少女は

「お兄さん、大丈夫？凄く苦しそうな顔してたわ。ある人を探してグリーンフィールドを歩いていたら突然呻き声のようなものが聞こえて来て…急いで来てみたらびっくりしちゃったわ」

と言った。

それを聞いたレディンは見ず知らずの少女に助けを求めているのかと思うと恥ずかしさから顔を赤らめる。

まともに少女の顔を見ることが出来ずにレディンは下を向く。

「どうかしたの？まだ何処か痛む？」

下を向いた事に気付いた少女はレディンの顔を覗き込む。

その為、少女の顔がレディンの目にはつきりと映る。

青い瞳に淡い金色の髪…まだ幼さの残る可愛らしい少女の顔が映り、レディンはますます動揺し、慌てて顔を上げた。

「…クスクス」

そんなレディンの様子を見た少女は笑いながら

「貴方ってとても可愛いのね！」

可愛い…その言葉にレディンはまた顔を赤らめる。

「いちいち反応するところが可愛いっ！パツと見は格好良いんだけど反応が超可愛い！前にパツと見ただけだったけど本当に可愛いし格好良いわ〜！ねえねえ貴方、何て言うの？私はティアナって言うんだけど」

前に見た？少なくともレディンはこの少女と会うのは初めてだ。

一生懸命考えているレディンに気付いたティアナは

「あ、貴方は当然初めてあたしと会うのよ。貴方レディンって言うんでしょ？城で貴方がジャンと一緒に行くのを偶々見掛けたのよ」
と言った。

つまり目の前の少女ティアナはライハード城の人間になる。

「は…初めまして、ティアナ様…私はレディンと申します…」

少女が城の人間だと言うことに気付いたレディンは慌ててティアナに向き直り、自己紹介をする。

畏まった様子にティアナは

「そんな畏まらなくても良いのよ、レディン。私の事は気軽にティアナでいいから」

と言ってニツコリと笑う。

「…ティアナ」

積極的に話しかけるティアナにレディンは困ったように笑った。

(可愛らしい女の子だなあ…明るいし)

実のところレディンは女性が何故か苦手だった。

よく分からないが冷めた態度を取ってしまい、突き放すような言葉を言ってしまう事もあった。

まあ、酒場のバーニーガールとか食堂のウェイトレスとかから絡まれた程度で声を掛けられた事もないが。

この子にはそんな事は言わないようにしないといけない。
しかしそんな心配はなかった。

ティアナの話に耳を傾け、自然に笑みが溢れる。

決して自分から話しかけたりはしないが、ティアナから積極的に話し掛けてくるのでそれに返すだけで精一杯だった。

(いつまでも続けばいいのに)

そんな事さえ思ってしまう。

この少女と話したり、笑い合ったり…溢れる笑顔を見ただけで嬉しくなる。

こんな時間がいつまでも続けばいいのに。

けれどいつまでも楽しい時間が続く事はなかった。

「ティアナ様…！全く…此处にいたのですか！あ…レディン様も一緒にいたのですか」

此方まで走って来たのはライハード城の騎士だった…何故此方に？
レディンはジャンの事だろうと思ひ、兵士が話すのを待つ。

「レディン様…取り敢えず貴方にどうしても伝えたくて」

息を切らしながら話す兵士にティアナは

「フェード！さっき、近くを警備していた兵士と話していたけど何かあったの？」

フェードと呼ばれた兵士はレディンをちらりと見た後、ティアナに向かつて話し始めた。

「ええ、昨夜11時過ぎにジャン様はレイザに連れ拐われたみたい
です。

召喚獣と思われる魔物達が町を襲撃したみたいですし。一応召喚獣
の中でも低レベルの白猫だったので何とか撃破しましたが」

「レイザ…！あの剣闘士レイザか！一体何故…」

レイザの名前にレディンは驚いた。

レディンの驚いたような表情をじっと見つめ、不意に視線を逸らし
フェードは

「さあ…考えられる事はやはり6年前の事件…位ですかね。
ジャン様がどういふ形で6年前の事件に関わったのかは分かりませ
んが。

取り敢えずライトロードを抜けるとヘレナ…まずはヘレナで詳しい

事を聞いた方が良いでしょう」

と提案した。

「ジャンを早く助けに行くためにもね！レディンも行くんでしょ
う？」

ティアナの問いかけにレディンは頷いた。
と言うより、調査員になった自分が断る事が出来ないのだから。

「レディン様も行くみたいですし、早いところ此処から旅立ちま
しょう。」

またいつ召喚獣が来るか分からないですからね。

低レベルとは言え召喚獣は厄介ですよ…扱う人間はかなりの使い手
みたいですし」

「うん！レディン、早く行こ行こ！」

ティアナはレディンと一緒に旅が出来るのが嬉しくてぐいぐいと腕
を引っ張りながらヘレナを目指した。

そんな微笑ましいティアナとレディンの様子についていきながら見
守るフェードは同時に不安そうな表情で2人に聞こえないように呟
いた。

「赤い炎はもうすぐ激しく燃え上がる……」

風は背を押すように強く吹いている。

空は青々としており、雲1つなく、太陽が輝いている。

だが、悲しみの炎は徐々に燃え上がるうとしていている事に果たしてレ
ディン達は気付いているだろうか。

そして…回り始める宿命と渦巻く陰謀。

ゆらりゆらりと揺れる赤い炎は徐々に大きく、激しくなっていく。
様々な枷の為に苦しんで来た者は復讐と言つ無益なる闘いの火蓋を
切ろうとしている。

虐げられて来た者達が今、反逆を誓い、復讐を行おうとしている。

第六節：悪の契約 死を紡ぐ魔術師

暗闇の中、1人佇む者がいた。

鏡に映る自分の姿を眺めていたが、直ぐに目を逸らした。

刻まれた印が己を支配している…敗北した自分は反逆者として常に監視され、敵視こそすれど味方は誰もいなかった。

そんな時…珍しく許可をもらい、数人の兵士に囲まれながら外に出て町まで歩いた。

兵士達は酒場で上機嫌に飲みまくり、歌いながら騒いでいた。

（何あれ？セイシエル様じゃない。さ、早く行こ行こ）

町人からも嘲笑され続けた幼少時代…外に出ても中にいても同じだった。

（いやだっ！どうしてこんな目に遭わなければならないの！？アイシアやイリアは皆から慕われているのに！何で！どうしてなんだ！）

当時は冷たい視線や縛りが激しい事に怒りと悲しみを覚えたものだ。子供だった自分に権力争いを理解出来る訳がない。

アイシアは勝ち、自分は敗けたけれど、それすらも分からない。

周りの大人が自分達を闘いの道具にしたのだと言う事すら知らない純粹な人間だった気がする。

要は無邪気過ぎた。

そして…今、自分は怒りと悲しみと孤独に耐えきれずに俯いていた。

（泣くものか！）

それだけを必死に自分に言い聞かせて耐えた。

だから差し出された手を拒めなかったのかも知れない。

（セイシエル様でしょ？悲しそうな顔してどうしたんだ？）

ずっと俯いて現実を遮断してきた自分の耳に突然響いた囁き。
差し出された手。

（泣かないでくれよ、セイシエル。周りが敵でも私だけはお前の味方さ。孤独は嫌だろう？私が側にいるよ、お前が私に従っていれればずっと側にいるよ。私だけを見るんだ、セイシエル…私もお前だけを見ているから）

それは自分の心に響き、蝕んでいく。
側に居てくれるなら誰でも良かった。

（何があっても側にいるよ。私だけを見てくれるならな…セイシエル。さあ、この手を取れ）

それは甘く心に染み込んでいく。
孤独の中で愛情を求める無垢な少年は差し出されたその手を握り返した。

（契約成立だね、坊や）

しかしそれは自分を純粹に慕う人間によって契約を破った。

（ゼーウェル卿）

反逆の罪を背負ってでも逃がしたかった存在によってその契約は破ることになる。

ずっと母親を求めていた…母親は自分を捨てて父に仕える兵士と逃げ出した。

兵士との間に出来た子供の存在を知った当時の自分は憎んだものだ。兵士のせいで母親は不倫を犯して処刑された。

しかし子供は処刑されずに生きている。

母は自分よりも兵士との間に出来た子供が大事だった事にショックを受けた自分は、アイシア…義母…兵士…そしてその子供に激しい憎悪の念を抱いた。

それを酒場で出会った青年に話した。

青年は自分が呼べば直ぐに来てくれる…そして色々な話を聞いてもらったりしていた。

それも話した。

手に入れてたくても手に入らなかったものが無条件で手に入れた子供が憎い…自分の全てを奪った全ての人間達が憎いと言う事を話した。すると青年は今までにない程はつきりした口調で言った。

（そうだろう！憎いだろう、お前の全てを奪った人間が憎いだろう！お前が手に入れたかったものを無条件で手に入れた子供…カインが憎いだろう！お前が憎むものは私が憎むものだよ、セイシエル。お前の憎しみは私の憎しみ…もつと憎むんだ、もつともつと憎んで憎んで憎め）

怖くて…けれども自分の頬を撫でる青年の手はとても優しく拒めなかった。

だけど…自分を何の躊躇いもなく慕い、助けてきてくれたのもその子供だった。

（カインに会ってくれよ。カインは良い奴なんだよ？そりゃ複雑だ

けど…でもカインは純粹なんだ。な？)

そう言った瞬間、青年はゆっくりと此方を振り向いた。

(坊や…私を捨ててカインと共に行くのか？)

青年の問いかけに自分は慌てて

(君も一緒に来ないかって誘いに来たんだ。私にとってはカインも君も大切なんだ)

そう言つて弁解したけれど青年は俯いたまま何も言わない。
不安になつて再び言葉を紡ぐ。

(カインはかけがえのない存在なんだ、私を初めて助けてくれた…
何の見返りもなく。君と同じように…だから…)

(カインと一緒に？そんな事…許す訳がないだろう。セイシエル！)
突然発せられた言葉に自分は動揺した。
ただど青年は歪んだ笑みを浮かべて此方に向かってゆっくりと歩いて来る。

(セイシエル、お前をやつと見つけたんだ。カインなんかに渡すものか。お前は私の事を何も分かつていない。お前は孤独を凌ぐために私を利用しただけ。いらなくなれば私を捨てるんだな…私はお前…お前は私…契約したあの時から私はお前を守つた。お前の憎しみ…悲しみ…苦しみ…痛み…絶望…あらゆる闇を私が代わりに受け止めてきた。しかしお前は私に何も返してはいない)

(何を言ってる!!)

(許さん…セイシエル…お前だけ楽にさせる等…私が許さん。お前は私と共に堕ちてもらおう)

(やめろ!)

(お前が幾ら足掻こうが無駄だ…お前の全てが手に取る様に分かるぞ。何故なら私はゼーウエル…なのだからな)

(……!)

ゼーウエル…此方に迫ってくる青年は自ら名を名乗る。

何故…気づかなかつたのだろう。

こんなにも同じ容姿をした人間の正体に。

(お前の闇さ…私は。お前は牢屋で奴等によって印を刻まれた。その印は私との契約の証…私との契約を破棄した時、お前に関わる全ての人間に死が襲い掛かる。しかしお前は死ねない。私が契約を解消するまで永久に死ねない。カインが大切なのだろう?今のお前にはカインを失いたくない気持ちで一杯だ)

(…あつ…)

(さあ言え、その声で私の名を。誓うんだ…セイシエル)

再び甘い声が響き渡る。

(さあ…坊や、私の名を呼ぶんだ。出来るだろう?)

絶望した時に響き渡る重く甘い声。

(……ゼーウエル……)

自分が名前を呼んだのを聞いたのか、彼は満足そうに笑っている。ゼーウエルに対する恐怖が更に増していくが、更に笑みを浮かべて耳元で囁いた。

(それで良いのだよ？坊や……契約を破棄しない限り私はお前の代わりに全てを受け止めよう)

名前を思わず呼んでしまったけれど……その後、ゼーウエルが何を言ったのかは分からない……その直後に意識が遠退いていったから。

暫くして意識が覚醒し、ゆっくりと立ち上がる。

(可哀想な坊や)

しかしこれで孤独なあの頃に戻る。

過酷な現実を目の当たりにする度にすがるだろう。

何もかも自分の思い通りになる。

頼れるのは自分だけだからである。

そして……復讐を行う事が出来る。

カインも気付かないだろう……自分もまた……カインの身代わりになった心優しき『セイシエル』なのだから。

カインを助けた……カインが慕っていた『セイシエル』なのだ。思う存分利用してやるう……ただで殺すのは勿体無い。

あの優れた才能は存分に使わなければならない。

酷使出来なくなったその時……カインを殺す。

誰も気付かない……セイシエルが強い闇を背負っている事に誰が気付

くだらうか？

いや、誰もセイシエルの闇にまで気付きはしない。

哀れな坊や…憎しみのあまりに囚われてしまった。

復讐を果たしてやる、自分の邪魔になる人間は容赦なく始末してやる。

セイシエルの身体とカインを駆使して。

カインが憎い。

母親の愛情も友情も何もかも手に入れたカインが憎かった。

愛されていたカインが憎かった。

処刑されようとも母はカインだけは庇おうとカインを村に隠した事が憎かった。

自分はそんなにも深い愛情を受けた事がなかった。

憎まれ、嘲笑され、誰からも…父親からも道具扱いされていらなくなったら捨てられて…。

母を奪ったカインが憎かった。

カインさえいなければ母は自分に深い愛情を注いでくれたのかも知れないのに。

優れた才能も類い稀な美貌も有するカインが憎かった。

人を惹き付ける事が憎かった。

憎い、憎い…カインが憎かった。

義母や義弟よりもカインが憎かった。

だからカインが全てを失って絶望している姿を見た時は本当にせいせいのためにカインが直ぐに希望を見出だしたという事がまた憎かった。

自分が欲しかったものを何でも持っているカインと一緒に行くなんて許す訳がない。

憎しみや悲しみが生きる糧である自分を頼った癖にカインと一緒に行きたいから君も来て…なんて我が儘だ。

(いらなくなったら捨てるんだろう？なあ…セイシエル。そんな事は許さない、お前は私と契約したんだ。私は契約を破棄するつもりも解消するつもりもない)

孤独と悲しみと怒り…味方なんかいないという絶望から昔は純粹に自分だけを見て、素直に従ってくれたのにカインが助けてくれたら自分は用無し…それを言われたような気がして悲しかった。

自分が持っている闇の全てを否定され、忘れようとした事が悲しかった。

悲しみも苦しみも憎しみも怒りも絶望も嘆きも何もかも代わりに受け止めてきたのに…

守ってきたのに…否定された。

カインが1番大切だと言った時は悲しくて仕方なかった。

(孤独にすればまたあの時みたいに私だけを見てくれるのか？私に忠実に従ってくれるのか？セイシエル…)

暫く俯いていたが…やがてゆっくりと顔を上げた。

容姿は全く同じだったが、黒かった瞳…今は血のように真っ赤に染まっていた。

バン！

昔を思い出して壁を叩いた。

今もセイシエルは思い通りに動かない。

大切にしたい、悲しませたくない、側にいたい、傷付けたくない。

昔なら言いたくもない台詞だった筈なのに今は何の躊躇いもなく、その言葉を口にする。

変わってしまった…。

「何故？報われないのに貴様はそんなにも守ろうとする？」

あの時から全ておかしくなった。

奇妙で心地よい関係は突然現れた…最も憎んでいた人間によって打ち砕かれた。

復讐してやる。

自分から全てを奪い、最も欲しかったものまで容易く手に入れた人間全てに。

「ラザニアもアイシアもレイザも全て殺してやる……！私から全てを奪った人間達を殺してやる！」

そう言つて、もう1度鏡を見た。

鏡に映るその顔には憎しみと悲しみに満ちた表情をしていた。

(……お前は本当はレイザを……レイザを……哀れなのはお前の方だよ、ゼーウエル…アイシアだって哀れなのに)

あの時…最後にそう言った。

逃げたカインの代わりに捕らえられた時も捕らえた人間達に言った。

“哀れ”だと。

「お前が如何に愚かで哀れなのかを私が証明してみせるさ」

今更、後戻り等…許す筈がない。

終わらせない、全てが満たされるその時まで。

真紅の炎は燃え上がる。

憎しみと悲しみで形成された真紅の炎は全てを焦がす。

全てを知っているのは私と汝だけ。
きつと、これからもずっと私と汝だけの秘密となる。
解放等、認める筈がない。

「レイザ」

部屋に入って来たレイザをゼーウエルは笑みを浮かべる。
憎しみも込めながら。

レイザは一瞬だけ不安そうな表情をしたが、直ぐに無表情に戻して
「ゼーウエル卿、聖職者どもを始末してきました。その1人からこ
れを奪って来ました。幾つかあったのですが全て中級魔術だったの
で一応此れだけ」

「魔法書…か。最上級光魔術…取り敢えずもらっておこう」

暫く吟味した後、レイザの顔を見ることなく魔法書を懐に仕舞った。

「ゼーウエル卿、今のところは牢獄島の連中は動く気配はないよう
です。」

如何致しましょう？ご命令とあらば周辺の監視所を潰して参ります
が」

「…まだ待て。相手はラザニアだ。下手に潰せば直ぐに気付くだろ
う。お前が全て背負ってやると言うなら止めはしないがな」

クックツ…と笑いながらレイザを睨み付ける。

「…分かりました。暫く検討させて頂きます」

「分かったなら下がれ。監視所を今潰しても構わないが私が被害を被るような作戦はするなよ……レイザ」

「ゼーウエル卿……？申し訳御座いません」

ゼーウエルの台詞が暫く理解出来なかったレイザは不安そうな表情をしたが、直ぐに頭を下げ、その場を去った。

レイザの後ろ姿が見えなくなるまで憎しみを込めて睨み付けた。

「セイシエルだと思っっているのかな？まあ良いか…セイシエルに裏切られて死ぬ姿を見るのも悪くはない。寧ろそうしてやろうか…クツクツク…どう思う？坊や」

歪んだ笑顔で不気味な事を呟く…。

かつての自分と同じ目に遭わせてやろうか…。

誰からも道具扱いされて来たかつての自分と同じ仕打ちを受けてみたらいいのだ。

「そうすれば…レイザに試した事が無かったな。少し試してみようか」

本来は獣に使うのだが人間に使ったらどうなるだろうか。

一時的ではあるが精神を集中させて、自分の持っている魔力を相手の身体に送り込んで意思を支配するといふものだ。

相手の元の魔力が低い程支配しやすいが魔力が高ければ高い程双方に衝突が起こるので同じ魔術師には余り使わない。

一度支配してしまえば自主的に解除するか術師が倒れるまで効果は続く。

意思のある生物にのみ通用するので、そもそも怨念等だけで存在し、意思が存在しない聖霊や不死には使えない術でもある。

レイザも魔術師ではあるが後天的な魔力は高いが先天的な魔力はあまり高くないのはセイシエルだけでなく他の人間も知っている。試してみる価値はある…少し遊んでみよう。

通用するようであれば今度から操って確実に自分の作戦を行う事が出来る。

しかしその為にはレイザを呼ばなければならない…間近で見ると腹立たしいが一度も試しておかないままいきなりやるのは自殺行為である。

ニヤリと笑みを浮かべ、ゼーウエルは

「レイザ…少し話がある。急いで来てくれ」

レイザに命令を下す。

さて…試しておかないといけない…。

果たしてレイザの意識を取り込むことは出来るか否か…。

魔力を一点に集中させながらレイザが来るのを待っていた。

発動までかなりの時間を要する事が欠点だが意識を完全に取り込めるという点は魅力的だ。

<…偉大なる闇よ、願わくは哀れなる者に救いを。を汝の全ては我の全てなり…跪け。我を崇めよ、我を見よ、汝の力を我の為に…
…Execute it. (実行せよ)！>

ゆらり…ゼーウエルは自身の魔力を一点に集中させた。

この術を使うのにかんりの魔力を要するので試すとは言え、身体には相当の負担にかかる。

しかし手段は選ばない。何だって駆使してやる。
魔力が全て集まり切ったところで何も知らないレイザが部屋に入ってきた。

「ゼーウエル卿、遅くなり申し訳御座いません。何か…っ…」

そう言っただけで敬礼したレイザは顔を上げた瞬間、目を見開いてゼーウエルを見た。

「一步もレイザは動かない…目の輝きはなく、虚ろな表情です。ゼーウエルを見ている。」

「試しに色々やってみようか…。」

不敵な笑みを浮かべながらレイザに向かって命令を下す。

「レイザ…私の名を。その口で私の名を呼べ」

不敵な笑みを浮かべ、魔力をレイザに向かって放ちながら命令を下す。

術に掛かっている間は自分が命令を下さない限りレイザは自分の思うがままだ。

このまま魔力を一気に流し込めば完全に堕ちるかも知れないが、これはただの遊びであり試しているだけ。

「ゼーウエル卿…」

意思のないレイザはずっと虚ろな表情のまま動かない。

「そうだ、そのまま動くな…レイザ」

だが、ゼーウエルの目論見は破られる事になる。

魔力をそのままレイザに流し込めば完成するが、それが出来ない。先天的な魔力は高くない筈だ…魔力等、どうにでも補正出来る。

レイザの元の魔力はそんなに高くない筈なのに上手く取り込めない。

「ゼーウエル」

命令しなければ動かない筈なのに勝手にレイザは話し掛けてくる。

「悲しまないで、ゼーウエル」

虚ろな表情でレイザはゼーウエルに歩み寄る。

意思は無い筈なのに勝手に歩み寄るレイザに驚くしか出来ない。

何故…動かせない？忌々しい…！

ゼーウエルは精神を集中させるがレイザの意識を取り込むことは出来ない。

「くそっ！」

忌々しげな表情を浮かべ、カー杯レイザの体を突き飛ばした。

「ゼーウエル卿…？」

術の効果が切れたレイザは訳が分からないと言った様子でゼーウエルを見ている。

今までの事をレイザは知らないようだが、自分の力を簡単に上回った事が気に入らないゼーウエルは忌々しげにレイザを睨み付けた。

「貴様なんかに…貴様なんかに…！」

「ゼーウエル卿？」

何故こんなにもゼーウエルが自分を忌々しげな表情で睨むのかが分からないレイザは首を傾げる。

「…レイザの分際で…」

憎しみを込めてレイザを睨み付けた後、何も言わずに背を向けて歩いていく。

「ゼーウエル卿！」

レイザが幾ら呼び止めても振り向く事なく立ち去っていく。

「…一体何だったんだ？今の表情は…」

ゼーウエルの表情が離れない…あの表情は自分を見るのも嫌だ…と言ったようなものなのは分かる。

やんわりとゼーウエルに存在を否定されたレイザはその場に座り込んだ。

「ゼーウエル卿…そんなに私の存在が忌々しいなら何故私を助けたのですか…」

ゼーウエルが何を考えているのかは分からないが自分の存在を最も認めて欲しかった人物に拒絶されたレイザは絶望し、俯いたまま声を殺して泣いた。

あの人だけが自分を助けてくれたのに…。

許されない愛によって生まれた自分を何の躊躇いもなく助けてくれたのに。

やはり自分はその人にとっても疎ましい存在なのか…憎い存在にしかならないのか、忌々しい存在にしかならないのか。

道具でも何でも良かったのだ…あの人が必要としているのなら何でも良かったのはつきりと拒まれた。

何故？

どうして？

道具としてでも良いから拒絶だけはしないで欲しかった。

優しい眼差しを向けてくれたあの人も自分を拒んでいたのかと思うと悲しくて苦しくて仕方無かった。

一方その頃。

ある一室ではゼーウエルも頭を抱えていた。

何がいけなかった？

何を見落としていた？

何が足りなかった？

何度考えてみてもゼーウエルは分からなかった。

抜かりはなかった筈なのに通用しなかったのだ。

魔力が衝突するわけでもないあの現象はなんだ。

術が上手く発動出来なかった…遮られたようだった。

それだけではない…何かの流れ込んで息苦しささえ感じた。

レイザは虚ろな表情を浮かべながら此方に歩み寄りながら何かを言ったのだ。

気味が悪くて不愉快だった…耐え難い息苦しさと痛みが襲い掛かり、目眩さえ引き起こした。

レイザが気味の悪い…得体の知れない魔物のように思えて怖くなっ

てしまったのだ。

<あんななんか嫌いよ！あの人を見ているようで辛いのよ…！消えてよ…セイシエル！>

思い出したくもない過去…父親に似ているという事だけで平手打ちをされた。

蹴り飛ばされた。

拳げ句の果てには捨てられた。

<セイシエル、ごめんね。でも私はあの人側にいたいから。ごめんね、私にはセイシエルを……>

あの母親は自分よりも兵士との子供であるレイザが大事だったのだ。

「くそっ！レイザの分際でっ！何故レイザは愛されて私は……！」

そんなに自分が疎ましかったなら何故生み落とした…さっさと殺せば良かったのに。

孤児院にでも預けてくれれば良かった。

中途半端に育てる位ならその方がどれだけ良かったか。

だからずっと憎んで来た。

自分は愛情を知らない、憎しみだけを胸に今までずっと生きてきた。それがやっとなつたのだ…復讐という形で。

なのにそれが崩れようとしている。

「くそっ…！何故…レイザだけ…」

響き渡るのは憎しみと悲しみに満ちた声。

ずっとレイザを憎んで生きてきた。

ラザニアよりもアイシアよりもレイザを憎んでずっと生きてきたのに。

ふとした時に何か別の感情がレイザに対して動くようになった。

自分の意思に反して。

一体何故だろう？

それを彼はまだ知らない。

第七節：黒は沈黙し、赤は駆ける（前書き）

死を紡ぐ黒の魔術師

死を覚悟し、懸命に生きようと駆ける赤の剣士

死を紡ぎ、死に魅入られた黒き魔術師を救うべく、赤は奔走する

『どうかこの手を拒まないで』

第七節：黒は沈黙し、赤は駆ける

ライトロードまで後少し…というところではあったがライトロードの近くにある廃墟に悪魔がいると言う事でレディン達は暫し休息を取っていた。

まだ夜が明けきっていないので動きが活発らしい。

夜が完全に明けると廃墟に巢食う悪魔以外の魔物も動きも鈍くなる為、完全に日が昇るまでは此処で休まなければならぬようだ。

フェードは何か考えているらしく、レディン達とは目を合わせようとしてもしない。

ティアナは相変わらずレディンにべったりとくっついており、離れる様子はないので、レディンは対応に困っていた。

「レディン、まだ夜が明けないね。ねえねえ、廃墟に巢食う悪魔はどれくらい強いのか？」

「さあ…ただ騎士団達のほとんどが総出で戦っても負傷者は相次いでいるようだし他の商人達とかにも被害は出ているからな。ただ、日が昇っている間は動きが鈍くなるらしいからな。日が昇っている時に一気に突破するのがいいんじゃないか？」

「やっぱりか…兄さんも傷を負って帰ってきたから。兄さんがダメなら私も勝てないわね」

そこまで言った後、レディンはティアナの方を振り向いて

「君には兄がいるのか…ちょっと意外だな」

と言つとティアナは笑いながら

「えへへ、やっぱりレディンも言うのねー。

うん、義理の兄だけど…騎士団長の妹なのよ、これでも」

そう言ったのでレディンは少し驚いたが、血の繋がりのない兄妹だと聞いて少し納得した。

どう考えてもアレンとティアナは似ていない上に年齢が大きく離れているように思える。

恐らくアレンが親戚から引き取ったとか…そういう理由なのだろう。しかし…それにしても違和感があるような気がしてならない。

レディンが未だに考え込んでいるとティアナは少しだけ悲しそうに笑つて

「兄さんのおじさまとおばさまが引き取ってくれたって兄さんから聞いたの。でも私はつい最近まで兄さんとは血の繋がりが無いって事を知らなかったのよね。何も教えてくれないし」

と言つた後、続けてティアナは俯いて

「そりゃあ兄さんは私の事をすごく大事にしてくれているんだろうけど…でも…時々、すごく不安になるの。私はやっぱり他人だから…私を育ててくれた父さんも母さんも血の繋がりが無いから。何か色々言われたりするし」

と言つた。

レディンは俯いて話すティアナの頭をそつと撫でて

「不安になることはないよ、ティアナ。俺にはアレン様がどういう風に君を大切にしてきたかは分からない。だけどアレン様は君を心から愛していると思う。愛していなかっただら君に色々言ったりはしない。だから不安になることはない…君は今を大切にするんだ」

そつと抱き締めた。

ティアナはレディンの突然の行動に少し驚くが抵抗はしない。恐る恐るレディンに身を委ねつつ

「レディン…？」

レディンの名前を呼ぶ。

ティアナは驚きと喜びで信じられないと言った表情でレディンの抱擁を受け止めている。

暫くしてレディンは自分が何をやっているかが分かると慌てて

「あっ！わ…悪いな…ティアナ。いや…今にも泣きそうな顔していたから…。その…本当に…いきなりこんな事をしてごめん」

そう言っただけティアナに謝ると慌てて腕をほどいた。

顔が真っ赤になっているレディンを見たティアナも少し顔を赤らめつつ

「レディン、気を遣ってくれてありがとう！」

と言った。

ティアナの笑顔を見たレディンは照れ臭さそうに頭をかいて

「…ど、どういたしました…」

と言った。

もう一度だけティアナの顔を見してみる。
眩しい程の笑顔を浮かべながら話をしたり、聞いてきたりしてくる。
そのどれもが穢れを知らない夢物語の話ばかりなものだったが悪い
気はしない。

寧ろ聞いていると心が落ち着いてくる。

(ティアナはすごく純粹だな…)

それと同時に何かが入り込んでくるのを抑える事が出来ずにいた。
味わった事のない…名前すら分からない…すごく激しい感情と言
い表せない悲しみが心を支配していくのが分かる。

レディンは言い表せない何かに戸惑い、困ったような表情をしてい
た。

「レディン？」

それに気付いたティアナは話をやめ、心配そうな表情でレディンの
横顔をじつと見た。

視線に気付いたレディンは慌ててティアナの方を向いて謝罪の言葉
を口にした。

「ああ…ごめん、聞いてなかった…」

謝罪の言葉を最後まで言えなかった。

ティアナと目が合ったからだ。

綺麗な青い目がじつとレディンを見ている。

今…お互いの顔しか見えていない…他のものは何も見えなかった。

(ずっとこのまま時間が止まればいいのに)

そんな事さえ思ってしまう自分がいた。
しかし、いつまでもこの時間が長く続く事はなかった。

「レディン殿、ティアナ様」

フェードが戻って来たのだ。

ティアナは慌ててフェードの方を振り向いて

「あ、あら…フェード！早かったのね」

と言うとフェードは相変わらず淡々とした様子で

「ええ。兵士達にも注意するよう言われたり情報を収集したりして
いただけでしたから」

「ああそつなの！それなら良かったわ！」

フェードが淡々と話したことにかなり安心したティアナはそう言った後、俯いて何も言わなかった。

フェードはレディンのいるところまで歩き、真横まで来ると、顔を見ることなく小声で忠告した。

(感心しませんね、レディン殿。もう少し場所を弁えて下さい)

レディンはやはり知っていたのかと思い、同時にはつきり指摘された事が恥ずかしくてどうすればいいかも分からず、困った笑みを浮かべながら頭を掻いた。

それからと言うもののティアナはずっとため息をつき、レディンの顔を見ていた。

レディンはフェードとこれからの事で色々と話し合っている姿を見ていたティアナは頬を赤らめながら

（格好良いなあ…でも…何だか可愛いわ、レディン…どうしよう…レディンの姿を目で追ってしまう…）

1人そんなことを考えながらときめいていた。

レディンはフェードと話しており、ティアナを見る事はなかったが、それでもティアナはずっとレディンを見ていた。

（真剣な顔は無茶苦茶格好良いのに笑顔はとても可愛らしくて！あと照れたところも無茶苦茶可愛いし…素敵！）

ティアナの目にはもうレディンしか映っていないようだった。

一方…フェードとレディンは廃墟をどうやって避けるかを話し合っていた。

フェードの得た情報は悪魔の行動範囲は広い事と不思議なバリアで身を守っていて武器も魔法も通用しないということ、悪魔のバリアを破るヒントがヘレナか定期船を経由したところにある大都市セントにあるらしいということだった。

そのバリアがあるうちは如何なる攻撃もかき消されてしまうらしいので此方が悪魔を倒すにはそのバリアのエネルギーとなっているものを完全に壊す事らしい。

となるとやはりヘレナにはどうしても行かなければならないということになる。

恐らくバリアの源を壊す事も一筋縄ではいかないだろう。

しかし大都市セントも田舎村へレナも見晴らしはよく、そんなものを隠せるところは少ない。

田舎村へレナは調査団達が常時あちこち調査しているのだから目に入らないようにする事は不可能だ。

何故フェードがそんな情報を手に入れたのかはレインには分からなかったが、ライトロードの直ぐ近くの廃墟に住む悪魔がライトロードやグリーンフィールド辺りまで襲来した事があつたらしく、どんな魔法を放つても、どんな技を放つても紫色をした光がそれらを跳ね返すのを見たという人間も多いようだ。

どんな攻撃も跳ね返し、何もかもをかき消すバリアは持っている魔力だけでは作り出せないようで、必ず源となる何かがあるみたいだ。また、その悪魔はグリーンフィールドからは何故か出ないらしく、攻撃する時に必ず誰かの声が聞こえる事から、恐らくあれは何かを守る為に配置されたペットらしい。

未だに召喚獣の事についてよく分からないレインにフェードは詳しく説明し始めた。

「確か召喚士や調教師…サーカス団もよく使ってみたいです。まあ魔力はいりませんね。精神を集中し、ペットに命令を下すのです。アタック イット！と指示を下せば攻撃を続けます。攻撃をやめさせたい時にはスタンド バイ！と指示を下します。撤退させる場合も何かを実行させる場合も同じです。ただ、精神が少しでも乱れるとペットは抑制せずに力尽きるまで暴れます。鳥や猫等だと再び言う事を聞かせやすいですが悪魔や竜や精霊や不死になると言う事を聞かせにくくなります。もし廃墟に巢食う悪魔がペットだとしたらそれを操縦している人はかなりの腕前ですね、悪魔を操る事は普通の精神力では到底不可能です。意思を疎通させにくいですから。悪魔自体を手懐けようとする事も凄いです。正確に相手を狙っているという事からして只者ではありませんね」

「な…成る程…ぶつかりたくないな」

フェードの説明にレディンは納得した後にはぼつりと呟くとフェードも

「ペットは調教師が命じれば幾らでも攻撃出来ますからね。きちんと世話さえすればかなり距離が離れていても直ぐに駆け付けるところが厄介です」

と言った。

ペットの攻撃は調教師が止めさせるか、調教師の精神力の波動を何とかして妨害しないと止められない。

調教師の精神を乱せばペットはひたすら攻撃し続けるだけになるので対処はしやすくなるが、一番良いことは調教師を瀕死に追いやる事だ。

調教師が瀕死になればペットは危機を感じて行動を止めるらしい。

「厄介なものなんだな、召喚士つて。俺は調教師を見たことはあるが猫や犬に有り得ない芸をさせたりしているところしか見た事ないからな」

「悪魔みたいな召喚獣になると攻撃はおろか魔法も多種多様になるから厄介なんです。しかもあんなバリアを作り出して張っているという事はかなりレベルの高い調教師であると同時に非常に優れた魔術師でもあります。此処まで来ると最早此方には勝ち目は無いです…今はスルーするしか方法はないようですが…」

確かにフェードの言う通りである。

頭数では上回っていたとしてもレベルの高過ぎる敵に挑むのは自殺

行為である。

フェードの言った事が本当ならば向こうからすれば相手にもならない。

ならば戦わないようにするしか方法はない。

「とやっているうちにもう日が昇り始めましたね…。レディン殿、ティアナ様を呼んで下さい。直ぐにでも出発しないとまた動きが活発化し始めます」

「…分かりました、フェード殿」

頷いたレディンは少々戸惑いつつ、走り回るティアナを呼びに行っ

た。

どうしてもティアナを意識してしまうのだ…。

一目惚れ…なのだろうか…と思ってみてもよく分からない。ただ、何と無くティアナを過剰に意識してしまうのである。とは言うものの露にしたらいけないのは勿論分かっており、出来るだけ平静を保ちつつティアナの側まで走った。

「あ…レディン。もう話は終わった？」

レディンが来たことにティアナは内心オロオロしていたが、それをレディンに見せるわけにはいかない。

そんなティアナの内心等、全く分からないレディンは

「ああ、終わったよ。今すぐにも行かないと厄介な事になるらしいからな。さて、行こうか…ティアナ」

「うん…レディン」

ぎこちない会話をしながら目も合わさずにそれだけを言つとレディンとティアナはフェードのところまで歩いた。その様子を見たフェードは

「…やれやれ…分かりやすい2人ですね…」

と言つた後、小さくため息をついた。

「フェード、ごめんなさい。遅くなつたわ」

レディンよりも少しだけ早くフェードの元に辿り着いたティアナは笑いながら言つたのでフェードもつられて少しだけ笑つた。

最も、仮面を被つていたので表情まで知ることは出来ないが。

その後直ぐにレディンが辿り着いたので3人は最終地点であるライトロードを抜ける事にした。

今はグリーンフィールドの中間地点とも言える場所であり、ライトロードまでは後少しと言つたところである。

慎重に行かなければならないと言いつつ前半地点よりも魔物はいないので廃墟に巣食う悪魔にさえ気をつければ直ぐに目的地に辿り着く。

3人は目的地に向かって歩き始めた。

レディンとティアナは話すこともなければ目を合わす事すらなかつた。

フェードはそんな2人の様子には特に何も言わず、ただ前だけを見ていた。

睨み付けるように、何かをじつと見つめるかの如く。

仮面に覆われた彼は今どんな表情をしているのだろうか…。

ティアナとレディンは知る事もなかつた。

ただ、沈黙だけが3人を包み込む。

フェードは必要な話を話す以外ではあまり口を開かないし、レディンは話が苦手だった。

ティアナはそんな雰囲気の中で話してはいけない…と思い、話題を振ることもなかった。

なので野原を抜けるまではずっと静かだったのだ。

一方その頃…。

「…俺は…あの人を止めなければならぬのだ…。あの方は…」

閉ざされた闇の中で低く呟いたレイザは悲しそうな、辛そうな表情を浮かべていた。

辺りは何も見えない…真つ暗な空間でレイザの表情だけが妙にはつきりと映し出された。

第八幕：赤の剣士の祈り（前書き）

どうして憎むのですか？

その瞳は激しい憎しみに燃えていた。

激しい憎しみに燃える瞳は自分だけを見ている。
自分だけしか見えていない。

激しい憎しみは恋にも似ているようだ。

何故ならその人しか見えていないのだから。

第八幕：赤の剣士の祈り

ジャンを連れ去ったレイザは廃墟の地下に戻っていた。悪魔を操るといふ事には慣れていなかったのだからかなり疲れてしまった。

なので今は操らないようにしている。

勿論、レディンとか言う旅人がこの近くを通り過ぎるといふ事は知っているが相手にするつもりも今はない。

大都市のある場所にさえ来なければ別に構う事も無いだろう。

さっさと行動してしまうに限る…そう思ったレイザはジャンを叩き起こす事にした。

「おい、起きろ」

何度か強く体を揺るとジャンは不愉快そうな表情を浮かべながら、ゆっくりと目を開く。

そこには不敵な笑みを浮かべた人間がいた…。

「レイザ……！」

ジャンは素早く身を起こし、レイザを睨み付ける。

生憎剣の刃は白猫の放った魔法で大破してしまい、使いものにならなかった。

自分の顔を睨み付けるジャンを見たレイザは肩を竦めて

「そう睨むなよ。お前をどうこうしようってわけではないからな。俺の指示を大人しく聞いてくれるならな」

と、宥めてみたがジャンはレイザを睨み付けながら

「信用出来ないな、貴様の言う事など。本当の目的は何だ！町を襲撃したのは貴様だろう…：本当の目的は何だ、何を企んでいる！」

強い口調で言った。

勿論それもレイザには分かっている。

寧ろ何もしないと言えば簡単に引き下がる人間程つまらない者はないとレイザは思った。

（成る程…：少々力不足ではあるが使える）

魔術の心得が無いのが玉に傷だがそれ以外の能力はまあまあ…：言ったところだろう。

剣の腕も悪くはない。

品定めを済ませたレイザは再び不敵な笑みを浮かべた。

「お前、なかなかやるな。一方的に攻撃されて敗北したのに…：意識を取り戻したらまた俺に牙を剥く。そうだ…：そうでなくては俺もつまらない。今まで威張っていた人間がいざ危機に陥ると命乞いをする…：そんな人間はつまらない…：愚かとしか言い様がない」

そう言つて冷笑を浮かべると、ジャンの喉元に剣を向ける。

「その意思力は褒めてやろう…：しかし、いつまでも鬱陶しい声で喋るな…：耳障りだ。それともこの剣で貫かれないのか？」

喉元に剣を突きつけられたジャンは仕方無く口を閉ざすが、鋭い視線でレイザを睨むのをやめようとはしなかった。

「お前が俺に協力すればいいんだよ、そうすればお前の城も安泰…：

連れにも手出しはしない…連れが俺の邪魔をしなければな。
お前が協力しなかったら城に攻撃がいく…」

レイザは横を振り向き、更に意地の悪い笑みを浮かべながら指示を下す。

<Execute it! (実行せよ!)>

Bannon!

爆発音が響き渡り、一瞬で近くにあった石像を大破させた。

「今のは範囲が狭かったのでこの程度になったがな…：困みに此れは俺が操って…いるんだ…くつくつく…お前が従わなければいつでもレイザ達を襲う事は可能だ。レイザはどうやら兵士と…騎士団長の妹ティアナと合流したようだな…俺がまさか召喚士であることに気付いていないようだからな。城の兵士達が簡単に喋り回っていたぞ…<実行せよ…>」

「やめろ!」

ジャンはレイザの指示を咄嗟に妨害した。

その為、指示が行き届かず悪魔は動く事はなかった。

悲痛な叫び声を聞いたレイザは冷笑しながらジャンに歩み寄り

「ティアナが無惨な姿になるのが耐えられないか。そうか…」

そう言った後、低い声で再びレイザはジャンの耳元で囁く。

「ティアナが大切なのだろうか?好きなのだろうか?本当は好きで好き

で堪らないのだろうか？しかしそのまま黙っていてもティアナはお前に振り向く事はないぞ…ティアナはレディンの事が好きだから…：いいのか？たかが冒険者に今までずっと密かに想っていた相手が奪われてもいいのか？」

そんな囁きに乗せられるわけにはいかない…。

ジャンは必死に耐えた。

確かに自分に振り向く事はない…それは苦しいものだろう。

彼女が欲しい、彼女が好きだ。もし結ばれたらどれだけ幸せなのだろうか…でも。

ティアナがレディンに恋い焦がれているならそれでいい。彼女の眩しい程の笑顔が見れるならそれでいい。

自分の恋心の為に彼女の笑顔を奪いたくはない。

「貴様の思い通りに等…なるものか…。私は貴様の思い通りに等、ならない。何があっても。レディンもティアナ様も…城の兵士達も貴様の思い通りにさせるものか！」

ジャンは強い意思を露にしてレイザを睨み付けた。

一方のレイザは僅かに驚いた。

激しい嫉妬に苛まされながらも理性を保ち、自分と対峙するジャンに対して敬意を抱くと同時にますます使えろと思った。

叶わぬ恋に対する苦しみと激しい嫉妬と独占欲に呑まれない人間を使わない手はない。

もしかしたら…今まで密かに抱いていた僅かな希望と願いを叶えてくれるかも知れない。

しかしどこまでこの精神力が持つかを試してみたい。

あわよくば自分に忠実な部下にしてみたいとも思った。

「ますます面白い。しかしその精神力…どれだけ持つか試させてもらおうか…」

冷笑したレイザを睨み付けながらジャンはじつと耐えていた。負の感情に吞まれないようにじつと耐えていた。

何をされても何を言われても耐えなければならぬ…此方が抵抗すれば闇に簡単に吞まれてしまう…。吞まれないように身構えていたが、闇は段々深くなっていく。

ジャンはそれでも耐えた。

体が段々重くなっていくのが感じられたが、それでも耐え続けた。

何かが重く体にのし掛かり、やがて立っていられなくなる。

意識が遠退いていきそうになるが、何とか踏み留まる…。

レイザはニヤリと笑みを浮かべながら低い声で囁く。

「……本当はティアナが欲しくて堪らないくせに…叶えてやるぞ…？お前の願いを…。ずっと望んでいた願いを」

募るのは醜い感情…レディンに対する嫉妬、怒り…ティアナを独占したいという醜い感情…叶わぬ恋の苦しみ、シャルルを守れなかった無念、友人を奪った犯人に対する憎しみ。

ジャンは段々と醜い感情に自分が支配されていくのが分かった。それと同時にレイザの手にかかり、今にも墮ちそうになっていくのも分かった。

板挟みに苛まされながらジャンは必死に耐え続けた…。

「俺に忠誠を誓えばティアナを手に入れられるのだぞ？もう何も考えなくてもいい。楽になれる…俺がいれば、な。さあ…墮ちろ」

レイザはジャンを闇に引き摺りこもうとしていた。

ジャンは必死に耐えようと抗うが、心が折れそうになるのが分かった。

楽になれる？

楽になりたい…手に入りたい…弱く邪な感情が心を闇に染めていく。

やがてジャンは意識を失い、倒れた…ところをレイザが受け止めた。

「やはり欲望には…勝てないぞ、ジャン…しかし…よく持ったな、普通はもう壊れてしまっが」

レイザはそう言った後、低く笑うとジャンを近くのベッドに寝かせた。

目覚めた時、彼の心は闇に染まっているだろう。

…今の自分と同じように。

「ゼーウエル卿…貴方の為ならば、どんな事でも致しましょう…それが私の誓いだ…は…はずだ」

下を向いて彼は呟いた。

ゼーウエルの憎むべきものは自分の憎むべきものだった。

なのにゼーウエルはすっかり変わってしまった。

何が彼を変えてしまったのだろうか…。

次々と無差別に人を切り刻み、返り血で真っ赤になった手を舐めながら邪悪な笑みを浮かべた彼を初めて見た時の恐怖は忘れない。

激しい憎しみを持ちながらもずっと優しく真面目だったのに。

人を斬るような目をしていなかった筈なのに。

10年前から彼はすっかり変わってしまった気がする。

標的とした人間や魔物以外にもその場にいた者達を次々と斬り捨てた。それだけならまだ幾らか救いはある。

冒読するような仕打ちを平気でやるようになった…かと思えば前のように凄く優しくなる時もある。

レイザにはそれが恐ろしかった。

かといって逃げる事も考えてはいなかったが…それと分からない事があるのだ。

ゼーウエルは自分を憎んでいる。

穢らわしいものでも見るかのようにレイザを見る。

あまりの仕打ちにレイザが止めに入った事があったがゼーウエルはもの凄い形相でレイザを睨んで

「私のやることに口出しをするな……今度同じような事をしてみる……ただでは済まさんぞ……」

そう言った。

あれ以来ゼーウエルが何をやっても止めに入れなかった。

それに…ゼーウエルは自分をまるで道具か何かのような扱いをするようになった。

それでもレイザは全く構わなかったが…。

しかし、死者を冒読するような真似は聖職者であり、魔術師になるべき人間には許されない事であり、法よりも更に重い罰が下される。魔術師には許されない事であり、魔術師を志していたゼーウエルがそんなことをする筈が無いのだ。

何よりも全てのものに対して冒読するような行為を見る度に怒りに燃えるゼーウエルが自らそんなことをする事は有り得ない。

どうして憎むのですか？

その問い掛けと悲痛な想いは闇に吞まれて消えた。

「イリア……俺はどうすればいい？」

レイザは相変わらず下を向いたまま呟いた。

イリア：その名はレイザの妻であり……父親違いの姉の名前だった。

それを知った時、レイザは自分が仕えていたアルデイ家の権力を絶対的なものにする為の道具としてイリア共々利用された事が分かり、アルデイ家に対する憎しみを覚えた。

イリアを利用したことがレイザには許せなかった。

父親違いとは言え実の姉と婚約させようなんて許される事ではない。イリアは何も知らなかった……何も知らないまま自分を庇い、捕らえられた。

アルデイ家の隠し子だと分かると全員が一斉に自分を罪人に仕立て上げ、イリアと結ばれた事は死に値する……処刑にまで追い込まれたところをイリアが助けに来てくれたのだ。

何も知らない可哀想なイリア……血の繋がりがあるという事すら知らずに自分を庇ってくれた姉……イリアはその後どうなったのかという事は逃亡していた自分を助けたゼーウエルから聞いて知っていた。

勿論、自分とイリアの間に来た子供がいることも。

その子供の行方を知りたい……とも思っている。

あの時から自分は本当の名前を捨ててレイザと名乗り、憎しみの対象であるアルデイ家に取り入って内側から全て破壊してやるうと企んだ。

しかしアルデイ家が自分の存在を知らない筈はなく、直ぐに捕らえられて反逆出来ないように片腕の腱を切られた。

ゼーウエルはこれを知らない、知られてはならない。

今、漸く残された片腕で剣を扱えるようになったのだ。

復讐を誓ったあの時、絶望していた自分の手を取ったのはゼーウエルだった……父親違いの……兄だった……。

なのにゼーウエルは自分を憎んでいる。

何も出来ない、何も知らない。

思えばゼーウエルは自分に何も教えてはくれない。

自分が実の弟であることは知っているのだから何故実の弟を憎むのか。

その理由は何なのか。

自分には全く分からない…。

アルデイ家が何故実の姉と弟を婚約させようしたのかという事すら分からない。

確かに両者ともアルデイ家の血を引く人間だから都合がいいのは分かる。

分からない事が多すぎるのだ。

この家に対して分からない事が。

権力の為？

絶対的に支配する為？

どの理由も当てはまるだろうが、他にもあるような気がしてならない。

アルデイ家は一体何を考えていた…今も暗躍し続ける法王とラザニアは何を考えているのだ。

ゼーウエルを切り捨て、自分とイリアを結ばせた理由は何なのか。

ゼーウエルは何故アルデイ家を憎むのか。

何故アルデイ家にとってゼーウエルは邪魔な存在になったのか。

未だに謎が残る。

ゼーウエルの言う『復讐』と自分が行おうとしている『復讐』はど
うにも対象が同じでも中身が違っているように思えてならない。

それを知った時、自分はそれでもゼーウエルを慕い、自分の思いを

遂げる事が出来るのだろうか。

ゼーウエルと自分が何かの宿命に翻弄されているように思えてならなかった。

レイザは考えるのをやめて隣にあつた鏡を見た。

彼の右目にはゼーウエルと同じ、細い三日月のような印が刻まれていた…彼が大人になった時に突然表れた印だったのだ。

それと同時に目の色が真っ赤に変化した。

あまりにも感情的になると額にも魔法陣が表れ、信じられない程の何かが進り、気が付けば殺伐とした風景が目の前に広がる。

今も暴走させないように必死に抑制している。

「ゼーウエル…必ず…」

ガシャンッ！

レイザは鏡に短剣を突き刺した。

忌々しい刻印等に今は気を取られている場合ではない。

バリアを破壊されてはならない。

やっこの思いで悪魔を手懐ける事が出来たのに破壊されては全てが水の泡だ。

「出でよ、アルファード」

レイザの呼び声に空間が歪み、真っ白な毛並みの猫が現れる。

ジャンに攻撃した白猫だ…勿論召喚獣である。

「お呼びで御座いますか…我が主」

「…念の為だ、時計台を監視せよ…時計台の内部に決して入れるな。入ろうとした者があつたら構うな、攻撃せよ。誰であるかと構わぬ…攻撃せよ」

「御意…」

アルファードは二つ返事で頷き、小さく鳴くと闇に消えようとしたところをレイザは呼び止め

「いつでも襲撃出来るように配下も連れていっておけ…但し霊等では気付かれるかも知れぬ、そうだな…隣にいるジャンの指示を必ず仰げ、アルファード」

「御意…しかしこの者は…」

「…今は心配要らぬ。少々細工を施しておいた…それに意思力は強い、獣程度なら瞬時に扱える」

アルファードは少しだけ不安そうに鳴いたが、やがてレイザの言った言葉の真意を汲み取ると頷き、闇に消えた。

「ジャン、目を覚ませ」

レイザはジャンを軽く揺すって目を覚まさせる。

ジャンは瞬時に目を開くと体を起こし、レイザに跪く。

「レイザ様…申し訳御座いません……」

謝罪の言葉を述べるジャンの目は虚ろだった。

レイザは冷笑しながらジャンの方を向いて指示を下す。

「心配はいらない。あまり怪しまれてはならないからな…時計台まで転移してやろう。其処からはアルファードと監視を徹底しろ…時計台には誰一人として入らせるな」

「御意…レイザ様、貴方の仰せのままに」

ジャンは意思のない目でレイザを見つめる。
素早く詠唱を終えるとレイザはジャンに向かって掌を翳した。

<実行せよ！>

ジャンは光に包まれ、徐々に消えていった。

時計台には誰一人として入らせない…。

あそこはただの時計台ではない…何かがあるのだ。

それを知り、それを手に入れるまでは誰一人として邪魔はさせない。

「ゼーウェル…貴方の為ならば如何なる事もこの私が行って見せましょう…全ては貴方の為に」

彼が憎むものは自分の憎むべきもの。

例えばそれが自分自身であるならば自分という存在さえ憎む。

だけど…もしも…。

もしも罪深き自分の願いが叶うと言つのならば。

「ゼーウェル…ゼーウェルを救って欲しい…」

闇に、憎しみに、悲しみから悪魔となったゼーウェルを救って欲しい。

野原という見晴らしのいい場所に位置する廃墟でありながら地下には太陽の光が来ない。

レイザを包む闇は更に深くなっていく。

レイザの願いは、悲痛な叫びは闇に吞まれてしまった。

第九節：黒の魔術師の願い（前書き）

どうして憎むのですか？

微かに聞こえた問いに答える事はない。

知っている、本当は憎んでもどうにもならないという事位。

だけど憎しみは心を闇に染めていく。

一度闇に染まればもう戻る事は出来ない。

無限の闇に囚われてしまった自分はもう戻れないのだ。

ただ…終わりのない闇だけが待っている。

第九節：黒の魔術師の願い

「やあ、坊や。私の言った通りに来てくれたね」

「ゼーウエル……」

自身と全く同じ姿をした分身…自身の闇が実体化した人間がそこにいた。

「なかなかお前の肉体も精神も取り込めないからな…坊や。そう言えればレイザが何か企んでいるが…私には全く関係のない事だ」

「ゼーウエル……」

「レイザは知っているだろうか？自身が“ゼーウエル”の弟だと言うことを」

「…それは知っているだろう…だが、“あれ”の事は知らない」

“ゼーウエル”は意地の悪い笑顔を浮かべて

「ふむ…レイザが知ればどうなるだろうな…坊や。お前の過去を知れば…お前が“あれ”と引き替えにレイザを助けたと分かれば。くつくつく…レイザは絶望するだろう、絶望のあまり壊れてしまっても知れないな」

「なっ……！」

“ゼーウエル”は驚きと恐怖と怒りに満ちた表情を見ながら笑って

言い放つ。

「壊れたレイザの表情を見るのが私の楽しみさ…何故驚く？
お前もそれを望んでいただろう？」

お前が受けてきた仕打ちと全く同じものをレイザに味わわせるのが
お前の復讐ではなかったかな？

私はその通りに動いているだけさ、坊や」

言い放つた後、素早く襟首を掴むと

「お前が異端児である限りお前とレイザは永久に分かち合う事はな
い。お前が異端児でレイザが正統な血を引く限りずっと…だ。レイ
ザには“あれ”は通用しないからな…だがお前は異端児だ…分かる
かい？坊や…生まれた時からお前は私と契約していたのだよ…」

そう言った後、軽く突き飛ばすと不敵な笑みを浮かべて

「逃れようと思わぬ事だな、坊や」

その後、低い声で

「その身体…暫くは自由にしてやる…どのみちお前も何れは消滅す
る…。せいぜい抗ってみるといいさ…」

笑いながら言った後、嘲笑したのを最後に消え失せた。

ふらふらしながら歩くゼーウェル…。

長い間意識を封じられていたので動く事もままならなかった。

日に日に濃くなっていく刻印…真紅の瞳…何もかもが忌々しい。

「レイザ…」

憎んでいた、妬んでいた…今ではもう唯一無二の存在なのだ。たった1人の大切な弟なのだ…暫くは解放されて自由なのだからレイザに会わなければならぬのだが…レイザはどこにいるのだろうか。

長い間意識を封じられていて、レイザに何をしたのか全く覚えていない。

もしかしたら何か言ってしまったのかも知れない、してしまったのかも知れない。

「レイザ、許して欲しい……」

その言葉は深い深い闇にかき消されてしまい、届く事はなかった。やっとの思いで扉まで歩き、部屋を出ようとしたが扉のノブを引く前に立ち止まり、辺りを見回した。

「ゼーウエル」…随分と色々なものを変えたな…。鏡も、絵画も…何もかも」

華やかなシャンデリアや美しい絵画などはなく、全体的に薄暗くなっている。

灯りのない部屋の中で母の肖像画だけが異様に目立っていた。

肖像画には所々傷がついている…ナイフで切り刻んだ傷や引っ掻いた痕…ぶつけたような痕もあるという事からして“ゼーウエル”がどれだけ母を憎んでいるのかが分かる。

疎まれて…疎まれて…誰も手を差し伸べてくれなかった時に手を差し伸べた彼は自分の心の闇だった。

両親…レイザに対する憎しみがあまりにも強すぎた結果、心の闇が

実体化してしまった。

ただドレイザにはそれが無い…イリアを奪われて、全てを失った憎しみや悲しみは強い筈なのにドレイザは心の闇に支配される事がなかった。

自分だけが光と闇…双方の人格を持ってしまった。それを『宿命』と以前彼は言ったような気がした。

<生まれた時からお前は私と契約していたのだよ…坊や>

生まれた時から既にこうなる事を決まっていたかのような台詞を思いつく度に吐き気がする。

<あんなにか生まれなかつたらこんな事にはならなかつたのよ！>

生まれなければ良かった…そう言われる度に絶望した。

その母は生まれてきたドレイザには言わなかった。

誰も自分の存在を認めていなかった事を知った彼は心を閉ざした。

それすらも『宿命』と言うならば。

生まれた時から契約を結んでいたとしても。

ドレイザを絶望させる位ならば。

自分は『宿命』を…契約を断ち切らなければならない。

新たな決意を胸に抱き、扉を引いて外に飛び出した。

願わくはその扉が二度と開かないように。

地下から1階に上りながら辺りを見回す。

地下室とは違い、華やかな装飾が施されていた。

絵画等も飾られている…息苦しい地下室とは対照的だった。

自分は長い間光を浴びた事がなかったような気がする…それだけに

窓から入ってくる光はとても新鮮だった。

「漸く1階か…」

1階に上がるだけでもかなりエネルギーを消費したような感じがするが、こうしてはいられない。

重たい足を引き摺るようにして通路を歩いた。

通路から部屋までは短い距離だが自分にとってはとても長く感じた。ようやく自室にたどり着き、扉を引いて入った。

窓から射し込む日光が眩しい…。

もしかしたら今まで地下室に籠ってあまり此方には出なかったのだろうか…。

窓からは青い空…見晴らしの良い景色が見れる。

やはり闇で形成されたせいなのだろうか、光を嫌い、闇を好むのだろうか。

「目が痛い…1階とはいえ高いところには来てなかったから…」

カーテンを閉め、椅子に座った。

感慨に耽るのはここまでにして、今から考えなければならぬ。

どうやって断ち切るか、どうやって義母達と闘うか、どうやればレイザを救う事が出来るか…。

やらなければならぬ事は沢山ある。

「…どうやってレイザの元に行くか…」

と考えていると

「ゼーウェル卿」

誰かが彼の名前を呼んだ。

「誰だ？」

振り向き、声の主を探した。

するとそこには自分の召喚獣がいたのだ。

容姿はエルフに近いが実際はレイザが操る白猫と同じく獣である。

「ヴェラーゼか」

「ゼーウェル卿：先程お出掛けになられたばかりなのに…もうお戻りになられたのですか」

どうやら“ゼーウェル”はこの召喚獣には出掛けるとでも言ったのだらう。

恐らく数分経たないうちに戻って来たので驚いたに違いない。

「…ああ、少し出ていただけだ。どうかしたのか？」

「いえ…レイザが向こうの大都市の時計台で…。一体何をするつもりなのでしょうか？」

不安そうな表情で話す召喚獣に首を捻る。

前々から何かを安置しているような噂をちらほら聞くがレイザもそれを求めているのだらうか。

しかしここから大都市まで行くとなるとかなりのリスクを背負うことになる。

かといって召喚獣を向こうに転送したら気付かれる。

再び考え込んでいると

「アルファードが向こうにいますからアルファードから何かを聞き出すと言つのは？」

「…それがあつたな…。アルファードを頼れば此方から出向かなくとも済むから…やるだけやってみよう」

どうしてもレイザに会わなければならない。

伝えるだけでも伝えなければならない。

そつと決まれば早速行動を起こさなければならない。

精神を集中させた。

<あんななんか生まれなかつたらこんな目に遭わずに済んだのに！>

<落ち着いて下さい！何があつたんですか。セイシエル様に何て事を！>

<セイシエル！私はあんな子供！あんな子供欲しくなかなかつたのにつ！あんな子供さえいなければっ！セイシエルさえいなければ良かったのに！>

自分に向かつて物を投げ付けられた…あの時。母に会いたくて来たらいきなり物を投げ付けられた。

<ごめんなさい…でもセイシエルだけは引き取りたくない。イリアは私が育てるけどセイシエルだけは近くに置いておきたくないわ>

父との会話を聞いてしまったあの時…近くに置いておきたくないと言われた。母はその後逃げるようにして出ていったらしい。よく覚えていない。

その後は義母がいつの間にか自身の息子に家を継がせる為に暗躍し

ていた。

気が付けば勝手に権力争いを起こして…死んでいった。

此方の思い等まるで無視。

権力が欲しいから自分と言う存在を口実にして権力争いを起こしたのだ。

<何で僕だけがこんな目に遭ってあいつらは喜べるんだ！>

幼い頃の何も知らなかった自分…何もかもに絶望し、心を閉ざした。

その後、叔父に育ててもらっていたけれど叔父も死んだ。

病死したのだ。その時の葬式で侍女達がひそひそ声で話す。

<あの方が死んだのもセイシエル様のせいなんじゃないの？>

<ああ…あの方、セイシエル様の事で悩んでいたから。セイシエル様、多分お優しい方なんでしょうけど何分あれじゃあねえ…>

<あれさえなければねえ>

<あれが無くてもセイシエル様は何も言わないんじゃないの？素っ気ないから〜とか言っていたし>

<可哀想に…>

侍女達の話に自分は何をしたのか覚えていない。

その後はずっと耳を塞いだ…人の話を聞かないように。話を耳に入れないように。

ガシャーン！バリバリパリッ！

窓ガラスが大きな音を立てて割れ、突風と共にガラスの破片が此方に飛んでくる。

「ゼーウエル卿っ！」

咄嗟に召喚獣がゼーウエルの体を突き飛ばしたのでガラスの破片が体に突き刺さる事はなかった。

「……！？…あ…あれは」

ゼーウエルが呆然としていると、ヴェラーゼが少し怒ったように

「ゼーウエル卿、たかがアルファードに伝える為ですよ？膨大な魔力を放出しないでください。先程から精神が乱れてましたよ」

と言った。

己を戒めながら分かった言って椅子に座り直した。

精神を集中しようとした時にふと、思い出してしまつ。

孤独だったあの頃、疎まれていたあの頃、母に見捨てられたあの頃、叔父の死に直面した時の事…。

その時の事を思い出してしまった。

「…少し待ってくれ。精神が安定しないのに魔力を無理に使つとあんな事になる」

「…分かりました」

召喚獣が返事をし、姿を消したのを確認したゼーウエルはため息をついた。

あの頃…を失った自分は1人だった。

叔父の死に対面した時の侍女達のひそひそ話を耳にしまい、シヨックを受けた自分はそこにいたくなくて飛び出した。

飛び出して…走って走って…辿り着いたのは礼拝堂だった。

古びた建物の中に入った自分は顔を伏せて声を殺して泣いた。

孤独…怒り…憎しみ…悲しみ…苦しみ…嘆き…。

本当は泣き叫びたかったけれど、声を上げるとまた忌々しそうな目で見てくるので顔を伏せて声を殺して泣いた。

椅子に座り、机に顔を埋めてずっと泣いていたのだが、流石に何か経つとそれが嫌になってしまったので顔を上げた。

ずっと自分の頬に誰かの掌が触れる。

「だ…誰だ？」

慌てて顔を上げると、そこには銀色の髪を1つに結んだ少年がいた。少年は掌を頬に当てると

「頬、濡れてるよ。大丈夫？何で泣いていたの？」

「お前には関係ない」

「そんな事ないよ、だってずっとここで泣いていたんだから。それに泣いたらだめだよ、綺麗な顔が台無しになるからさ」

少年があまりにも真剣な表情で言うので思わず

「…………泣かないよ」

と言った。

「約束だよ！泣かないでね、あ…でもここでなら泣いてよ」

「可笑しな事を言うやつだな…泣くなと言ったのはお前の方なのに」
呆れた様子で見つめると少年は妖しげに笑って言った。

「可笑しくなんかないさ…セイシエル…僕の側でなら泣いてもいい
って事だよ。僕の側だけで泣くなら、ね」

「ゼーウエル…いや、セイシエル」

呼ばれて我に返り、声のする方向に振り向いた。
そこに立っていたのは“ゼーウエル”だった。

「お前にはやはり自由を与えるべきではなかったな。自由を与えたら直ぐにでもレイザに話そうとする。
そんなにレイザが大切か、そんなにレイザをあいしているか、そんなにレイザを守りたいか」

「…ゼーウエル…っ！」

そこにいるのは自分の闇だった。

誰も知らない…自分の闇が実体化し、同じ名前を名乗る闇が。

“ゼーウエル”は嘲笑いながら残酷な真実を告げる。

「異端の癖に…父親の願いによって、父親の邪悪な願いによって生み出された、子供の癖に」

「やめろ！」

「父親が禁じられた契約を交わした事によって生み出された子供の癖に」

「やめろ！やめてくれっ！」

だが“ゼーウエル”は話をやめない。

「父親の禁じられた契約によって生かされた忌まわしい子供。私とお前は2人で1つ…だから私はゼーウエルと名乗り続け、憎み続ける。何もかも憎み続ける…それは宿命さ」

「やめろーっ！聞きたくないっ！聞きたくない！」

耐えられなくなって耳を塞いで悲鳴を上げる。

“ゼーウエル”は勝ち誇った笑みを浮かべて言い放つ。

「だから私には逆らうなよ？坊や」

宿命からは逃れられない…絶望に満ちた表情で見つめる瞳に光はなかった。

(助けて…レイザ…カイン…！)

助けを求める声は闇に吞まれて消えた。

宿命は彼を苦しませる。

遙か昔に交わした契約は彼を追い詰める。

禁じられた契約は彼を絶望させる。

助けを求める悲鳴のような声は闇に吞まれて消えた。

第十節：脳裏に潜む記憶の欠片

「ライトロード、越えたね〜！」

ティアナは伸びをしながら言ったのを隣で聞いていたレディンは微笑んで

「ああ、もうすぐヘレナだよ、ティアナ。そういえば言っていた通りだな…直ぐ近くに廃墟が見えるが…何も来なかった」

と言ったのでフェードも胸を撫で下ろしながら「幸運ですかね…レディン殿…さてさて、もう後2分もすればヘレナの村ですよ」と言った。

真つ直ぐとヘレナの村へ続く道を歩いていた。

レディン達の他にも大勢の旅人や商人や聖職者等がヘレナの村へ向かっていたのでホツとした。

少なくとも3人だけの時の物静かな雰囲気はないのだ…商人達の儲け話や旅人達の冒険話や土産話…世間話をする声が聞こえてきたのでホツとした。

その話に耳を傾けているうちはティアナを意識する事はないのだ。

何故それほどにまでティアナを意識する事がレディンには全く分からない。

ヘレナまではそんなに掛からない筈なのに、この距離がとても長く

感じる。

終わらないで欲しいと思う気持ちと早く着いて欲しいと思う気持ちの両方が心を支配していて苦しい。

この気持ちの名前をレディンは薄々は気付いていた。

ただ、それを表に出そうとは一切思わない。

たかが旅人…そんな人間がティアナに惹かれてしまった等、許されるわけがない。

況してや騎士団長で城の当主の妹であるティアナに気づかれてはならない。絶対に隠さなければならぬのだ。

しかし…彼女に気付かれないようにしながらも彼女と愛想よく話すと言うことはとても疲れる事だった。

ティアナの顔を見ると胸が締め付けられる…叶わぬ一目惚れをする等とは愚かな事だ。

と、レディンが頭を抱えている一方でティアナはと言うと

「フェード、綺麗よねっ！ライトロード抜けた辺りからますます綺麗ねえ…きゃっとうしょ！」

「ティアナ様、はしゃぎ過ぎです。もう…落ち着いて下さい」

「だって考えてみてよ。此処で最愛の人とデート出来るなんて最高だと思わない？此処で私の好きな人とデートして…綺麗な景色を見

ながら2人は見つめ合って…。何てロマンチックなの！ねえフェード、素敵じゃない」

「はいはい…分かりました…分かりましたからもうやめて下さいよ…」

何とも言えない位のロマンチック過ぎる妄想をフェードに話していたようだ…。

自分には純粹過ぎるティアナがどうしようもない位に眩しい…だから惹かれたのかも知れない。

もしもの話なのだが…もしもティアナと付き合える事になったらどうなるのだろうか…やはりロマンチックなデート先とかを決めなければならぬのか…。

と想像すると自分はかなり面倒臭い相手に恋をしてしまったのではないかと思った。

想像しただけで苦笑いをするレイインにもティアナは話題を振る。

「レイインはどう思うのよ？」

いきなり話題を振られたレイインは無難に「いいんじゃないか」と答えた。

するとティアナはうつとりとした表情を浮かべながら

「美しい景色を見ながら…いい雰囲気にもまれて…いつしか2人はお互いを見つめて…キス…。きゃーっ！何てロマンチックなのかしら！」

と、1人妄想した後に悶えるティアナを見ながらレイインは密かなため息を洩らした。

しかし、もしもティアナと付き合う事が出来たら…と言う事を考えていた自分もティアナと対して変わらないので何も言えなかったが、やはり面倒臭い相手に恋をしたのだ…そう思うとレディンは更に悩まずにはいられなかった。

フェードはレディンとティアナの様子に呆れてしまい、何も言わなかった。

(この2人、やっぱり似た者同士なのでしょうかね…。レディン殿が焦れたいのがまた…)

フェードはレディンとティアナの事には一切口出ししないと言う事を密かに誓った。

何だかんだ言ってお似合いの2人の仲を自分がわざわざ引き裂く事はない。

話し掛けないようにしようと思ったフェードは1人先々進んで行く。

フェードが何も言わなくなってしまった事に気付いたレディンは途端にティアナを意識してしまった。

今までティアナはフェードと話していたので平気だったのに、今はレディンだけを見て話している。

そう思うとティアナを意識せずにはいられない。

「レディン、聞いてるの？」

「あ…ごめん。聞いてなかった…」

レディンは困ったような顔で返事をした事に違和感を覚えたティアナは不安そうな表情で

「…何か…あつたの？」

問い掛けてきた。

ティアナの事で悩んでいるなんて言う事も出来ず、レディンは「何でもない」と言って終わらせたかった。

「無理しないでよ、何処か悪いんでしょう？だってさっきからずっと浮かない顔してるし」

と言って来たので、レディンはますます戸惑ってしまった。

どうすれば良いのだろうか…また厄介なのは悩みの種である本人が自分を心配してくれて真剣に問い掛けて来たのだ。

しかし下手な返事をすればティアナに自身の気持ちを察されるかも知れない。

それだけは避けたい…レディンは何が何でも答えたくなかったが…答える事もなくなったのである。

「ヘレナの村が見えて来ましたよ、レディン殿…ティアナ様」

フェードが声を掛けてきたのだ。

レディンはティアナの問い掛けには答えず、曖昧に笑いつつ

「分かりました。ティアナ、村が見えて来たみたいだよ」

と、笑って言った。

ティアナは少し不満そうな顔をしつつもレディンが笑ったので内心ホッとした。

村までは後少しなので歩くスピードを速めた。

早いところ色々調べてしまわなければならない…でなければ6年前の事件と同じ様な悲劇が起こるかも知れないのだ。程無くして村に辿り着き、入り口付近でフェードは

「さて…私はティアナ様とジャン副団長の行方を聞いて来ましようか…レディン殿は…6年前の事件について調べて下さい。此処を待ち合わせに…それで構いませんか？」

フェードの案にティアナは不満そうに言った。レディンとは別行動になるからだ。

しかしフェードがそう言った以上ティアナは文句は言わずに渋々頷いた。

「うー…分かったわ、フェードがそう言うならさ…。レディン…また後でね」

と言ってフェードと2人で行ってしまった。

レディンは「また後で。」と言った後、誰にも聞こえないように呟いた。

「…また後で会おうな…ティアナ」

この呟きが誰にも聞こえていなかった事を願いたい…その後はさてどうするか。

6年前の事件が起こった場所に向かうのが普通だろう…誰かに案内してもらいたい。

何せ村に来るのは初めてなのだから。

初めての筈なのだ…なのに何故、此処に来た時に一瞬懐かしいと思ってしまうのだろうか。

よく分からない…レディンは首を傾げて、適当な場所に足を運んだ。

足は自然と少し外れた場所に向かってしまう。

別にそこに行く必要はない筈なのに、何か行かなければならない気がして…行かないと取り返しのつかない事になりそうな気がして…そんな気がしてしまうと歩くスピードはますます早くなってしまう。

< ……なんだ、許してくれよ >

脳裏に過る…声。

何だ？何なんだ、この不快感は…。

< ………なのか……兄貴…変わったな…昔はそんな人じゃなかったのに…… >

自分は以前…此処に来たことがある気がするのだ…目的などは全く分からないけれど、とても焦っていたような気がする。

< ………2人なのか？1人は？1人目の子供は？ >

思い出さなければならぬのは分かっているけれど、思い出したくない。

思い出すと何か色々な事が壊れてしまいそうで、前みたいに気儘に旅が出来なくなりそうで、ティアナと一緒にいられなくなりそうで…今まで積み上げてきたものが一瞬で崩れてしまいそうで怖かった。

「 ……っ！ティアナ…」

思い出したくない…思い出さなければならぬ…忘れてしまった記憶を取り戻さなければならぬけれど、取り戻したくない…。取り戻せばもう今までの自分ではいられなくなりそうだった…それが怖かった。

何も思い出したくない、今は何も知りたくないのだ。

(ティアナ…俺はまだ…何も…)

これ以上進んではいけない…レディンは何となく、そんな気がした。

その頃、ティアナとフェードは酒場で色々と聞き回っていた。

今の時間帯、村人はほとんど酒場でどんちゃん騒ぎをするからだ。

酒場のマスターやウエイトレスはジャンの事についてよく知っているのか話し始めた。

「ふんふん…ジャンはとても体の弱い子でね…よくシャルのところに行っていたね、シャルは詳しくだったからさ…それにジャンとは幼い頃から親友だしな。確かシャルは親が何か医者じゃなかったかね…だから詳しくだったんだけど」

「親が医者…?」

フェードが聞くとマスターは頷いて

「ああ…多分父親じゃないかな…しかしシャルは父親とは一緒にやなかったな…母親と一緒にだったな…うん。そうだ!そう言えば8年前辺りに…誰か一緒にいたな」

途中で思い出したように言うとフェードは素早く反応した。

「それはどんな人物だったんですか？」

と聞くとマスターは

「聖職者の身なりをしたとても若い男だったなあ…此処ではあまり見掛けない容姿だったから覚えていて。ジャンも一緒だったが…ジャンやシャルルよりもずっと若く見えたな。あれじゃ普通は学校通ったりしているような感じだったが…取り敢えずとても若かった。名前は知らんが。その後ジャンが来て、シャルルがよく分からないうとぼやいていたなあ…ジャンは多分知らなくて偶々落ち合ったから一緒に向かったらしくて」

と話した。

ジャンはシャルルの親友で何時もよく共に行動していたようだ。それなのにシャルルの事についてジャンが知らない事があるとは思った。

幼い頃からずっと一緒なら普通はもっと色々知っていそうなのに。

「6年前の事件はジャンにとってショックだったんじゃないか？もつと色々聞くつもりだったみたいだしな。シャルルの為に騎士団に入隊するって言っていたし」

と言った後、来ていたお客に呼ばれた為にマスターは申し訳なさそうな顔で

「すみませんな…もう戻らないとな…では。ティアナ様に会えて良かったです」

と余計な事も交えながら言った後、急いでお客のところに向かった。

「ジャンとシャルルは親友なのよね？」

と、ティアナが聞くとフェードは「そのようですね。」と言った。
ティアナは首を傾げながら

「話を聞いた限りでは何だかシャルルが可笑しいわね…ジャンにも
言えないような事でもしていたのかな」

と言った。

フェードも気になる点があるらしくティアナに

「およそ8年前にシャルルが若い男を連れていたっていう点について
気になるな…8年前と言えばライハード城にいた有名な牧師が暗
殺されたりした事があちこちで起こった『牧師狩り』とほとんど同
じ時期…この頃聖職者は村に立ち入れなかった気がするが…」

と言った。

8年前の『牧師狩り』とはライハード城の近くにある修道院に勤め
ていた牧師が殺された事件である。別名『牧師殺し』とも言つが。
隣の地域でも有名な牧師が殺されたと言った事件もあり、聖職者は
あまり彷徨いてはいけなかったのだ。

「取り敢えずレディンのところへ行かないと！ね、フェード…早く
レディンのところに行こう」

とティアナは言ったがフェードは首を振って

「いいけません、ティアナ様。レディンを暫く1人にしてあげて下さ
い」

と言った。

ティアナは何故か分らずフェードの肩を揺さぶって

「どうして！？レディンと待ち合わせしなきゃいけないんじゃないの？ね、早く行こうよ！」

強く言ったがフェードは首を横に振った。

ティアナは何故フェードがそんな事を言うのか分らず何故、どうして！と言つて聞くとフェードはため息をついて

「彼は…貴女にみつともないところを見せたくないでしょうから。1人にしてあげて下さい…ティアナ様」

と言った。

そう言ったフェードの声は何か思い詰めているような響きがあった。ティアナはフェードが思い詰めたような声に驚き、それ以上何も言えなかった。

その頃…レディンはと言うと家から少し外れた場所にある宿屋で休んでいた。

先程から頭に激痛が走り、耐えられなくなったからだ。

あの声を聞いた時から頭に鈍い痛みが走り、それは徐々に強まっていったからだ。

シスターはレディンの顔色を窺いながら

「大丈夫ですか？」

と聞いたのでレディンは微笑んで

「ええ…今は大丈夫です」

と言った。

シスターは胸を撫で下ろした後、問い掛ける。

「貴方のお名前を教えてくださいませんか？お連れの方が探しているかも知れませんか…」

と言ったところから放送等をして伝えるつもりだろう。
納得し、名乗る事にした。

「レディンです」

と言つとシスターは驚いたような声を発し、振り向いて

「も、もう一度名前を言って下さいませんか？」

と言った。

わけが分からないままレディンは首を傾げつつ、もう一度

「私の名前はレディンですが…どうかしましたか？」

と言った。

シスターは怯えたような表情を浮かべて

「レディン！？な…何故貴方が…あ…貴方様は…ファレスにいたはず…！」

と言った。

レディンはさっぱり分からずシスターに向かって

「何か知っているのですか？お恥ずかしながら私は記憶を無くして
いて…分からないのです…ただ、レディンと言う名前だけは覚えて
いたのですが」

と言った。

シスターはまた驚いた後、狼狽しながら

「そうですか…：あんな事があって…：嗚呼…：レディン様…：貴方様は
何も知らない方がいいですわ、早く逃げて…：遠くへ逃げて下さい…
早く、早く逃げて！」

レディンに外へ出るように言った。

わけも分からないままレディンは指示通りに走って外へ出た。

走って、走って…：レディンが宿屋から出て少し経った後、甲高い悲
鳴が響き渡ったような気がしたが、レディンは気にも留めなかった。
村の入り口まで走って…：此処まで走れば大丈夫かと思った。
何も知らないティアナとフェードが既にレディンを待っていたので
レディンはホツとしたような笑みを浮かべて

「フェード殿、ティアナ。すまない…：待たせた」

と言った。

ティアナは満面の笑みを浮かべて

「レディン！大都市に行きましょ！大都市も調べないと！」
と言った。

レディンはそれに頷き、村を出た。

しかしフェードだけはずっと俯いたまま何も言わなかった。

まだ…彼等は知らないだろう。

暗躍する悪党達を、過去の惨劇は何を示すのか…。

それを彼等が知った時、悲劇の闘いが…何も生み出さぬ無益なる闘いが始まると言う事を…。

未だ知らず。

雲一つない青い空と眩しい太陽の光が彼等を見送っていた。

間奏：復讐者、降臨（前書き）

終わり無き闇の始まり。

果てしない闘いの始まり。

古より決められた宿命が廻り始める。

復讐を誓った者達は宿命の意味をまだ知らぬ。

ただ、全てを奪われた悲しみの果てに復讐を誓い、憎悪の炎を纏いて踊り狂う。

しかし全ては宿命に踊らされていたに過ぎぬ。

彼等は決められた通りに動いただけに過ぎぬ。

苦しみに呻く声は、悲痛な叫びは、切なる願いさえも闇は呑み込んでいく。

間奏：復讐者、降臨

「イリア様！」

駆け付けてきたのは護衛になったばかりの若い剣士だった。イリアは振り向き、剣士に向かって微笑んだ。

「まあ…カイン…貴方なのね。落ち着いて、どうしたのかしら？」
イリアが息を切らしながら話そうとするカインを宥めると、カインは深呼吸をした後

「イリア様、お身体の方はもう大丈夫なのですか？セイシエル様も心配なさっておりますよ？なの…」

心配そうな表情で体を気遣うカインを見たイリアは微笑みながら

「貴方は優しいのね、訓練中なのに…息を切らして此処まで来るなんて。どうして皆貴方の事を悪く言つのかしら」

少しだけ悲し気な表情を浮かべて言ったのでカインはまた慌てて

「イリア様っ！気になさらないで下さいませ！私がイリア様を気遣わねばならない筈なのに…！」

深々と頭を下げながら言ったカインを見たイリアはカインの側に近づいて

「大丈夫よ、カイン…私は大丈夫だから、心配しないで」

と言った。

あの時はまだ知らなかった：イリアに純粹に惹かれた自分がいた。

あれからイリアとは何回も交流を深めていく事になる。

聖女のように美しいイリアの護衛として働く事を光榮に思っていたカインはイリアに心配をかけないように努力した。訓練に戻れば過酷な仕打ちが彼を待っていた。

「イリア様に取り入って卑怯な奴め」

「裏切り者ソフィアの息子だろ？お前がいたら迷惑なんだよ、帰れ」

「セイシエル様がどれだけ苦労したか分かってないんだよ。だからこうやっていられるんだろ？」

バシヤツ！

頭上から冷たい水を浴びせられたカインはただじっと耐えていた。今は真冬：真冬に冷たい水は体に相当来るが、決して弱味は見せなかった。

「帰る帰る」

と言って嘲笑しながら帰って行く子供達：カインは俯いて声も出さずに泣いた。

言い返す事も出来ない、頼れる人すらいないこの地では孤立無援：周りは全て敵だった。

だけど耐えた、耐えて耐えて耐え続けた。

「戻ら…ないと…イリア様が心配なさる…」

冷たくなった体…風が当たってくるのでとても寒い…足が震え上がって立ち上がれなかった。

もう泣くしかなかった…そんな時…

「おい、どうしたんだ!？」

急いで駆け付けて来た人がいた。

「セイ…シエル様…」

「カイン!大丈夫か?」

心配そうな声が響き渡る…カインはすがりそうになる気持ちを抑えて

「大丈夫です…」

と言って立ち上がるうとしたが、足が震えて立ち上がれなかった。先程、足を蹴られてしまい、傷も出来てしまったのだ。

「おい…その足…どうしたんだ…もしかして訓練で?」

セイシエルは鋭かった…訓練中にひたすら大勢の人間に蹴られたり殴られたりした傷だった。

「取り敢えず…足出せ…これは酷い…」

擦り傷が先程足を蹴られた事によって大きく広がっていたのだ。持っていた傷薬を綺麗な布に染み込ませて傷口に塗り付け、ガーゼを巻いた。

カインは内心戸惑っていたが、顔を上げてセイシエルに話し掛けた。

「あの……」

「何だ？」

セイシエルが反応したのでカインは少し意外そうな顔をした後

「……ありがとうございます……セイシエル様」

と言ってカインは立ち上がろうとしたが、セイシエルはそれを制止した。

「カイン……いつも訓練でこんなことをされているのか？」

はっきりと指摘されてしまい、カインは戸惑ってしまった。

セイシエルにそうだと言ったらまたあんな仕打ちに遭いそうな気がして仕方なかった。

「……セイシエル様……」

それでも、初めて心配してくれた人……気が付けば涙が流れ落ちる。

「カイン……」

セイシエルがどんな表情をしていたのかは分からない……ただ、何も

言わずに側にいてくれる。

この時から…セイシエルはカインにとって光になったのだ。その後カインはセイシエルやイリアの護衛として仕える事になり、イリアの護衛が終わればセイシエルの所にいた。

セイシエルは何も話し掛けたりしななければ、声を掛ける事もなかった。

ぶっきらぼうな返事をしただけで終わってしまい、会話が成り立たないがそれでも良かった。

表情で分かるから…少なくとも心配はしてくれているのだろうが、それを表に出すことはなかった。

不器用で真面目で優しい…セイシエルはそんな人間だった。

これと言った会話は無いが、不思議と心は落ち着く。

だから…だからこそ、悲しかったのかも知れない。

護衛を務めているうちにイリアに対して恋心を抱いた事が。

そつなるように仕向けられた事が。

護衛を務めていたイリアを意識するようになったのはそれから半年経った頃だった。

自分の話を真面目に聞いてくれるイリアの顔が間近にあるだけで、ふとした時に見る笑顔を見ただけで、胸が高鳴るのを意識せずにはいられなかった。

だけどイリアに告白なんて出来るわけがない…身分が違い過ぎるのだ。

溜め息をつく日々が続いた…どうすれば良い？どうすれば抑えられる？

どうすれば…。

頭を悩ませる日々が続いた。

そんな想いを隠しながら護衛や任務を続けていた時、信じられない程の出来事がカインを待っていた。

今回は村に魔物が襲撃したと言う報告を受けたので討伐に向かわなければならぬのだが、その直前にカインはイリアに呼び出された。

「如何なさいましたか？イリア様」

「カイン…これから行くのでしょうか？」

「ええ…な、何故イリア様がその様な事を。」

カインは内心かなり嬉しかったが、何処でそんな情報を手に入れたのだろう。

するとイリアは顔を赤らめながら

「…いつもセイシエル兄様に…貴方の事を聞いているので…今日もセイシエル兄様に…貴方の事を聞いたので…」

と言ったのだ。

セイシエルにわざわざ尋ねるなんて意外だと思つと同時に凄く嬉しかった。

しかし時間がない、カインは申し訳なさそうな顔をして

「イリア様、私はもう行かなければならないのです…申し訳ありません…でもいつも気にかけて下さつてありがとうございます。しかし行かなければならないので…これで失礼致します」

急いで敬礼すると、背を向けた…イリアは慌てて走ろうとしたカインを呼び止めて

「カイン…！帰って来たら貴方に伝えたい事があるの…聞いてくれますか？」

と言った。

勿論聞くつもりだ、断る理由はないのでカインは笑顔で

「構いませんよ、私でよろしければ。ではまた後で」

と言った後、カインは背を向けて走った。

村に襲撃した魔物は苦戦する程の敵ではなく、あっという間に倒れてしまった。

大した犠牲を払う事なく魔物達を全て撃破し、カインは怪我人の治療に当たっていた。

しかし…カインはそこで思わぬ事を村人から聞いてしまうことになる。

「大丈夫ですか？」

腕を押さえ、呻いている青年にカインは声をかけた。

青年は痛みに顔を歪めながらも

「はい…大丈夫です…ただ腕が…」

と言って顔を上げると、カインの顔を見た瞬間、青年の顔色はみるみる青ざめていった。

「どうかなさいましたか？」

青年の顔色が変わったのを不安に思ったカインは青年に聞いた。
青年は口を震わせながら

「カイン…な…何故、貴方が…アルデイ家に…」

と言ったのでカインは俯いた。

アルデイ家の内部に入って真実を知りたいのだが…何故両親が死んだのか分からなかった。

青年はカインが何も知らない事を知り、ますます怯えた表情を浮かべ

「貴方はアルデイ家の……。ああ…これ以上言えない…とにかく大丈夫です…腕の傷は自分で何とか出来ますから」

と言つてカインから目を逸らし、腕を押さえて立ち去つた。

確かに両親はアルデイ家によつて殺された…だが、何故アルデイ家の人間に殺されなければならないのか分からなかったのだ。

青年は知っているのだろう…しかし、何故か聞きたくなかった。

真実を知つてしまえば、イリアと一緒にいられなくなるかもしれないと思つたからだ。

任務を終えたカインはイリアのいる所に向かった。

イリアがカインに話したいと言う内容とは何だろうか？

カインは走つた…イリアが自分に話したいと言つた事は何なのか…

それが気になつて仕方無い。

早く、早くそれを聞きたくて仕方無いのだ。

「あつ…カイン！」

イリアはカインが急いで走つて来たのが見えたのか、足音が聞こえていたのか駆け寄つて来た。

カインは慌てて立ち止まりイリアの方を振り向き、頭を下げた。

「イリア様……」

「カイン、任務を終えたと聞いたので探していたの。時間は大丈夫かしら？」

勿論大丈夫だ、カインは頷いた。

イリアは目を輝かせ、カインの手を引いて連れていく。

「イリア様、一体何処へ？」

「貴方と二人きりになれるところよ、カイン」

と言ったときイリアは全く話さない。

何を話すのだろう、何か伝えたい事があるのだろうか。

イリアが向かった先はよくセイシエルやカインと一緒に話したりしていた庭の裏側である。

イリアはそこで立ち止まり、深呼吸をした。

「カイン……ずっと話したい事があったんだけど言えなかったの……」

「……私に話したい事？ずっと言えなかった……？」

カインが驚き、聞き返すとイリアは頷いた後に言った。

「言ったら……貴方に迷惑が掛かると思って。だって私は守られるだけのお嬢様で貴方は訓練に護衛に忙しいもの。セイシエル兄様から聞いたの……貴方の事を色々……。貴方が身分の高い人間を嫌っていることも酷い仕打ちを受けている事も聞いたわ……だから」

そこまで言い終えるとイリアは少し怯えたような表情を浮かべた。カインは内心驚きながらも黙って聞いている事にした。

カインが黙っているのでイリアは話を続けた。

「カイン…それでも…それでも私はカイン、貴方の事が」

その後は声を出さずにイリアはゆっくりと口を動かした。

“貴方の事が好き”と。

カインはイリアの告白を前にしてどうすれば良いのか分からなかった…。

イリアに恋心を抱いているのは確かだが、自分は貴族を、アルデイ家を憎んでいる。

この…激しい程の憎悪がイリアに向けられるかも知れない…自分と付き合ったらイリアまで貴族達に酷い仕打ちを受けるのではないか？自分の為にイリアが苦しむ姿を見たくない…カインは顔を上げてイリアに告げた。

「貴女の気持ちはとても嬉しい…貴女にそこまで想って頂けるなんて光栄です、イリア様。しかし私は貴女の想いに応える事は出来ません…理由はお分かりでしょう…私のような人間と共にいれば貴女まで…。私はそれが辛いのです…申し訳ありません…イリア様。それに貴女には私のような人間よりもっと素敵な方がいるはずです」

所詮自分は身分の低い人間…イリアはアルデイ家のお嬢様…住む世界が違い過ぎる。

カインは背を向けて立ち去ろうとしたが、イリアは呼び止めた。

「待つて、カイン！私は…私はそれでもカインの事…」

「…イリア様、分かって下さい。貴女と私は身分が違い過ぎます。アルデイ家のお嬢様である貴女は私のような人間と結ばれる事等許される筈がありません」

カインはそこまで言うと、イリアの顔を見ることなくその場を立ち去った。

カインは一方的に言って逃げ出して来た。

彼女の事は好きだ…。

どうしようも無いくらい好きだ。

けれど、感情のままに進んだ結果は両親と同じようになるかも知れない…愛を貫いたばかりに彼等は殺されたと、いつか誰かが言ったのだ。

両親は恋愛によって自身の命を失った…それを目の当たりにしたカインは恋愛に対してとても臆病になっていた。

しかし無理はない…相手はアルデイ家のお嬢様だ…貴族の中でも頂点に立つべき地位にあるアルデイ家のお嬢様だ…。

どうなるかは想像がつく。

カインは深いため息をついた…。

好きなのに諦めなければならぬ…好きだからこそ諦めなければならぬ。

恋心と世間体の板挟みでカインは頭を抱えた。

苦しみが多すぎて可笑しくなりそうだ…それでも明日からは何も変わらぬ表情でイリアに接しなければならぬ、護衛としての務めを果たさなければならぬ。

気まずいだろう…イリアだってどう自分に話せばいいのか、どう接すればいいのか分からないだろう。

イリア…君は今…悲しんでいるだろうか…傷付いて泣いているだろうか。

傷付けたくなかったのに、悲しませたくなかったのに、傷付けるよ
うな…悲しませるような事を言ってしまった。

カインは自分の不甲斐なさを悔やみ、イリアに対する申し訳ない気
持ちで泣いていた。

暫くして、カインは頭を抱えてため息をついた。

後4時間すれば護衛としての任務を果たさなければならなくなるの
だが、どうすればいいのだろう…。

何度も深いため息をつき、悩んでいると扉を叩く音がしたのでカイ
ンは振り向き「誰ですか？」返事をする、直ぐに返ってきた。

「私だ、カイン」

どうやらセイシエルだ…何故セイシエルが？と、カインは疑問に思
いつつも、それを表に出す事はなく、セイシエルを招き入れた。

「セイシエル様、どうなさったのですか？」

セイシエルの表情が険しい…何故だろうと思ったが、イリアの事
であろうか。

カインが考えている事など知らないのか、セイシエルは口を開く。

「臆病者が」

カインはその言葉を聞いて、セイシエルとイリアとの事を知ってい

ると思ったのだ。

「セイシエル様、イリア様から？」

そう尋ねてみたがセイシエルは薄く笑って

「いや、丸聞こえだったからな」

と言った。

「両親の事が怖いか、カイン。まあ仕方あるまい…いや、違うか。お前は両親と同じような目に遭いたくないから拒むのか」

と言ってセイシエルは笑みを浮かべた。

カインを震え上がらすには十分な程の凍り付いた微笑み。嘲笑うような、軽蔑するような、見下すような笑みだった。

いつものセイシエル様ではない…と、カインは思った。

セイシエルはこんな冷笑を浮かべる人間でも、冷酷と思わせるような表情を浮かべたり、言動したりする人間でもなかった。

誰に対しても平等、苛めや人を馬鹿にするような事や横取りするような事を何よりも嫌う正義感の強い、優しい人間だった。

今、カインの目の前にいるセイシエルは自分の知っているセイシエルとはかけ離れている冷酷な人間であった。

「お前は結局自分が大事なのだ。自分の事が大事だからイリアを傷付けたくないという言い訳を作ったにすぎない。自分が逃れたいだ

けだろう？カイン、臆病で弱虫なお前はイリアが傷付く事以上に自分がこれ以上の仕打ちに遭うのが怖いだけだろう？本当は自分を守りたいのだ、自分を傷付けたくないのだ、だから本音を隠す」

セイシエルは冷笑を浮かべながら次々と鋭い事を言ってくる…そのどれもが当てはまり過ぎて何も言えなかった。

何より怖いのはセイシエルが冷笑を浮かべている事だった。

怖い、怖い、目の前にいる人は誰？

カインは怯えたような表情を浮かべた。

少しだけ俯き、落ち着かせながら顔を上げるとセイシエルは

「感情を押し殺して後悔する位なら恐れずに思うがままに進め。何かあったら私で出来る事があるなら手伝うから」

と言って肩を叩いた。

セイシエルはもう冷笑を浮かべてはいなかった。

いつもの優しいセイシエルだと思ったカインは内心ホツとしたのである。

何故セイシエルが冷徹な人間だと思ってしまったのだろうか…。

差し伸べてくれたこの手はいつも温かいのに。

カインはセイシエルの言葉をずっと考えていた。

そ那样的かも知れない…自分は結局自分を守りたくてイリアの想いを拒んだのだ。

自分もイリアが好きなのに、抑える事が出来ない程好きなのに、隠そうとして…諦めようとして、無理矢理抑え込もうとして何の意味があるのだろうか。

その方がイリアを傷付けるかも知れないのに自分は何を考えていたのだろう。

「有り難う御座います。セイシエル様」

セイシエルにはいつも助けられてばかりだ。

この人は光…自分にとって希望の光だ。

何かが進み上げてくる…セイシエルはいつも優しい…自分は何も返していないのにこんなにも優しくしてくれる。

カインはセイシエルに向かって微笑んだ。

「何を笑っているんだ、カイン」

セイシエルはカインが笑っているのを見て、少しだけ困ったように言った事がカインには分からなくて

「貴方のせいですよ」

と、微笑みながら言った。

セイシエルはますます困った表情を浮かべていたので、カインは相変わらず笑っていただけだった。

だから気が付かなかつたのだ…セイシエルが何故困ったような表情を浮かべているのか。

セイシエルの言葉を胸に、カインはイリアの部屋に向かう。

イリアに会ったら真っ先に伝えなければならぬ…自分の想いを。

後悔しないように、悲しまないように、これ以上傷付けないように…。

無理矢理諦めるよりも、抑え込むよりも自分に正直であれ。

セイシエルを信じたあの時、自分はまだまだとても純粹だった気がした。今でもセイシエルに対する忠誠は捨てていないが…あの時は純粹に、ひたすら一途にセイシエルを尊敬していたのだ…あの人だけが自分の全てだったのだ…今でも絶対的な忠誠を誓っているが。

そして…イリアの部屋に辿り着いたカインは深呼吸をした後、ゆっくりと扉を開いた。

部屋の中に入ると、イリアは突き刺すような、怯えたような視線をカインに向け、こう言った。

「あら、来て下さったのね、カイン。もう来てくれないのかと思っ
たわ」

意外そうな表情を向けて、刺々しい様子で話しているイリアにカインは申し訳なさそうな表情を浮かべた。

「…貴女を護衛する事が私の任務ですから」

カインはどう返せば良いか分からず、そう返事をしたのだが、イリアは相変わらず怯えたような表情を浮かべつつ

「無理してまで任務なんてしないでいいわ。どうせ任務以外では自分の立場を弁えない私と話したくも無いでしょうから」

ぴしゃりと言ってカインを拒絶した。

「イリア様…」

何も出来ない…はっきりと拒絶されてしまった。

あの時、素直になれたら良かったのにと激しく後悔し、これ以上此処にいるのが辛くてカインは背を向けた。

「ちょっと待って、カイン」

イリアはすっかりとした：命令するような口調でカインを呼び止めた。

「何でしょうか？」

と、返事はしたものの、イリアのすっかりとした口調に内心驚いた。勿論、それを表に出すことはないが。

カインが振り返ったのを見たイリアはホッとしたような表情を浮かべながらも、険しい口調で

「私の側に来てよ、カイン」

と言った。

「それは命令ですか？」

と、カインが聞くとイリアは一瞬だけ戸惑いつつも、

「ええ、そうよ。命令なら聞いて下さるのでしょう？カイン、だって貴方は私の護衛ですもの」

はつきりと言った。

カインは先程の言動がイリアの逆鱗に触れてしまったのではないかと思っただが、どうすればいいのか。

答えは簡単だ：取り敢えずイリアの命令通り、側に居れば良いのだ

が、戸惑ってしまい、なかなか側に向かおうとはしなかったのでイリアは激しい口調でカインに命令する。

「早く来なさい、カイン」

と言われて仕方無くイリアの手が触れるところまで来たのだが、内心ではイリアは一体何がしたいのだろうと思った。

イリアは少しだけ驚きながらカインに向かって話し始める。

「…卑怯ね…私は。権力を行使する事を貴方は一番嫌うのに。でもね、カイン…私はどうしても貴方を諦める事が出来なかったの…貴方が好き、カイン…ねえ、どうすればいいの？」

そこまで話し終わると先程までの険しい表情は消え失せ、泣き始める。

どうすればいいの？カインが1人悩んでいた事だった…イリアも同じように悩んでいたのだ。

「イリア様…！」

カインは申し訳なさそうな表情でイリアの名前を叫んだ。

「申し訳ありません…私、1人で勝手に決め付けていた…イリア様はアルデイ家の娘…私はただの田舎村の生まれ…身分があまりにも違う…それに私はいつか恨みを貴女に向けてしまうのではないかと思ひ、怖かったのです…ずっと貴女が好きでした…今でもそれに変わりはありません」

イリアに何か言って欲しい…そうすれば救われるのに。

カインはさすがのような眼差しでイリアの方を見つめる。先程まで泣いていたイリアの目にはもう涙はなく、穏やかな口調で言った。

「カイン：大丈夫よ、ずっと側にいるから。貴方の側にずっといるから：貴方の力になりたいの、カイン：お願い、そんな顔をしないで」

その言葉を聞いたカインは救われた気がした。

この時はイリアもカインもただ、お互いの想いを知り、強く結ばれた事を喜んでいたので。

その様子を密かに聞いていたセイシエルは冷徹な表情で

「カイン：貴様を漸く苦しめる事が出来る：母上を奪った貴様を地獄に突き落とす事が出来る：！」

と、恐ろしい程の声の低さで呟いた。

凍てつくような眼差しでカインとイリアの会話を鼻で笑いながら聞いていた。

憎しみと悲しみと（前書き）

凍てついた眼差し、冷徹な表情、嘲笑を浮かべ、憎しみに燃える。

孤独で哀れな坊やは救いを求める。

あの、傷付いた眼差しが、純粹な瞳が、穢れを知らない幼い子供の
全てが欲しかったのかも知れない。

憎しみと悲しみと

愛された記憶すらなかった：母はいつも父から逃げるようにして何処かへ行く。

（何処へ行くのだろうか？こんな真夜中に）

と、彼は物心ついた時からずっと疑問に思っていた：何処へ行く？父親といるときの母とは違い、随分嬉しそうな表情をする…。

でも自分の顔を見ると不愉快そうな顔をして、また目を背けた。

何か…悪い事でもしたのかな？

あの不愉快そうな表情の意味をあの時はまだ知らなかった。

父親のところへ向かうと父親の隣には綺麗な女の人がいた：母親とは違う人と一緒にいてもいいの？

子供ながらに父親には疑問を持っていたが、父親が母親を愛していなかったという事を知ったのは随分先の話だった。

今思えば、その時は自分でも驚く程純粹でこの家の汚れた事情など知らなかったのかもしれない。

いや、理解出来なかったのかもしれないと言った方が適切なのだろうか。

自分が子供の頃からずっと孤立していた事、誰一人として自分を愛

してくれない事、存在すら認めてくれない事に気づいたのは8歳の頃だった。

だから困ってしまったのだ。

「ありがとうございます…セイシエル様」

自身の悩みを解決してくれてありがとうございます…という意味だろう。

そんな風に笑顔を向けられても困る。

自分はカインを憎んでいるのにそんな風に笑顔を向けないで。

少し困ってしまい、曖昧に笑っただけだった。

自分を愛してくれなかった母親は目の前の青年カインを溺愛していたようだ。

あんな純粋な笑顔など自分の殻に閉じ籠もってしまい、心を閉ざした自分には出来ない。

カインが仲間呼び出され、苛めを受けていた事は知っていたが、内心では清々したのだ。あんな奴、もっと痛めつけられてしまえ、二度と立ち上がれなくなればいいのに。

そう思っている人間にこいつは何かと笑顔を向けてくる。

そもそも何故助けた？

あの時、何故助けたのだ？

イリアと結ばれて、幸せだったカインを地獄に突き落とすつもりだったのに何故あんな助言をした？

姉弟同士で体の関係を持っていると周りの人間に知らせてカインを母親と同じ目に遭わせる事が何もない空っぽな自分の唯一の目的だった。

イリアが犠牲になるのは少し哀れだが、仕方あるまい…自分が仕掛けた罠にイリアが勝手にはまっただけ、カインが勝手にはまっただけなのだ。

取り敢えずカインさえ始末すれば自分は清々するのだ。

あんな奴、苦しめばいい…苦しんで苦しんで悲しんで絶望して…。

「カイン…カインの分際で…！」

奴は実際にはアルデイ家の人間の一部に嫌われていただけで、下級生には何かと慕われていた。

またそれが気に食わなかったのだ。

イリア…カインに対する純粋な想いを聞く度に申し訳ないという罪悪感が込み上げてくる。

どうしようもない程の罪悪感と悲しみが込み上げ、思わず手をついて謝りたくなるが、カインに対する憎しみが良心を上回り、謝罪出来なくなつた。

イリアとカインが恋人同士になったという事を聞いた時、普通は喜ばしいのに心に残ったのは虚しさだけだった。

姉と弟という事実を知らない2人は純粹に惹かれただけなのに、本当は姉だった、弟だったと知ったら取り返しのつかない程傷付くのではないかと思った。

「もう後戻り等出来ないさ…これが私の決めた事なら」

そう言い聞かせて、作戦を実行した。孤独な自分の唯一の手段…カインに対する復讐の終焉だった…等。

カインはイリアと体の関係になっっている、実の姉弟なのに、と。

それが遂に周りに知れ渡り、カインはアルデイ家に捕らえられた。

裁判の結果カインは処刑になった…しかしカインはイリアを守る為に自分が強引に事に及んだと言ったのだ。自分の望んだ結果だ…もうこれで苦しむ事もない。

牢屋でカインの面でも拝んでおこうか…と思い、牢屋に足を運んだ。

カインは自分の姿を見て、傷付いたような、軽蔑するような表情で

「…セイシエル様、あなたの善人面には騙されましたよ…知っていたのですね、イリアと俺が姉弟だった事を。あなたは悪魔ですね、楽しかったですか？俺とイリアがあなたに踊らされているのを見て」

「……………」

「この野郎…あなたが何もかも奪っていったんじゃないか。楽しいか？俺の全てを奪って。母だって父だってあんたが…」

本当に何も知らないで育ってきたのか…カインさえいなければこんなこと、する必要も無かったのに、あんな辛い思いをする必要も無かったのに。

全てカインのせいだ。私が苦しんだのだ、こいつも苦しめばいい。

「へえ、お前の母親…つまり私の母親から何も聞いていないのだな、哀れなカイン」

カインはそれを聞くと、驚いたような表情を浮かべて此方を見る。

「…あなたの…母親？」

カインが驚いたような表情を浮かべているのを見た自分は何かが切れたような感じがした。感情に身を任せ、カインに向かって叫ぶ。

「そうそう、お前を生んだ母親は私の母親さ。幼い頃浮気して…私を捨てて逃げ出した。母は私が憎かったらしくて毎日のように殴ったり罵ったりしていたがお前は随分愛されていたみたいだな。それが気に食わなかった…それから母親が捕まって処刑されてからは私はますます孤立、父も私を道具か何かに見ず、少しでも失敗すれば牢屋に放り込まれる…唯一愛してくれた叔父は病死…私はお前を憎んだ…何もかも奪ったのはお前だ、カイン…お前さえいなければ私は救われた、母はもしかしたら愛してくれた…愛してくれなくても側にいてくれたのにお前がいたから！お前なんかいなければ良かった！お前なんか生まれなければ良かったのに…！お前なんか、お前なんか嫌いだ、今すぐ私の目の前から消えてしまえば良いのに

「誰が認めても私はお前の存在は認めない…絶対に認めるものか！」
カインに対する憎しみだけが生きる支えだった…カインが落ちぶれる様を見たい…絶望する様が見たい、苦しめたくて…それだけを頼りに生きてきた。

何故カインだけがこんなにも幸せな思いをして私だけがこんなにも苦しまなければならない？

何故、どうして？

こんなの、不公平だ。

「…セイシエル、様…」

カインの声は先程のもの比べて、とても小さい…弱々しいものだった。

「あんたにずっとそんな風に思われていたなんて…あんたの言葉だけが支えだった…あんたが認めてくれたらそれだけで良かったのに……あんたは俺をずっと憎んで…存在すら認めてくれないのか……あんなだけはどんな形であれ俺を必要としてくれるんじゃないかって思っていたのに…存在価値すら無かったのか」

「ああ、無かったよ」

と答えた。望み通りになったのに、満たされない。

何故、何故満たされない…かえって虚しくなるばかりだった。

「…ねえセイシエル様…そんなに俺が憎いならどうして助けた…どうして？期待させないでくれよ…ねえどうして俺を助けたんだよ、どうして！？どうしてなんだよ…セイシエル、あんまりだ…！ねえセイシエル、どうして俺を助けたんだよ！」

それを意識せずに聞いていたが…ただ…カインが自分をそこまで尊敬していたなんて知らなかった…罪悪感ばかりが募る。

憎い、憎い、ただ憎かった…全てを無条件で得る事が出来るカインが憎かった。

どれだけ努力しても愛情も優しさも貰えなかった…才能もなく、努力してやっと掴んだものもカインは一瞬で取得し、それを越えるものまで掴んだ。

「……………さらばだ、カイン」

それでも自分はカインを捨てていく。

嗚呼、結局自分は母親と同じ、父親と同じなのだ。

それでもカインを憎むことをやめようとしな…もう、それを捨てたら今度こそ自分は空っぽになるから。

（そんなに忌々しいならどうして僕を生んだの？どうして？ねえどうして僕を生んだの…忌々しいなら殺せば良かったじゃないか！ねえどうして！？母さん…っ！）

カインは幼い頃の自分と全く同じ事を言っただがろうとしている。

捨てないでと言っている。

…イリアが助けにくるさ。と自分に言い聞かせて背を向けて立ち去る。

「セイシエル…っ！」

その悲鳴も聞こえないようにしながら走った。

「セイシエル様…！イリア様は？」

地下から上がってくると待っていた兵士達が次々と聞いてくる。

「…知らないな、寢室は見たのか？」

イリアがいなくなった…大方カインを助けに行ったのだろうと思っただが言わない事にした。

イリアはカインを愛している…だから別にいい。

「寢室にも何処にも…まさか!？」

「ないだろう、イリアがそんなことをするはずないさ。もっと周りを探せ」

と言った。

イリアは知っているのだ、もう一つ隠し通路があって、そこから牢屋に行くことが出来るという事を。

無駄な抵抗だが、イリアがそうするなら止める権利はない。

兵士達には適当に言ってその場を離れる事にした。

向かった先はカインの故郷：憩いの場でカインを見つけた故郷…。

礼拝堂に行く事だけが唯一の楽しみだったから。

もう、行く資格もないだろうけど。

何と無く逃げたかったのだ…カインからも家からも何もかもから逃げたかった。

忘れようとしても無理だった。

カインのすがるような、傷ついたような表情が胸に突き刺さる。

ああ、痛い痛い、悲しい、苦しい…カインなんか嫌いだ、あんな奴消えれば良いのに…何故あんな表情1つでこんなにも苦しまなければならぬ？

憎いなら何故カインを助けたのだろうか、とも思う。

カイン、無事でいてほしいと思うのは何故？

何故罪悪感が募るばかりなのかも分からない。

歩いている途中、誰かが「セイシエル様…？」と呼んだ気がしたので振り向くとそこには…。

「レディシア・キース…確か、カインの…部下」

カインの部下であり、聖職者…確か幹部実習生だったような気がする。

「ああっ！セイシエル様…」

と言ってレディシアは声を潜めながら言った。

「イリア様…実はカイン様の子供を…。だから無理をしてはいけな
いお身体なのに…カイン様を助けに向かってしまったのです…一体
どうすれば良いのですか？」と言った。

驚きを隠せない…カインとイリアの間に子供がいる…？

況してや姉と弟…改めて罪悪感が募る…此処まで狂わせたのは全て
憎しみに支配された己のせいだ。

…自分のやった事が許される筈はないけれど、これからもカインを
憎み続けるのだろう…それでも、カインを助けよう。

「レディシア、家に入って直ぐに私の部屋がある…そこに行こう。
多分今なら隙だらけだ」

「…分かりました」

レディシアと共にアルディ家へ戻る。

カイン、どうか無事でいてほしい…。

今はそれだけしか考えていなかった…。

アルデイ家へ着いたレデイシアは早速部屋へと向かう。カインに何回も案内されていたらしく、戸惑う事なく自分の部屋までたどり着く事が出来た。

「…レデイシアっ！セイシエル様も」

待っていたのは…医者であるレイモンドの息子、シャルルだった。

「レデイシア、セイシエル様…大変なのです…カインが脱獄して…！」

なるほどと思った…イリアが助けたに違いない…しかし、どうにかなるわけではないのだ。

「シャルル、レデイシア…私の部屋に入り、正面の壁にある棚を右側に押せ」

それに2人は理解出来ないと言ったような表情を浮かべたが、説明する暇はない。

「兎に角来い」

そう言つて2人を連れていく…。

部屋の中に入ると、正面に位置する棚があつたが、それほど重くはない。

シャルルと2人で押すとそこには隠し通路への道が表れた…恐らく

イリアは牢屋にもここに通じるような抜け道を知っていた気がする。

「レディシア、シャルル…行け。私は何とかして兵士達を抑える…早く行け…いいな？」

「わ、分かりました」

レディシアとシャルルは頷き、狭い入り口の中に入る…狭いとは言え、人が入る程の大きさはあるのか、シャルルも続いて入る。

「いいか…？恐らくカインはまだ暗闇の水路を走っているところだ、イリアを連れて…いいな？」

2人は頷き、走っていった。上から布を被せ、棚を戻した。

後は兵士達を抑えるだけ…。

部屋から出ると兵士は武装して家から出ていくのを見た…まずい…カインを追うためだ…いや、カインに関わる人間全てを捕らえに行くのだろう…：奴等は必ずそうする。

でも兵士達は自分の指揮下ではない…：義母達の指揮下にある。一刻も早くカインの故郷に向かわねばならぬ。

そう思ったがこの格好では直ぐに義母達にバレる…：と思い、まずは兵士達と同じ格好にならなければならない。

辺りを見回すと、見張りで残された兵士がいた…：しかもものんきな事に欠伸をしている…：よし、悪くない…：兵士の格好をすればリスクは低くなる。

このレベルの魔法なら問題はないだろう。

<実行せよ…>

セイシエルはさっと身を隠し、照準を定めて魔法を放つ。

勿論、威力は弱めてある…血がついては困るので、気絶する程度に抑えたつもりだったが…。

「…!？」

セイシエルは目を見開いた…最低レベルの魔法で、気絶すれば成功に近いくらい威力を落とした筈なのに兵士の体中から真紅の血が飛び散り、その場で倒れた。

嗚呼…何故、こうなる？

セイシエルは混乱した…その程度の魔法だけで人を殺せる位の威力があるなど、知らなかったのだ。

その途端、父の残酷な言葉が蘇る。

<セイシエル…お前は“異端児”だ>

異端児…正統な方法で生まれていない子供、邪悪な思想の持ち主の事を指す。当てはまるとしたら自分は正統な方法で生まれていない子供なのだ。

嗚呼、知りたくもない言葉が脳裏によぎる。

“ 死の契約 ”

もしかしたら自分は死の契約を身体に受けて生まれた子供ではないか？

魔法の教育もろくに受けていない…閉じ込められた部屋の中で魔法書を読み耽って…見よう見真似で今、初めて使った魔法だった。魔法すら使えなかった人間がいきなりここまで才を発揮するとは先天的な魔力が異常に高い証拠だ。

真実は悲惨なものだ、つまり自分は常に魔力を暴走しかねない危険と隣り合わせだということに。

< その通りだよ、坊や >

と言って現れたのは礼拝堂にいた少年である。

優しげな、儂げな笑みを浮かべて自分を出迎えてくれたのに、その少年は今是不気味な笑みを浮かべている。

「……」

< でも怯える事は無いさ、君はカインを越えられる力を持っているのだ、何を怯える？ さあ、早く来てよ、セイシエル…君の願いを叶えてやる。カインを助けてあげるよ、君と引き替えに…ね。セイシエル、君は本当はカインを誰よりあいしているんだよ。でも愛情を知らない君はカインに対する得体の知れない思いに戸惑う。そんな悲しいセイシエルの為にカインを助けてあげるよ >

「……………」

この少年の瞳は妖しく輝いている。

きつと彼はカインを助けることはしないだろう…何故だか分からないがこの少年とカインを接触させてはならない…そんな気がした。

「大丈夫だよ、少年。カインは私が助けるから。どんなに憎んでも憎みきれない…カインは私の弟なんだ、私が助ける」

少年に向かって初めて笑みを浮かべた。

カインは必ず助けてみせる、何も無い自分が必要としてくれたのはカインだった。

少年に背を向けて走り出した…魔力にも恐ろしい力にも頼る事は無い。

…この全てを懸けてカインを助ける。

初めて自分の意思で決め、歩き出したような感じがした…。

<セイシエル……………>

狂ったような、悲しそうな声で名を呟き、顔を上げた。

その眼差しは凍てつき、氷のように冷たい視線だった…だが、うつすらと笑みを浮かべる少年は嘲笑しながら

<逃がさないよ、セイシエル…だってお前は異端児だからな。異端

児である限りお前は決して逃れる事は出来ないよ、俺からもアルデ
イ家からもな>

呟いた。

漸く見付けたのだ、逃すものか。

少年に化けた悪魔は勝ち誇った笑みを浮かべ、ゆっくりと歩き出した。

つら若き青年たちは罪を犯す（前書き）

孤独な青年は、得体の知れない力に戸惑い、逃れるように裏切り者を助けようとしたけれど、やはり孤独な青年の手は既に罪に染まっていた。

哀れな青年は孤独に抵抗するかの如く、悪魔にすぎる事しか出来ない。
悲しみと憎しみだけが全てだった青年は自身が抱く感情に戸惑い始める。

しかしそれは、青年を苦しめるものになる。

つら若き青年たちは罪を犯す

カインだけだった気がする…真っ直ぐと見つめる純粹な瞳、眩しい笑顔を向ける人間は…。

未だに消えない…感情的に物を言った自分に対してカインは悲しみと絶望に満ちたあの表情を浮かべて此方を見た…傷付いた表情が焼き付いて離れない。

あんな表情…見たくもなかったのに。

セイシエル様、貴方って本当は優しい人なのですよ

そう言っただけ自分を励ます彼は自分にとっで、いつしか大切な存在になっただけだった。それが嫌で、認めたくなくて何度も突き放した気がする…。

あいつは健気だ、何も知らないだけなのかも知れないが、健気だ。カインに対する強い憎しみに支配されていた自分を一番尊敬していたなど、ただの愚か者とか言い様がない。憎まれていたことにも気付かない、妬まれていたことにも気付かない…況してや尊敬していた人間に存在すら認めてもらえないことにすら気付かない。

ここまで激しく憎み、絶望の果てにカインが苦しみながら死ぬことを望んでいた筈なのに助けようとするなど、自分の意思に反する。

けれど自分は最初からそうなるように操られて生きてきたような気がしてならない。

“死の契約”を本当に身体に受けているなら自分は一生誰からも愛されないのだろうか、そうだったのだろうか…。それは分からないけれど…もしも自分が死の契約を受けていなければ母はあんなこと

をしなかったのか？

母も父も義母も叔父も…あの側近も何も話してはくれなかった…カインにも話していなければ、自分にも話していなかったのだろうか。思考が乱れていく…今はカインを助けなければならぬのに何かに支配されたような感じがして、まともに立っていられなかった。

途端に浮かび上がったのは少年の妖しく輝いている瞳…勝ち誇ったような笑みだった。

あの少年が自分を支配しているような気がしてならない…怖い、何かに支配されて…自分の意思が消えていくような気がして怖い。そもそもあの少年に会う度に酷く苦しくなるのは何故だろうか、それは分からないけれど…叔父をなくして…侍女達に陰口を叩かれていたのを聞いてシヨックを受けた自分が逃げ出し、初めて礼拝堂に訪れた時に会った少年…少年は自分の頬に手を当ててニッコリと笑った。

「泣かないでよ、泣くと綺麗な顔が台無しだよ。」と言った後、彼は「僕の前でだけなら泣いてもいいよ、いや、僕の前では泣いてよ、セイシエル、僕が慰めてあげる…ずっとそばにいてあげるから」と言ったのだ。

少年の瞳は妖しく、狂った様に輝いていたけれど、孤独な自分は少年の差し出した手を拒めなかった。

嗚呼…あの時から警鐘を鳴らしていたのに孤独な自分はそれに気づかなかった。

膝をついた…重い衝撃を受けたように動けなかった…何か流れ込んできた…とても熱くて痛くて苦しくて立っていられなかった。苦しみに屈しそうになったその時だった。

(セイシエル…っ！)

カインの悲痛な声が頭に響いた。
懇願するような、すがるような、必死に自分を求めるような声が響き渡り立ち上がる。

「カイン…っ！」

カインを助けなければならぬ、カインを守らなければならぬ…！
気を取られている暇はないのだ、今は一刻も早くカインを助けなければならぬ。

重い足を引き摺って立ち上がり、再び走り出した。

走って…走って走って…段々見えてきた村…その村を赤々とした何かが包み込んでいた。

炎だ…アルデイ家の奴等が火を放ったに違いない…！こんな痛みで悩まされている暇はない…！深呼吸をし、気合いの雄叫びを上げながら炎の中を突っ切った。赤々とした炎は燃え上がり、人々は逃げ惑うが、1人また1人と倒れていく…明らかに人を斬り捨てたであろう傷が残っていた痛々しいものもある。

「畜生…っ！」

無力な叫びも炎に呑まれた…何も出来ない無力な人間だった…この村の人々は自分にとても優しくかったのに…それはアルデイ家の人間だという事を隠していたからなのかも知れないが、助けられなかった事を悔やんだ。

しかしまだ嘆いてはならない、まだ生きている人がいるかも知れないのだ。

「……誰かつ…誰かいないのかっ！」

赤々と燃え上がる炎にも構わずに走って生存者を探すが、最早手遅れと言わんばかりに誰一人居なかった…諦めかけたその時だった。

遠くからではあるが人らしきものが見えるのだ…気のせいかも知れないが…もしかしたら…と思うと呆然としている場合ではない。

どんな危険があっても助けなければならぬ、行かなければならぬ！

一心不乱にその場所へ向かって真っ直ぐと走り出した。

何が何でも助けなければならぬ！

最早自分の中にあるのはそれだけだった。

「くそっ！」

火の回りが早い…このままでは呑み込まれてしまうが、魔法を使うという選択肢はなかった…何度も火の中を潜り抜けた…うっすらと火傷をした痕があるが、それに構う事もなく進んで行く。

「おい…っ！」

急に視界に入ってきたのは黒装束を身に纏った人間だった…誰なのかは一瞬で分かった。

（カイン…っ！？）

フードで隠しきれなかったその髪がカインであることを証明する…急いで走った。

「……カインっ！」

カインは一瞬だけ立ち止まったが、再び走り出したのでそれを追い掛けるが、カインと自分とはあまりにも違いすぎる。

自分が立ち止まった時にはもうカインが少女を連れて此方に向かっていた頃だった。

自分の元まで走り、フードを外したカインは自分を確認し、信じられないと言った表情を浮かべた後に喜びに大きく目を見開いた。

「…生きていたか…カイン……」

ホッとした…それが向こうにも伝わったのか、カインは涙を浮かべた。

「セイシエル…っ！嗚呼…セイシエル、貴方にずっと…」

「もう何も言うな、カイン…」

子供のように胸にすがって泣き付くカインを宥めていた。

「まずは少女を何とかしなければならぬだろう？」

と言つて落ち着かせる。

少女はカインの手を握り、ぽかんとした表情を浮かべて此方を見ている。

早く此処から逃げなければ。

「取り敢えず修道院へ行こう…」

ファレスの真南に位置する修道院…と聞くとカインは頷いた。

「レイを引き取った場所です…」

「少女はレイと言うのか…」

「はい、レイは孤児で…母が引き取ったのです」

と説明した。

未だに憎しみを抱いている母は本当に優しかったのだ…だからこそ自分が忌まわしかったのかも知れないと思った。

もしも、自分が禁じられた契約によって生み出された子供だとしたら。

「セイシエル…早く行こう」

カインはそう言って足を速めた…遠回しに母の話題を避けたのだ…カインの気遣いに感謝しながら歩き、程無くして修道院にたどり着いた…ファレスの大陸は広く、南部はアルデイ家の干渉がほとんどなかった。

それでもカインの村はどちらかと言えば南部に位置するので不安が広がっていると思うが。

修道院のシスターや神父は温かく迎え入れてくれた…自分の顔を見たシスターや神父は複雑な表情を浮かべていたが、何も言わずに迎え入れてくれたのだ。

「カイン…大丈夫？村の事…聞いたわ」

と、シスターの1人が言うとカインは笑って

「大丈夫です。彼が助けてくれたのです…」と言った。

シスターは複雑な表情を崩さないままではあるが自分に向かって

「…セーシエル様…が…。セーシエル様、カインとレイを助けて下さってありがとうございます」

と礼を述べた。

自分はと言うと「…いえ」としか言えなかったのだが。しかしこのままカインと自分がいるのは余りよくない。

それを察したシスター達がレイを奥へ連れていった…それと同時に神父が奥から出てきた。

「…カイン、レイの事は任せて早く逃げた方が良いでしょう…アルデイ家の連中がいつ貴方の存在に気付き、此方に来るかも知れない…セーシエル、貴方も早く逃げて下さい」

「……分かりました…お気遣い有難う…カインは私が責任を持ってアルデイ家の追撃から守ります」

「さあ、早く」

神父は急かした…確かに早く行かなければ直ぐに追い付くだろう。

「カイン、行くぞ」と言いながらフードを被せ、そのまま向かう。修道院を出て、暫く身を隠さなければならぬのだが、何処か良いところは無いのかと探しているとカインが古びた小屋らしきものを見つけた。

中に入り、カインは安堵したように溜め息をついた。

「セーシエル…貴方が来てくれて良かった…」

「カイン……」

カインは俯き、辛そうな表情を浮かべながら

「セイシエル……貴方は俺を憎んでいる。それを晴らすためなら何だつてする筈なのに……何故助けたのですか……あの時も、今も」

「カイン……それは」

自分にも分からないのだ……何故カインを助けようとするのか……カインの顔を見るのも嫌なのに。

でも、カインの悲しむような表情を見るのも嫌だった。

「……分からない……カイン、お前が憎い……お前さえいなければ私はもしかしたら今よりずっと救われていた……お前が憎い、憎いけれど分からないっ!」

「……セイシエル……」

カインは戸惑いながら自分を見つめていた。

嗚呼、分からない……憎いのか、そうでないのか……それすらも分からない。

苦しみから解放されるにはカインを憎む事だけを考え、努力すれば良かったのに。しかしカインと会った時から何か別の感情が込み上げる。

憎い……それに変わりない……けれど、カインが泣く姿を見るのは何故だか分からないがもつと嫌だった。

だからあの時、思わず手を差し伸べたのだ……泣いている姿を見るのが嫌だったから……絶望する姿を見るのも嫌だった。

「カイン、貴様なんか大嫌いだ…憎い、憎い…けれど…憎めない…憎み切れない…！何故だか知らないが憎めない！何故……自分を捨てたあんな女の息子なんか嫌いだ…嫌いだっ…」

最後まで言えなかった…カインが身を乗り出して…何をするかと思えば、普通は異性に対してするような行為を何の躊躇いもなく自分にしたのだ。

ほんの一瞬だけだったような、しかし長い間そうしていたように思える。

カインの顔が直ぐ近くにある…嫌でもそれを強く意識してしまう。それにしてもこいつは同性に対してそんな事を何の躊躇いもなくしたのだ…逆に凄いと思った。

「黙って下さい…セイシエル。」

やがてそれは離れ、カインは静かにそう言った。

嗚呼、成る程…感情的になりすぎた自分を黙らせる為に咄嗟にした方法がこれだったのだ。

「よく、感情的になった人を黙らせる為に咄嗟に口付け、するですよ…？あれと同じですよ」

困ったような表情を浮かべたカインに思わず頭を下げた。

「…済まなかった。少し感情的になりすぎた…もう少し立場を弁えるべきだな…カイン」

そう言うとカインは穏やかな口調で

「貴方があまりにも悲しい表情かおをしていたからっていう事もありましたが」

と言った。

あんなことをされれば普通は怒りに身を震わすのだが、不思議とそんなことにはならず、寧ろ気持ちが悪く落ちてきた。それに気付いたカインは笑みを浮かべながら

「セイシエル、物心ついたずっと貴方に会いたかったのですよ」

と言った。

「母は物心ついた時から夜中になると『セイシエル：嗚呼、セイシエル…あの子は私を恨んでいるかしら。』って言っていた…。あの時は子供だったから誰なのか意味は分からなかったけれど、毎晩それを言っていたら覚えてしまったのですよ」

「…カイン」

初めて聞いた話だった…それに驚かすにはいらなかった。母がああ兵士を選んだにも関わらず自分の事を覚えていた事に。カインは困ったように笑いながら続きを話し始める。

「あの大聖堂内で貴方を初めて見たとき、ちょっと驚いた。他の聖職者の子供や貴族の子供とは明らかに違う世界にいたような人だと思いましたが…で、近くの子に名前を聞くと『あの人かセイシエルだよ。』って。そう言えば貴方は向こうでは『セイシエル』って呼ばれていたんですね。それに…アルデイ家に仕える兵士として来た時は誰も話してくれないどころか…。今思えば当然なのかも知れない…だからあの時、貴方が来てくれた事は本当に嬉しかった」

「…嬉しかった、か」

まただ。カインは自分に対して満面の笑顔を向けてくる。眩しい位の尊敬と、穢れのない笑顔を向けてくる。それに応える事が出来ないと知らないわけではないだろうに。

どんな事を言われても自分はカインに対する憎しみを捨てる事など出来ない。

カインを憎み、イリアの純粋な恋心を利用して絶望の淵に突き落とした事は後悔していない。

…後悔等、していない。そう言い聞かせようとしたが…ずっと抑え込んでいた何かが進み上げる。

違う…後悔していないわけではない！ずっと後悔してきた！だからカインとイリアを丁重に扱ったと言うのに…後悔していたではないか、ずっと。

憎しみが2人を破滅に追い込んだ事を、悲劇を生み出した事を。自分は何も知らないまま互いに恋に落ちたカインとイリアを結ばせようとした…そして絶望の淵に突き落とした…それを後悔したからカインを助けようとした。そんな事で自分の犯した罪が許される筈がない。

激しい後悔と悲しみが胸を貫き、今にも壊れていきそうな気がした。いつそのこと壊れてしまえばいい、そうすれば楽になれるがこんなときに限って自分の意思は強く結局我を忘れる事が出来なかった。

「セイシエル」

カインは穏やかな声で自分の名前を呼んだ…それに答える事すら出

来ない。

「貴方は何もかも抱えすぎですよ…たまには誰かの力を借りてそれを癒さなければならぬ」

「…カイン…」

何をいきなり言い出すのか…悲しみを分かち合える相手がいたならば苦勞はしない。そんな相手がいたら激しい憎しみを抱える事もなかったのに…自分はずっと孤独だった。

敵視され、軽蔑の視線を向けられた事は数あれど、自分を想ってくれる人は誰もいなかった。

「…ここは出来ませんか？あまり良いこととは言えないけれど悲しみや孤独を紛らわす為に、貴方に言い寄る女性を…っていうのは。それは許される筈がないけれど、今はそれをして許されると思いますがよ…『私』は」と言った。

一瞬、カインの言っている事が理解出来なかったが、暫くして、理解した。

つまり、自分の抱えるあらゆる感情を一時的に忘れる為の道具としてカインを利用しろと言いたいのだ。

そんなこと、許される筈が無いのに…。

「貴方は真面目な人ですね…でも『私』は貴方が孤独に押し潰される姿を見たくないので。今、貴方の目の前にいる人は貴方に言い寄ってきた1人の女性だと思えばいい。ねえ？セイシエル」

自分はカインを激しく憎んでいるのに、彼は馬鹿みたいに自分を慕

つてくれる。…忘れようか、今は忘れてしまおうか…カインの力を借りて何もかも忘れてしまおうか。

「カイン…お前は愚かな奴だな…何処までも」

そう言った後、僅かに笑うとカインも笑顔を浮かべて

「『レイザ』ですよ、私は。さあ、セイシエル…」
と言った。

忘れよう、何もかも。

今、自分の目の前にいる人は自分に言い寄ってきた…自分にとっては都合のいい『女性』…自分は孤独を紛らわそうとしてこの『女性』と偽りの愛を誓う。

それで良い…その後は現実を忘れ、白い夢の中にいるような気分だった。

ただ、ひたすら堕ちていく…。

孤独を紛らわす為に、ひたすら堕ちていく…温かい何かに包まれている…いつまでもそんな都合のいい夢の中にいたいとさえ思えるのだが、結局は一時的な夢に過ぎず、目を開ければ薄暗い空間の中にいた。

「レイザ…お前は逃げるんだ」

「セイシエル…」

服を身に付けながらカインは悲しそうな表情をしていた。

「レイザ…私はお前と共に逃げる事は出来ない…だけどお前は逃げる…レイザ、私は神父に…レイに誓ったのだ…お前を守ると」

カインは何度も行かないでと懇願するが、それを聞き入れる事は出来ない。

「だけど、私はもう大丈夫だから。さあ早く逃げろ…」

そう言つてカインに乗船券を渡す…カインはそれを握り締めながら暫く考え込んでいた…何を考えているのか分からないが時間がない…。

「私はもう行かなければならない。さようなら、レイザ…また会う日まで」

そう言つて立ち上がり小屋から出ようとした時、カインは立ち上がり

「必ず貴方のところに戻つて来ますから…『ゼーウエル卿』！必ず…必ず貴方のところに」

カインの言葉が嬉しくて思わず近付きたかつたがそれは出来なかつた。

「…待っている」

それだけ言つて、去つた…カインの身を案じながら。

孤独、怒り、憎しみ…あらゆる感情を忘れる為に身を委ねた。

許される筈のない行為に身を委ね、堕ちていく。

偽りの愛を誓ったあの時から…別れを告げ、また会えることを楽しみにしていた。

また会えたその時は憎しみも悲しみも怒りも忘れ、生きていこうと決意した。

それが…悲劇の宿命の始まりを告げた事を知るきっかけになるとは知る由もない……。

闇より来る使者は牙を剥く（前書き）

孤独から彼を救った少年は遂に牙を剥き、容赦無く追い詰めていく。

悲しき宿命は廻り始め、悪魔達は忌まわしき死の契約を成立させ、悲しき宿命の為に彼は死の契約を成立させられ、己の名を捨てる。

『我が名はゼーウエル…聖なる力を持ちし者全てを葬る為にこの世に生を受けた』

邪悪な力と対峙した青年はただ1人、果敢に挑む。

『勝負だ、ゼーウエルっ！』

闇より来る使者は牙を剥く

カインを助けた事による罪はライハード家の反発を抑える為に『牢獄塔流し』の刑にまで下がった。その次の日、連行されて牢獄塔に向かった。それが全ての始まりだったのだ…。

「セイシエル卿、愚かな方です。カインを逃がそうなど…何を考えていらつしやる。カインは反逆者なのですぞ」

1人の老兵がそう言った。セイシエルは突然、可笑しいと言わんばかりに笑いながら

「カインが反逆者になった原因を作り出したのが私なのだ。無実な人間を逃がして何が悪い」

「セイシエル卿…それでもカインは反逆者です」

なるほど、この老兵はカインの存在がどんな風に邪魔なのかよく分かっているのだろう。

「カインは正統。異端である私の力を消し去る事が出来るからな。私は漸く理解した。カインとイリアが本当の姉弟だったのだ。でなければ父が何故イリアを私から遠ざけようとしたのか分からない。そうなのだろう？カインとイリアは異父姉弟でも何でもない、血の繋がりのある本当の姉弟なのだ」

アルデイ家の正統な血を引くカインとイリアを父は警戒したのだ。…もっと恐ろしいのは自分は闇魔術師である父の血を強く引いてしまった事だ。

「カインとイリアは共にあの兵士『シリウス』の子供なのだな」

大分前からソフィアとシリウスは関係を持っていたのだろう。イリアは余りにもシリウスに似すぎた。

こっそりと調べたりしていたので、大体は分かっていた。

シリウスと言うのは実のところアルデイ家の次男。セイシエルの父が次男の地位を奪い、側近として仕えて来たのだ。

成る程。シリウスが哀れに思えてきた。シリウスの立場が自分によく似ていたからだ。

シリウス。彼はソフィアを愛していたのだろう。孤独な人間同士が強く惹かれ合い、イリアが生まれると一旦はシリウスと別れた。

イリアをシスターにするための修行をさせるといふ口実を使って嘘をついてイリアを修道院に行かせた。

父は暴力的な性格をしていたのだが、彼の恋心も炎の如く激しいものだった。ソフィアを連れ去り、暴力を以て彼女の全てを喰らい尽くした。毎日のように続く暴力と気違い染みた仕打ちに耐え兼ねたソフィアはついに結婚したという。

それから父の性格は変わらず、毎日のようにソフィアに対して気違い染みた仕打ちをしていたが。それを知っていたシリウスが何等かの事情でソフィアと接触する機会があり、彼女を慰めようとしたに違いない。

セイシエルが生まれても父の性格は変わらなかった。

9歳になったある日、その狂った愛情をセイシエルに向けるようになっていった。父が亡くなるその日まで悪夢は続いた。

思えばシリウスもソフィアもイリアもカインも運命を狂わされたのだ。父によって。

シリウスとソフィアは処刑され、カインはアルデイ家に対して多大

な憎しみを抱いた。

カインはよりによってイリアに恋をしてしまった…ソフィアとシリウスが隠した最初の子供…実の姉であるイリアに。

カインはまだ知らない…異父姉ならまだ良いのだが、カインとイリアは実の姉弟なのだ…。

「……」

じわじわとわき起こるのは父に対する憎しみ…嘗て自分が抱いた激しい憎しみの対象が父に変わっていく…。

カインは最中に何度も「憎まないで」と言った…懇願するような口調で自分に触れながら言った。

憎んではならない、憎しみを身を滅ぼす…憎んではならない…セイシエルは何度も自分に言い聞かせ、その後は黙ったまま兵士達についていき、牢獄を目指した。

沈黙が辺りを包んでいく…不意に老兵が口を開き、セイシエルに向かって

「牢獄塔に行くとき…貴方は更に悲しい思いをしなければならぬ」

老兵はそれだけ言うと、再び歩き始めた。そんな事、分かっているとセイシエルは心の中で強がった。

父が闇魔術師である限り、自分もその血を強く引いている…イリアが父の血を引いているならば父は何故イリアに近付くなと警告するだろうか。

そう警告した事が絶対的な証拠…それにイリアはカインの父であり、アルデイ家の次男シリウスによく似ていた。

「カインとイリアは異父姉弟ではなくて本当の姉弟なのだな」

セイシエルが聞くと、老兵が僅かではあるが、首を縦に振る。

「……悲しい…ものだな」

セイシエルはそう呟き、黙った。

カイン…嗚呼、カイン…イリア…何も知らずに惹かれ合い、恋人となり…子供まで…。

不幸な2人にとって幸いなのが子供の存在をアルデイ家はまだ知らないということだった。

2人の間に出来た子供の存在をアルデイ家が知ったら探し出し、抹殺しようとするだろう…アルデイ家の人間は必ずそうする。

セイシエルはぐつと堪えた…爪が皮膚に食い込んで痛かったが、決して言わないよう自分を戒める為に更に強く握り締める。

程無くしてアルデイ家専用の船着き場に辿り着き、用意されていた船に乗り込んだ。

この家に戻ってきた途端に襲い掛かる激しい悲しみと憎しみ…それを忘れようとして、あの時…あの日の夜、カインと偽りの愛を誓った事は決して後悔などしていない…あれは夢の中での出来事なのだ…密かに溜め息をついて船に乗り込み、ずっと下を向いていた。

眠りに落ちそうになる度に思い出すのはあの時の夜だった。

焼き払われた村の中でカインに会い…逃げ出して…偽りの愛を誓ったが、あの時の夜の事は誰にも言わない…絶対に。

心地よい揺れにセイシエルは段々と意識を手放していくのが分かったが、ここで眠ればいつ襲われるか分からない…自分を恨んでいる人間に背後をつかれたらどうするのだ、と自分を戒めた。

だが、老兵はセイシエルが疲れきった表情を浮かべているのを見たのか、「少し眠った方がいいのでは？」セイシエル卿』。」と言っ

た。

老兵の呼び方にセイシエルは少し驚いた。

弟は随分幼い時から『卿』付けて呼ばれていたがその地位にあった自分はなかなかそう呼んでもらえなかった。

『セイシエル殿』と呼ばれたらいいものだ、大抵は名前でも呼ばれないのに。

「セイシエル卿、貴方はやはり前当主によく似ておられる…顔立ちこそソフィア様かな…」

「ソフィア…」

「やはりカインはソフィア様のご子息、美しい…儂げな容姿をした青年でしたな…それでいてあの強さ。男女問わず彼に惹かれるのも分からないではないですな…セイシエル卿」

と言った…セイシエルは老兵の言葉に頷く。

奴は女性のような姿をしていた…それでいてあの強さ…確かに男女問わず彼に惹き付けられてしまうのも頷ける。カインに熱を上げていた女も多かったのは紛れもない事実だった…それがまたカインに対する憎しみを増幅させる要因にもなったが。

それを考えると自分の愚かさを嘆かずにはいられない。

「セイシエル卿、やはりお疲れのご様子…少しお休み下さい」

老兵にそう言われてセイシエルは迷ったが、厚意に甘えて眠る事にした。

(牢獄塔につくまで…あの時の事を思い出すのも悪くない)

そう思い、セイシエルは眠る事にした。

……あの時、自分の孤独を紛らわす為の手段として『レイザ』を選んだ。戸惑う自分に対してレイザはそれでいいと言ったのだ。

その後は夢の中にいたようだった。

心地よいものに包まれていた、そして自分もまた何かを包んでいた。疎まれて憎まれて軽蔑され、それを晴らす事でしか存在を示せなかった自分が誰かの悲しみを拭う事が出来るとは思わなかった。

カインからしたら、ただの戯れに過ぎないのかも知れないけれど。奴は元々自分の持つべきものを武器にしているのだから慣れてるだろう。

でも自分にとっては大きなものだった。あんな幸せは初めてだった。たった一夜だけの許されない罪だが、それでも良い。幸せだった。もう死んでも構わないとさえ思う。でも自分はそれすら決して許されない。

“死の力”が自分に迫る。

<起きろ、セイシエル…さあ目を覚ませ>

「……ここは!？」

セイシエルは目を覚ました。目の前にいるのは黒いローブを身に纏う者の姿だった。

そして…目の前にいたのはあの“少年”だった。

「期は熟したという事かな、セイシエル」

「少年…」

少年は勝ち誇ったような笑みを浮かべ、セイシエルに向かって言い放つ。

「ようこそセイシエル・ドウ・アルデイまたの名をセイシエル・デア・レガルド…アルデイ家の長男にして闇魔術師の子孫。貴方こそアルデイ家の救世主」

レガルド…父の名前だった…そして“死の契約”の創り出した魔術師であるカイザーの城の名前。

今は城跡としてフィリカにあると言われているが。

「やはり私は…」

宿命を受け継ぐ子供だったのだ…聞こえはいいが、アルデイ家を更なる繁栄に導く為の生け贄に過ぎない。

そして宿命を受け継ぐ人間には最初から表と裏の両方の人格をもつて生まれてくる。

いや、違う。

「私は生まれる前に既に“死んでいた”ではないか。」

セイシエルは漸く“死の契約”がどれほど罪深いものなのかという事をはつきりと悟った。それを見た少年はニヤリと笑って

「そう、母の体の負担が大き過ぎて流産したが、父親の禁じられた契約…つまり“死の契約”によって再び生を取り戻して生まれたのがお前。だがこの禁じられた契約をした罪としてお前は生まれつき、邪悪な力と聖なる力を併せ持つて生まれてきてしまった…これが“災厄”なのさ。そして私は…！」

ローブを脱ぎ捨てた少年の容姿にセイシエルは恐怖を隠せずにはいられなかった。

少年の容姿は自分にそっくりだった…いや、そっくりという次元を越えて、最早自分を見ているとしか思えない。

「これが…これが“災厄”なのか…これが私の“罪”なのか…！」

両親に対する憎しみと背負ってきた罪と宿命に耐えきれず、座り込んだ。

「私の名前は“ゼーウエル”お前の憎しみ、悲しみ、怒り、嘆き、苛立ち、不安、絶望…お前のあらゆる負の感情で形成された。つまり私もまた“セイシエル”という事だ。しかし、法王によって私はお前から引き離され、固有の存在となり、力を持った。今のお前など赤子同然…」

「ゼーウエル……卿。」

セイシエルはガタガタと震えながら自分と全く同じ容姿をした…けれど自分とは違う邪悪な色の瞳、顔もよく見たら自分とは違い、はつきりと“男性”である事を思い知らされる“ゼーウエル”を見た。どうやら“ゼーウエル”の言った通り、固有の存在になったようだ…母の面影がほとんど感じられない。

幼い頃、カインを助けた事により法王直々の仕置きを受けた時の事を思い出す。

<貴方も同罪ですよ？>

牢屋に入れられた時、自分は哀れだと言った：あれは法王が余りにも驕り高ぶっていたから言ったのだが、確かに今思えば法王は哀れだ。

自分に仕置きをして、優勢になったという驕りからアルデイ家が待ち受けていた“災厄”を予想よりも早く創り出したのだから。だが、自分が幼すぎてその力を扱えなくて分離してしまった。もしかしたら……絶つ事が出来るかも知れない！

セイシエルは希望を得た……分離している以上、目の前にいる“ゼーウエル”は固有の存在……これを倒せば悲劇の宿命を絶つことが出来るのだ、その為なら命さえ惜しくない。

（イリア……カイン！）

セイシエルは立ち上がり、自らの闇と対峙した。

「……哀れな坊や。恐怖と悲しみと憎しみで腰が引いている。そんな状態で闘うのかな？坊や……それとも」

“ゼーウエル”は冷笑を浮かべ、ゆっくりとセイシエルに向かって歩み寄りながら残酷な言葉を告げる。

「私にその身を捧げるのかな？……悲しみと憎しみに追い詰められたお前をこの手で汚してしまおうか？レイザとやったのだ……私とも……なあ、セイシエル」

「……くそっ！ゼーウエル、貴様は……っ……貴様は……！」

セイシエルが怒りに身を任せて魔力を放出しようとしたが、“ゼーウエル”は背後から羽交い締めにして押さえ付けた。

「まるで少年だな、力の差がありすぎるのだよ…坊や」

そう言つてセイシエルをそのまま押し飛ばした。

受け身が取れず、倒れてしまったが素早く上半身を起こしたセイシエルの目の前まで歩いた“ゼーウエル”は髪を掴み、その頬を平手打ちして戒める。

「レイザをあいつにしている…そんな瞳をしているな…ふん、気に食わない…前は私に従順だったのにな…『少年』と呼んで慕ってくれた。天使が良いが悪魔はお断りというわけだな、坊や」

「ゼーウエル…！」

“ゼーウエル”の言わんとしている事が分かり、セイシエルは目を伏せようとしたが、“ゼーウエル”はそれを許さず、セイシエルの顎を掴んだ。

「お前もあいつらと同じで私を道具としてしか見ていなかったのか？お前のあらゆる負の感情を全て私が受け止めていたと言つのに！ええ？まだお前は私に何も返していないぞ、セイシエル」

それを言つた彼の顔は悲しみと憎しみと怒りで歪んでいた。

セイシエルは青ざめ、ガタガタと体を震わせながら目の前の闇を見つめる。

「…まあ良いだろう」

“ゼーウエル”は顎を持ち上げていた手を放し、セイシエルに向かって手を伸ばす。

「さあおいで、坊や。奴等に復讐してやるうではないか。お前を陥れた人間、幸せそんな表情を浮かべる人間全てに復讐してやるうではないか。力を貸してやるよ…このゼーウエルが力の限りお前の願いを叶えてやる…：さあ、誓え」

セイシエルはもう何も言わなかった。

逃れられない宿命と絶望によって僅かな希望さえ失い、ただずっと虚ろな表情で“ゼーウエル”を見つめていた。

「さあ、おいで。我に誓え…：汝の全てを我に捧げる、と」

脳裏に刻み付けていた『レイザ』の儚げな、悲しげな表情も一時の甘い夢も目の前にいる“ゼーウエル”によって全て壊された。

最早光も闇もない…希望の灯火も信念も何もかも全て壊された。

「我の名を呼べ、そして誓え。我に汝の全てを捧げる事を」

誓うまで逃がしはしない…その言葉が更に絶望の淵へと落ちていく。

「…ゼーウエル卿。私は貴方の…：」

そう言っただけで差し出された手を握り締めると、慕わしげに“ゼーウエル”を見上げる。

こんなにも優しい表情を浮かべた凜々しい青年を何故怖いと思ったのだろう…：セイシエルは“ゼーウエル”に向かってにっこりと笑ったがその瞳に無垢な輝きはない。

「良い子だね、坊や」

満足そうな表情を浮かべ、
“ゼーウェル”は握ってくるその手を握
り返し、誘っていく。

終わりになき闇の中へと…。

第二部：哀愁する赤の剣士

レイザはギリツと齒軋りをしながらアルファードを待っていた。もうすぐ時計台の全てが分かる筈。けれどあまりにも時間が掛かり過ぎる。

ジャンは猫に化けたアルファードと共に時計台の見張りを行っていたが、何かあったのかも知れない。

レイザには僅かな冷や汗さえ流れ落ちた。ここにレイモンド卿が隠した古文書がある筈なのだ。呼び寄せた召喚獣にそれを取りに行かせていた。

今は使役していないので精神をそちらに集中しなくてもいい上に悪魔族だけあって知能が高く、ある程度は自分で攻撃出来るようだ。

レイザは近くにいたアルファードの部下達に見張りを命じた後、1人目を閉じて思い出し始めた。

イリアとの関係が知られ、逃げていた自分を救ってくれたゼーウエルの事を。

イリアと恋に落ちるよう仕向けたのもゼーウエルだが、自身の背負う壮絶な孤独と怒りと憎しみに身を滅ぼしていくゼーウエルを見なくなかったのだ。

不器用で優しくして真面目な人。だからこそゼーウエルは自身が抱えるあらゆる感情に押し潰されそうになっていたのかも知れない。

あの、空き家の中で自身の想いを吐露した彼は自分で自分を壊してしまいそうになったから。

どんな形でも良かった、それを取り除く事が可能ならば何でも良かった。だから、ゼーウエルを誘った。

「ゼーウエル卿」

レイザは首を振る。

こんなことを思っている場合ではない。

早々に行動しなければ時計台の奥に行く前にアレン達に見つかってしまう。

「あいつらが…レイシアが来る前に」

レイザは急いで走り、時計台の奥を目指していたその頃。

「…何、ここ…」

黒い髪、黒い瞳をした1人の少年が時計台を見上げながら呟き、不安そうな顔をしていたが、時計台から背を向けた。

「こんな事をしている場合じゃないんだよ、僕は」

意味深な言葉を残し、少年は走っていった。

人々が行き交う大都市の中では黒い髪は目立たない…少年は人混みに紛れ、姿を消した。

「……あの少年、レイザ様に似ている…」

時計台から急いで走り、人混みに紛れようとする1人の少年を目にしたアルファードが呟いた。

黒い髪…黒い瞳…女性のように整った顔立ち…レイザによく似ている気もしないではない。

しかし、幼い少年に気を取られている暇はない。

少年は時計台には近付いたが、その中に入るつもりはなかったらしい…ただの観光目的で時計台を見に來ただけに過ぎない。

いちいち気にする必要もないと思い、アルファードは再び見張りを

開始した。

「ジャンには騎士団の近くを見張らせているが、大丈夫かしら」

アルファードは宿屋近くを見張っているジャンを内心心配しながら、再び精神を集中させて見張りの役に徹した。

こんな時、ヴェラーゼがいれば良いのにと思いながら。

一方のレディンは買い物にはしゃぐティアナを遠くから見ている。

「ねえねえレディン〜見てみて！これ見てよ！凄く綺麗じゃない？」

ティアナが硝子の置物を指差してレディンに言っていたが

「ああ、綺麗だと思うが…ティアナ、そんな高いものは買えない」

値札を見たレディンはきつぱりと言った。

ティアナはしゅんと頂垂れたが直ぐに気を取り直し、レディンの腕をぐいぐい引っ張りながら進んでいく。

「レディン〜！じゃあこっちはどうなの〜？」

隣のネックレスを指差して買って欲しいとねだるがレディンは呆れながら

「ティアナ…俺は最低限のお金しか持っていない、諦める」

と言ってティアナに背を向けて歩きながら考えた…あんな我が儘な少女を何故好きになったのか…レディンは大きいため息をついて進んで行く。

「レディンのバカ…」

ティアナは小声で呟いた…ちょっと構って欲しかっただけなのにおねだりかと勘違いして歩いていくレディンの背中を見つめながら切なさそうな表情を浮かべたが、やがてティアナはうつとりとし、ため息をつきながら

「でもそんな真面目なレディンも良いんだけどね」

と言いながらティアナはレディンの背中を追っていく。
どうやらティアナは完全にレディンにメロメロのようだ。

「…ちょっときつい事言ったかな…もしかしたら一緒に見て！とかいう事だったりするしな…うーん」

街の中心地まで歩いたレディンは頭を抱え、自分の不器用さを呪うしかなかったが、ふと目についた屋台を見つけた。

「アクセサリー売り…か？」

レディンはティアナにプレゼントを渡して、彼女を喜ばせようと思いい、屋台に向かって走っていく。

「いらっしやい、どうかしました？旅の方…。」

「あ…あの…」

せっかくここまで来たのだから言わなければならぬのだが、思えばレディンはアクセサリーについては何も詳しくなく、彼女が好む

デザインすら知らなかった。

悩んでいたレディンに店員がにっこりと笑いながら

「もしかして恋人へのプレゼントかしら？」

と聞いて来たので、レディンはどうすれば良いのか分からず、戸惑いながら頷いた。

すると店員はにっこりと笑いながら

「まあ！それならこういうのはどうかしら？」

と、言いながら店員が示したのはペアペンダント、リング、ブレスレット、イヤリング…ペア用の。

それに対してレディンはひたすら戸惑うしかなかった…自分の返事は間違っていたと内心思いながらも今更違うとは言えず、店員の言葉の1つ1つを聞くしかなかった。

（俺はどうすれば良いんだ！？ティアナとは恋人じゃないし…ペアアクセサリーなんか買って良いのか！？アレン様に怒られそうなのがするよ…うーん、買えないとは言えないし、俺はどうすれば良いのか…）

レディンはひたすら悩みながらアクセサリーを見ていた。

レディンが1人悩んでいるその頃、ジャンは警戒を強めていた。

（レイザ様…レイザ様の邪魔をする奴等には特に警戒しなければならぬ…それにしてもアルファード殿がかなり動揺しているのは何故だろうか…）

レイザの手に落ちたジャンは大都市にいる人々と然程変わりのない格好で見張りを続けていた。

もしもアレン達が気付いたら…そう思うだけでジャンは背筋を凍らせた。

アレンが率いる騎士団にたかが一剣士が勝てる筈など無いのだ…絶対に。

レイザの存在に気付いたらそれこそ敗北を意味する…ジャンは常に身構えながら見張りを続け、歩いていた。すると…。

先ほどアルファードが見て動揺していた少年がジャンの反対側を歩いていた。

「あの少年」

警鐘を鳴らす…あの少年の醸し出す“気”が恐ろしく感じる。

…死のオーラを漂わせているような気がしてならないが一体あの少年は何者だろうか？

少年と擦れ違った途端、ジャンは何か得体の知れない程、激しい波動が体中を駆け巡ったような気がした。

少年も何かを感じたのか、ジャンの方を振り向いて

「……操られている」

と、抑揚のない声で呟いた。

「…相手は召喚士…魔術にも精通している人間だね、どちらもかなりレベルの高い技術を持っている。召喚獣ではないね…」

「……!?!」

「ね、副団長ジャン・ブルネーゼ」

「……………!?!」

少年は冷笑をしながらジャンに向かって言い放つ。

「…ジャン!」

「……………アルファード殿」

ただならぬ気配を感じ取ったアルファードがジャンを連れ戻しに此方まで来た。

「…召喚獣の御出座しか」

少年は大して気にしていないのか肩を竦めるだけだ。

「悪いけどジャンは返して貰うよ。僕はジャンに用があるのだから」

「……………アルファード殿…退いてください」

アルファードが今にも少年に飛び掛かりそうな勢いである事に気付いたジャンはアルファードを宥め、

「話だけなら聞いてやる」と、少年に向かって言った。

「ありがとう、ジャン・ブルネーゼ」

少年は少しだけ安堵したような笑みを浮かべ、ジャンの手を引きながら歩いていった。

「…やはり攻撃するべきだったわ。今ジャンを奪われては困る」
アルファードはレイザの元へ向かう事にし、詠唱を開始した。
そして…。

<撤退せよ>

かなり力を弱めた上、姿を猫に変えているので誰も気にしない。
アルファードは徐々に透明になっていき、数分経たないうちに姿を消した。

大都市では少しずつ異変が起きようとしている頃、レイザは漸く時計台の隠し部屋に辿り着いた。

「ゼーウエル卿…！私は貴方を…貴方を」

一時は恨んだ。

イリアと自分を結ばせようとした事を。

<貴方がこんな目に遭うのは御免なの！>

何も知らずに想いを寄せてくれたイリアは逃げる自分を庇って捕まった。
そうなるように仕組んだのはゼーウエルだった。

だがゼーウエルはやはり自分の思っていた通りの人だった。

レイを助け、自分が逃亡していた間もレイの為にお金を寄付していたのだ。

そして…彼は権力をたてにレイを弄んでいた幹部の人間を咄嗟に手をかけた。

これが『牧師殺し』である…。

それを知ったレイザは姿を変えてファレスに戻り、その後始末をし

ただ。

許される筈は無いけれど…ゼーウエルの為ならこの手を罪に染めても構わないとさえレイザは思っていた。

初めて見たあの時から。

レイザは悲しそうな表情をして、あの時の事を思い出し出していた。

まだ幼い頃だった…母と共に召し使いとして働きながら世話になってもらっていて、外に出掛けた時に…初めて見た。

（綺麗な人）

それが第一印象だった。

張りつめた雰囲気を漂わせながらも、周りとは違う…澄んだような美しさを放っていた…彼のその表情は無に近かったけれど、澄んだような美しさを放つセイシエルに心を奪われた。

イリアが最愛の恋人であることに変わりはないけれど、セイシエルに対してはそれを越える感情を抱いている…愛よりも尚深い執着心を抱いていると思う。

あの時…負の感情が強すぎるあまり壊れてしまいそんなセイシエルに向かって自分は誘いをかけた。

滅茶苦茶にして、きつくてもいいから抱き締めて、滅茶苦茶にして

…もう何も出来ない程壊してとさえ思ってしまった。

幸せ、もう何も思い残す事など何も無いくらい幸せ。

（…ゼーウエル卿…）

全てを話してほしい、知りたいのだ、何もかも。

あの人は何も言わない、教えてもくれない…両親の事さえも。

(何もかも知りたいと思うのは贅沢なのかも知れないのかな…)

レイザがため息をついているとアルファードがレイザの元へ来た。

「レイザ様！」

アルファードの声にレイザは我に返った。
こんなところで回想している場合ではない。

「アルファードか。どうした？」

「レイザ様、ジャンが謎の少年によって…」

「謎の少年？」

「黒い髪を上に乗せた少年によってジャンが連れて行かれました。
実は…その少年がジャンが術にかかり操られていることを見抜いた
のですが…」

「……黒い髪の…少年か…アルファード、捨て置け。ジャンは元々
一時的な道具だ、無駄な戦力を消費するな」

「…御意」

アルファードはレイザに向かって深々と頭を下げた。

アルファードが来てくれて正直助かった。

ゼーウエルの事ばかり考えてしまい、どうすればいいのか分からなくなっ
てしまっただった。

恋い焦がれているのに、あの人は自分に振り向いてはくれない。ただ、時々…悲しそうな、苦しそうな表情を浮かべながら此方を見ている…。

ねえ悲しまないで、苦しまないで、そんな表情をしないで、ゼーウエル卿。

(…禁じられた愛だな…俺は報われないよ)

レイザはため息をつき、アルファードが見張りに戻るのを見た後、膝をついた。

「ゼーウエル卿……例え貴方が俺を憎んでいるのだとしても、俺は貴方を…」

恋人にしたいという感情ではない。それ以上に恋い焦がれている…慕っている。

誰よりも貴方を愛している。何よりも貴方が大切だから、お願い。そんな辛そうな表情をしないで。

報われない愛を抱きながらレイザはアルディ家に残ったゼーウエルに想いを馳せていた。

その頃、ゼーウエルはと言えば……。

「レイザ…私はどうすれば良い？」

アルディ家に残ったゼーウエルは頭を抱えながらレイザの事を考えていた。

寧ろレイザの事しか考えていない…しかしそれはゼーウエルにとって忌まわしい存在である彼の逆鱗に触れる事でもあった。

「ゼーウエル、レイザの事しか考えていないようだな」

「……貴様は！」

現れたのは自身の裏人格であり、今では死の力によって僅かな時間でも分離でき、いつでも話すことが出来る“ゼーウエル”であった。

「レイザがそんなにも好きなのだな、レイザもお前を深く愛している」

「……否定はしない。私はレイザを愛している。誰よりも、何よりも」

正直な気持ちを言うと、冷めたような笑みを浮かべて

「……やはりあの時汚してしまえば良かった」

と言った。それがどんな意味を示しているのかは流石に誰でも分かる。それに絶対の証拠があるのだ。

冷たい口調とは裏腹に目はキラキラと輝いている……その輝きは獲物を狙う獣のようで、まさに今……喰らい尽くそうとしている寸前であった。

「……っ！」

恐怖しかない……彼に対しては恐怖しか抱かない。

「……クッククク……そんなに怖い顔をするな。それとも暴力が好みか？ならば望み通りにしてやるが」

「ぶざけるな！一体何の用だ……早く用件を言え！」

からかわれた事に対し、怒りが爆発したゼーウェルは目の前で嘲笑する人間に向かって怒鳴った。彼は相変わらず嘲笑しながら

「アイシアが呼んでいるのだ。早く行った方が良いかもな」

と言った。

「直ぐに行く」

間髪入れずに言ったゼーウェルは歩き出した。

バタン！

大きな音を立てて扉が閉まる。

彼は1人、部屋の中で佇んでいた。

「あの坊やは自覚がないようだな」

あの容姿：誰に対しても優しい性格をしたセイシエルは意外と男女問わずちやほやされていた。

そんなセイシエルに無条件で側で仕える事が出来るレイザを妬む者も多かった。

勿論、彼もその1人。

「セイシエルの周りにはいる輩は全て始末してやる。レイザ：何故レイザだけが！」

セイシエルに対して異常としか言い様のない執着心を抱く彼にとっ

てはレイザが邪魔で仕方無い。

思っていた以上にあの2人の絆は堅く結ばれているようだ。

セイシエルはレイザを深く愛し、大切にしたいとさえ思っている。

レイザもセイシエルを心から慕っている。

それが気に食わない。

「坊や……お前はずっと孤独で……怯えていればいい。強くなる必要などない……！私にすがってればいいのだ」

悲しそうな、辛そうな表情を浮かべながら……いつもの冷淡な表情はそこにはない。

「ソフィアとラザニアの事を知ったら……レイザを手放さざるを得ない……レイザから離れてくれるか？私のところに戻って来てくれるか？……なあ……セイシエル」

セイシエルの名前を呼んだ彼は相変わらず悲しそうな表情を浮かべている。

「……セイシエル」

もう一度だけその名前を呼んだ……名前を呼ぶ声には切ない何かを感じられる。

彼は顔をしかめながらも胸を押さえた。

“いとoshii”

孤独に耐える姿が、人々を惹き付ける容姿と性格が、はりつめた雰囲気放ちながらも澄んだような美しさを放つ凜とした姿が。

「奴は私のものだ、私なのだ…」

憎しみしか知らなかった自分がセイシエルを通じて知った感情…。彼は顔をしかめながらもそれを振り払おうとはしなかった。

一方…少年に腕を引かれたジャンは歩きながら少年に問い掛ける。

「何処まで連れていく気だ？」

と、聞くと少年は

「じっくり話せるところ」

と言った。

少年はジャンの手首を放すつもりはなく、寧ろ痛い程握ってくる。ジャンは痛みに顔を歪めながらも抵抗はしなかった…暫く2人は無言で歩いていたが、

「…着いたよ」

と、少年が言ったと同時に手首を握っていた手を放した。

「手首、細いんだね」

「…そんな事はいい、早く用件を言え」

ジャンは手首を擦りながら少年に向かって冷たく言い放つ。少年は暫く黙っていたが、やがてにつこりと笑うと

「初めまして、ジャン・ブルネーゼ…僕の名前はイリア」

「……………!?!」

ジャンの目が大きく見開かれる。

聞いた事のある声…いや、知っているような声と名前…ジャンは頭を抱えた。

「シャルルから聞いたでしょ？僕の事と名前。副団長であるジャンに会えばアレン様に会えるかなって思ったら敵の手に落ちていたから驚いたよ」

少年は頭を抱えるジャンの肩に手を乗せ、暫くそのままの状態でした。

「楽にしてもいいよ、ジャン。もう大丈夫だから」

そう言つて頭を抱えていた手をそつと払った。

ジャンはゆっくりと顔を上げ、少年の顔を見た。

「シャルルから聞いたよ、ジャンは親友なんだってね。それにアレン様に会わないといけないんだ、僕」

「……………な、何の……為に?」

術に掛かっていたジャンはやっと我に返り、肩で息をしながら少年に問い掛ける。

少年は一瞬戸惑ったが、歪んだような笑みを浮かべながら

「僕の名前を言えばアレン様は分かるよ。僕の名前…イリアって言えばね」

と言った。
その名前を聞いたジャンは啞然としながら少年を見つめるしかなかった。

少年は冷めたような笑みを浮かべながらジャンを見ていた。

「ジャン・ブルネーゼ。会わせてくれる？」

と、言いながらジャンを見つめる少年の表情は歪んでいた。ジャンにはまるでレイザを見ているような気がしてならない。レイザの嘲笑うような表情、笑っているのかも知れないが、冷めている。

いつもレイザは歪んだ表情を浮かべて此方を嘲笑いながら見ていた。

「もう分かってるんでしょ？僕の事、シャルルから聞かなかったの？」

「……………！」

イリア少年は試すような目付きでジャンをじっと見ていた。その視線に射抜かれそうだ…。

「……………そんなに怖がらないでよ、ジャン」

ジャンが怯えたような表情でイリア少年を見ると、突然。

バサバサバサッ！

数匹の鳥がイリア少年に向かって襲い掛かった。

「……………!?!」

ジャンはその光景に驚かすにはいられなかった。驚いている間にもジャンの姿が徐々に消えていく…そして。

<…撤退せよ!>

その号令とともにジャンの姿は跡形もなく消え去った。

「ジャン…!ちっ…あの猫!」

響き渡る声にイリア少年は悔しそうに呟きながら、上を見上げる。ジャンはアルファードによって再び拐われてしまったのである。

「…シャールを知る人間は全て皆殺しに…」

イリア少年は怒りにも近い笑みを浮かべながら、襲い掛かる怪鳥達を一瞬にして葬り去った。

「ファイア…!!」

残りの怪鳥も全て放たれた炎によって焼き尽くされた…低級レベルの魔法なので害になることはない。

「暇潰しにもならないね」

そう言って少年は駆け出した。

その頃、レディンから離れて1人拗ねながら歩いていたティアナは、

ふと空を見上げる。

「あれ？何かしら……」

空から見えるのは赤い炎のようなものだった。

「とにかく急がなくちゃ！」

今まで足手まといだったのだ、今回こそは敵を打ち倒し、レディン達に認めてもらおうと思っていた。

「待ってなさい！私だって戦えるんだからね！」

と言って勇んで駆けて行く……その先にある、悲しみの始まりを告げた事も知らないままで。

第十一節：悪夢の鐘が鳴り響く時計台の下で（前書き）

セイシエル・ドウ・アルデイ：死の契約を受けて生まれた子供の名前……。

破滅の印を受け継いだ異端児セイシエルの存在は闇を生み出し、全てを破滅に導いてゆく。

セイシエルを待つのは、終わりなき悲しみと苦しみのみ。

鳴り響く、悲しくて狂ったような交響曲……時計台で出会う少年と少女……少年は真実を知りながらも無垢で純粋な少女に惹かれてゆく……叶わぬ想いと知りながら。

美しき青年剣士レイザ……彼は何も知らずに自身の姉であるイリアを愛し、セイシエルに恋い焦がれゆく。
セイシエルへの恋にも似た絶対的な忠誠心を抱きながら暗躍し続ける。

記憶なき青年レディンにいよいよ真実が迫る。

全ては宿命、全ては定められていた事。

全ては……過去の惨劇と災厄から始まった。

第十一節：悪夢の鐘が鳴り響く時計台の下で

「法王様、何故私を？」

セイシエルは軽蔑の眼差しを法王に向けながらも、立場を弁えて、
敢えて深々とお辞儀をした。

「兄上は賢い方ですね、私のようなものにも頭を下げるのか。う
ふふ…だからゼーウエル様に良い様にされるのでしょうか？」

アイシアの馬鹿にしたような台詞にセイシエルは怒り、アイシアに
向かって怒鳴り付けた。

「……………っ！…用件は何だ！早く言え…アイシア」

怒りに体を震わせるセイシエルにアイシアは少しだけ歪んだ笑みを
浮かべた。

「誇り高い方ですね、セイシエル卿…あはは、まあそれ以上言うと
ゼーウエル様に狙われ兼ねないな。ゼーウエル様に狙われるのだけ
は私も避けたいものだ」

「……………アイシア」

アイシアは知っているのだ。“ゼーウエル”が自分にどれだけ執着
しているのかということ。

アイシアは相変わらず歪んだ笑みを浮かべたまま、

「セイシエル卿、どうして貴方がソフィア殿から忌み嫌われた理由

…知りたくないですか？」

と、問いかけた。

アイシアの問いかけにセイシエルはごくりと唾を飲み込み、僅かに怯えた表情を浮かべる。

それを見たアイシアは複雑な感情が入り交じり、歪んだ表情を浮かべながらセイシエルに告げる。

「…知らない真実を知る事はとても恐怖する事だろう…けれど私は…セイシエル卿にだけは全てを知ってもらいたい。貴方が背負った宿命の本当の意味を知る為にも。そして、ソフィア殿への憎しみを貴方にこれ以上抱いて欲しくないのですよ」

「……ソフィア……」

「セイシエル卿、貴方次第です。貴方の存在が破滅に繋がるか…希望の光になるか…全ては貴方次第ですよ、セイシエル卿」

アイシアの歪んだ表情と悲しみに満ちた台詞と問いかけにセイシエルは戸惑いを隠せなかった。

間違いない…アイシアは何かを知っている。自分もレイザも知らない何かを知っている。

いや、正しくはラザニアが直接関わっているから知っているのだ。よく考えたら自分はラザニアの事もアイシアの事も知らない…ラザニアが現れ、父に取り入って周りを取り込んでアルデイ家を支配したという事しか知らない。

ラザニアとアイシアの事を自分は横暴な奴等で悪魔だと思っていた。自分に見せるアイシアの悲し気な表情は今までの勝ち気な表情とは全く違っていたので、戸惑ってしまった。

知りたい…知っているのならば教えて欲しい。

ソフィアにとって自分は？レイザは？

ソフィアにとって自分は忌まわしい存在であり、レイザは愛すべき存在だと思っていたが…ならば何故ソフィアは自分を生み出したの
だろう。

忌まわしいのならば、下ろせば良かったのに。

セイシエルは顔を上げて、アイシアに訴えた。

「…知りたいのだ、アイシア。教えてくれ、ソフィアは何故私を憎んだ？父は何故私に拘った？何故私は死の契約を受けたのだ？」

セイシエルは真剣な表情でアイシアに訴えかける…何もかも知りた
い…隠された真実を。

「…いいでしょう、セイシエル卿。ただし…これだけは守って欲しい」

アイシアはセイシエルの目を真っ直ぐと見つめていた。
ごくり…。

セイシエルは唾を飲み込み、瞬きをする事すら忘れてアイシアの顔をじっと見つめていた。

2人の間にあるのは、死のような沈黙だけだった…アイシアもセイシエルも何も言わない。

暫くアイシアとセイシエルは互いの顔を見つめ合っていた…試すように、挑むような視線が交差する。
すると…。

「アイシア、ちょっと来て頂戴」

きつい声が響き渡る。

「母上、如何なさいましたか」

アイシアはセイシエルから目をそらし、部屋にやって来たラザニアに向かって問いかける。

「いいから来なさい」

ラザニアはアイシアの問いかけには答えず命令を下す。

「…しかしセイシエル卿が…」

アイシアは申し訳なさそうな表情でラザニアに言おうとしたが、ラザニアは更に強い視線でアイシアを睨み付けた。

アイシアはこれ以上何も言えない事を悟り、部屋から出ていった。アイシアが出ていくとラザニアはセイシエルを睨み付け、怒りを露にしてセイシエルに迫る。

「……ゼーウエル、あんた何をアイシアに聞こうとしたの？ 答えによつてはどうなるか分かっているでしょうね…あんたは私を憎み、アルデイ家を憎み、アルデイ家の策略によつて全てを失ったレイザを守ってあげればいいのよ…それ位あんたなら分かっているでしょう！ ゼーウエル、答えな！ アイシアから何を聞こうとしたの！」

セイシエルは怒りを露にして強い語調で迫るラザニアを初めて見た。しかしその怒りはセイシエルではなく、ラザニア自身に向けているような気がして痛々しかった。

「…ラザニア様…申し訳ありません…私が愚かでした」

アイシアから真実を聞き出そうとした自分が悪者になったような感じになったセイシエルはラザニアに跪いて謝罪の言葉を述べる。セイシエルが跪いて許しを請う姿を見たラザニアは苦悶の表情を浮かべながら細かい声で

「…………ゼーウエル…貴方がこんなにも罪を重ねたのは私のせいね…」と、呟いた。

セイシエルが悔しさに顔を歪めながらも跪く姿を何度見ただろう…。ラザニアは泣きたくなってしまった。

アルデイ家の魔術師団の指揮をとっていたばかりに前当主から助けられなかった親友ソフィア…ソフィアは無理矢理連れ拐われ、征服された。

暴力を以て征服されたソフィアは子供を身籠った…それが、セイシエルである。

ソフィアはそれでもセイシエルを生もうとした…生まれてくる子供に罪はないと泣きながら告白したソフィアを助けられなかった自分…。

しかしソフィアの負担が大きすぎた結果、死産だった。

セイシエルの父はそれを嘆き、邪悪な魔術を用いて契約を結んだ。

…セイシエルが生まれつき光と闇を受け継ぐ事と引き替えにセイシエルは生を受けたのだ。

暴力で身籠った子供であっただけではなく、一度死んだ子供が再び生を取り戻し、しかもアンデッドのように死の概念がない子供を果たして愛せるだろうか。

ましてや愛してもいない男の息子など。

頭では分かっているにもソフィアはセイシエルを恐れ、嫌悪せずにはいられなかった。

その結果セイシエルはずっと無様な姿をしながら、許しを請えば誰かが自分に対して少しでも慰めの言葉をかけてくれるに違いないと思っていたに違いない。

「もうやめて…セイシエル…！お願いだからもうやめて！」

ラザニアは手で顔を覆って悲鳴をあげる。

「もうやめて、セイシエル！もうそんな事しないで！お願いだから…っ！」

「……………！？」

ラザニアの悲鳴を聞いたセイシエルは目を見開きながらも黙って見守っている事しか出来なかった。

ラザニアの泣いている表情、悲鳴を初めて聞いたセイシエルは目を見開き、驚きながらも何も言えなかった。

何度、彼女の悲し気な顔を見ただろう。

セイシエルは悲しくなってしまった…自分の殻に閉じ籠り、気付かなかった。

（ラザニアだけが、私を守ってくれていた）

自分が大変な失態をしても、アルディ家にとって反逆者であるレイザを助けた事も口では嘲笑い、冷徹な振る舞いをしていたが、不思議と行動を以て自分やレイザを貶めようとはしなかった。

レイザの利き腕の腱を切った人物とは違い、彼女はいつも口だけだった。

レイザや自分を嘲笑いながらも、何処か悲し気な表情を浮かべてい

たラザニアをどうして今まで悪と決めつけていたのだろう。
闇魔術師達がいきなり乗り込んで来た時もラザニアがタイミングよ
く現れたのは自分を闇魔術師達に連れて行かれないようにする為で
はないか。

「……母さん…お願いだから泣かないで…」

セイシエルは初めてラザニアを母と呼んだ。

「ソフィアの事、責めないで下さい。貴女のせいではないから」

本当はソフィアを恨んでいるけれど、ラザニアを許せる筈はないけ
れど。

自分の憎むべき相手は他にもいるはずだ。

だがラザニアは両手で目を擦ると再び冷たい笑みを浮かべ

「あなたは私を憎めばいいのよ。私を憎みなさい、ゼーウエル。そ
れがレイザの為でもあるのよ。あなたに宿命を背負わせるなんてご
めんだわ」

そう言い放つと、背を向けて部屋を出て行ってしまった。

ラザニアは自分を悪とする事でソフィアやシリウス…そしてセイシ
エルからの憎しみを受け止めていたけれどセイシエルにはもうラザ
ニアを悪と決めつける事が出来なくなつた。

「ラーナ…」

それがラザニアの本名だった…自身の父親の實の妹であり、ソフィ
アの親友。

ソフィアの書いた日記に濃く記されていた名前だった。

ラーナとソフィアは同級生だった…否、ソフィアが優秀な為にラーナと同じ指揮官の地位にあるだけでソフィアはラーナよりも5歳位年下なのだ。

ラーナの兄であるディアルト…セイシエルの父親の名前である。

ラーナはディアルトの妹であり、セイシエルの叔母に当たることになる…アルディ家の当主になるはずだったシリウスから地位を奪い、ソフィアへの異常とも言える恋心の為にソフィアも、ラーナもシリウスも…イリアも犠牲になった。

シリウスとソフィアの関係が続いていた事を知ったディアルトは烈火の如く怒り、2人を処刑してしまう。

ラーナは止められなかった…兄を。

忌まわしい呪いを自らの体に刻み付けて闇魔術師となり、狂気に吞まれて悪魔となった兄を止められなかった。

ラーナは今も苦しんでいるはずだ。

悪魔となったディアルトと、力を手に入れようとする為に闇魔術師にアルディ家を支配させた者達への復讐をラーナは行おうとしている。

アルディ家を守る為に失った親友ソフィアに対する償いの意思はやがてアルディ家と…シリウスを奪った兄であるディアルトに対する憎しみに変わった。

それ位ラーナはソフィアとシリウスを大切に思っていたのだろう。

実の兄を敵に回してもいい…そんな覚悟を抱かせる位ラーナは2人を大切に思っていたに違いない。

その為にラザニアと名前まで変えて前当主に身体を捧げ、今日まで生きてきた。

破滅に追いやったディアルトとフィリカに住む闇魔術師達…ラーナは今のアルデイ家を作った全ての人間を憎んでいた…ディアルトの正体を見抜けなかった自分さえも。

「ラーナ、私はもう決めたのだ」

セイシエルは決意した。

今まで守っていてくれたラーナ…けれど、罪深いのは自分も同じである。

ラーナやアイシアと運命を共にし、闇に身を売り、数々の悲劇を生み出したディアルトを討とう。

「レイザはどうするつもりですか？」

「…！」

いきなり話し掛けてきたのはアイシアであった。

アイシアは悲しみと苦しみに顔を歪めながら話し始める。

「死の契約の創造者であるディアルトを討つことは貴方の存在が消滅する事を意味する。」

ラザニア母様は貴方とレイザを守りたかったのに貴方は自ら破滅への道を歩こうとしている。

ディアルトを討てば貴方は消える。レイザはどうなる？レイザには頼るものも失ってしまうでしょうね。それともレイザをも貴方は…」

「そのつもりはない！」

アイシアの言葉を遮ってセイシエルは鋭い口調で叫んだ。

「私にとってレイザは希望の光だ、アルディ家を託せる唯一の希望の光だ、運命を共にするつもりはない。ましてや奴等の生け贄になどさせて堪えるものか！」

レイザはアレンに頼んで保護してもらおう

「……！」

アレンの名前を聞いたアイシアの顔が歪んだが、セイシエルは構わず続ける。

「アレンの両親がディアルトを媒体にして自分達は災厄から逃れた。アルディ家に全てを押し付けた結果がこれだ。だがな……もうこれ以上互いを憎み、悲劇を生み出したくない。レイザはアレンに託す。アレンも同じ思いを抱いているだろう……少女ティアナを引き取った事が何よりの証だ」

「セイシエル：貴方はそんなところまで！」

アイシアは目を見開き、驚いた表情でセイシエルを見つめるしかなかった。

セイシエルは肩で息をしながら

「ディアルトの居場所をお前は知っている筈だ、アイシア。

……時計台に行く。そしてもう終わらせる。

レイザを傷付けたくない…少女ティアナも少年イリアも傷付けたくない。

レイザはまだ戻る事が出来る…アイシア、協力してくれ。お前の術なら私を大都市の時計台に飛ばす事が出来る筈だ、頼む！アイシア！」

必死にアイシアに懇願した…。

「…兄上、覚悟はありますか？レイザの心を深く抉るかも知れない」
アイシアはセイシエルを試していた。

セイシエルがディアルトと戦うという事はラーナやアイシアと運命を共にする事である。

レイザにとってラーナやアイシアを悪…そして自分を破滅に追いやったアルデイ家を壊す事が復讐であり目的である。

前まではセイシエルも同じだったが、これからのセイシエルの目的は自身に死の契約の印を刻み付けた当主、それを賛美し、容認したのに、セイシエルを迫害したアルデイ家を壊す事、その元凶を作ったディアルトを討つ事である。

つまり同じ復讐でも意味が大きく違ってくる。

更にセイシエルはレイザに対して何重もの嘘をつく事になるのだからレイザの想いを理解できるアイシアはどうしてもセイシエルに考え直して欲しかったけれど…。

「レイザを苦しめるだけの存在になる位ならこんな契約、今すぐにも破棄してやる。ラーナやアイシアも私がそちら側に来た方が良くはないか。私は決めたのだ。死の契約を絶つと…例え、それが」

セイシエルは瞬きする事すら忘れてアイシアの目を見ていた。

「レイザを1人にしてしまう事だとしても。私がない方がレイザの為なのだ。後々レイザにも分かる」

「……兄上……」

何を言ってもセイシエルが血の繋がった父であるディアルトを討つという考えを変えるつもりはないとアイシアは思った。
だが断固としてレイザと共にディアルトのところへ行くつもりもない事を彼は改めて強調している。

（後悔しますよ…兄上）

アイシアは内心ではまだセイシエルには思い止まって欲しかったが、仕方無かった。

ディアルトへの復讐をやめるつもりは一切ないとまで言い切った。

「分かりました、もう何も言いません。だがレイザの事はもう一度考えて欲しい」

アイシアは複雑な心境でセイシエルを見つめた後、部屋を出ていった。

何故、皆揃ってレイザの事を言い出すのだろうか。

レイザを破滅に追いやったのは自分だ…シリウスとソフィアに対する憎しみがレイザを追い詰めた果てに全てを失ったというのに。

「私がない方がレイザの為だ…シリウスもソフィアもイリアもそ

う思うに違いない…シャー青年だつて私を恨んでいるに違いない」

セイシエルは未だ分からず、ただ1人暗闇の中で呟いた。
いや、分かっていたけれど…その言葉を彼は知らなかった。

終わり無き憎しみという闇が全てだった彼にレイザへの想い、レイザの想いを言葉に表せなかった。

アイシアの準備が終わるのを待ちながらセイシエルはずっと考えていた。

一方その頃……ティアナはと言えば。

ティアナはレディンから離れて1人、噴水のところにいた。

「確かここら辺だった気がするけど……」

空に浮かび上がった赤い閃光…ティアナは魔物ではないかと思い、1人で向かったが、場所が分からなくなってしまった。

「やっぱりレディンについて行けば良かったなあ…って、こんな事している場合じゃないわ！」

ティアナは首を振り、気合いを入れて走る。

これで手柄を取ってレディンに自分の実力を認めて貰おうという密かな企みを抱きながら。

レディンもフェードもティアナを守っていたばかりだった。

足手纏いだけは嫌だった。特にレディンにだけは足手纏いと思われるのは勿論、守られる存在になるのも嫌だった。

走って、走り回って…やっとティアナは赤い炎の源を発見した。

「……！あ、あれは！」

前方には黒い鳥が少年に向かって攻撃している。

ティアナは急いで向かった。

「…しつこい奴等だね。召喚獣本体が出てきてくれた方が良さんだけど」

少年は迫る黒い鳥に向かって攻撃する。

黒い鳥は悲鳴を上げて少年の足元に落ちた。

「……愚か」

淡々とした様子の少年を遠くから見たティアナは青ざめていた。

(…何なの、あの少年…怖いわ…しかも襲い掛かってきた怪鳥の群れを一瞬で撃破した)

言い知れぬ少年の力を前にしたティアナはいよいよ怯え、逃げようと走るが…。

カタン！

小石を蹴ってしまったのである。

「まだいるの？」

少年は振り向き、ゆっくりとした足取りでティアナの方へと近付く。逃げなきゃ…そう思っても恐怖で足が動かなかった。

少年は一步、また一步と近付き、ティアナの目の前まで来ると。

「無用心だね、お嬢さん」

と言って笑った。

「……な、何なの」

少年がじつと此方を見ているのでティアナは更に恐怖で震え上がってしまった。

怯えた表情を浮かべるティアナを見た少年は

「強張らないでよ、何もしないからさ」

と言つて笑つたが、その笑みは何処か冷めていた。

紫に近い髪を上で団子にして束ねており、女の子に近い髪型とは裏腹に少年の顔立ちや体格は男に近かった。

レディンよりも体格は良いのかも知れない…その途端ティアナは目の前にいる少年を更に意識してしまった。

少年は無に近い表情でじつとティアナを見ていた。

穢れを知らない純粹な子…そして、怯えた表情が美しい。

自覚が無いのだろうか、この子には。

自分がどれだけ美しいのか、それすら彼女は知らないのだろう。

「…本当に無防備だね、お嬢さん。もしかして火にはかり気を取られてはくれたんじゃないの？」

ずばりと言われてティアナはキツと睨み付けたが、何も言い返せなかった。

凶星か…と思つた少年はますます可笑しくなつてしまい、笑いを堪えるのが大変だった。

笑いを堪えて、少し警告しておかなければならないと思い、少年は無表情でティアナに言い放った。

「気を付けた方が良くよ、いつ襲われるか分からないからね。それ

に僕が力づくで君を連れ去るかも知れないし」

ティアナは恐怖で身を震わせている。

恐ろしい事を目の前の少年はさらりと saying ったのだ。

ティアナはレディンから離れた事を悔やみ、心の中でレディンに助けを求めた。

(レディン…早く会いたいよ…私、この少年に…)

恐怖のあまり、彼女の瞳は涙で潤んでいる…少年にとってこれはま
ずかった。

涙で潤んだ瞳が美しい…嗚呼、早く来ないと本当にこの子を…。
すると…。

「ティアナ様！」

仮面を被ったライハード家の兵士、フェードが此方にやってきた。
ティアナがいきなり抜け出すから心配して走り回っていたところ、
やっと見つけ出したのだ。

こんな人気のないところに来るとは…と、フェードはまた溜め息を
着いたが、その隣にいた少年に視線を移した。

「…君は？」

淡々とした問い掛けに少年は冷笑を浮かべながら

「僕はイリアって言うんだ、そちらは？」

「…フェードです、此方がティアナ様…」

「ふーん、ライハード家のお嬢様が…それは失礼しました…多分魔物に…ね」

と言ったイリア少年の目は氷のように冷たく、フェードだけをじっと見ていた。

フェードはさつとイリア少年から目をそらし、ティアナに向かって

「レディンさんはアクセサリー売場にいましたよ、屋台のアクセサリー売場、分かりますか？」

と聞いた。

ティアナは一瞬は何だか分からなかったが、辺りを見回すと屋台が沢山あった。

屋台を順に見ていけばレディンにいるアクセサリー売場に行けると思ったティアナはフェードに向かってウインクをし、その場を離れた。

何だかそこにはいけなかったような気がしたからである。

ティアナの姿が完全に見えなくなるとフェードは安堵したような溜め息をついた。

イリア少年は相変わらず冷笑を浮かべたままフェードを試すような鋭い目付きで話しかけた。

「…へえ、そんなに心配だったの？シャー青年が殺されてから6年経ってるもんね」

「…やめなさい」

フェードはイリア少年の話をこれ以上聞きたくなかった…けれどイリア少年はフェードを嘲笑うような顔つきで話し始める。

「ゼーウエル・ドウ・アルデイがやったとも思っているわけ？あんたは」

イリア少年の問い掛けにフェードは低い声で

「…違うの？」

と、言った。

イリア少年は相変わらず不敵な笑みを浮かべたまま

「うん、ゼーウエル・ドウ・アルデイが関わっているのは間違いないね。しかしシャー青年ことシャルルを殺す動機がゼーウエル・ドウ・アルデイには無い。たかが新米だよ？利益にでもなるの？」

と、言った。

「……知っているようだね、シャー青年の事件の詳細」

フェードは僅かに動揺しながらイリア少年に聞いてみた。

イリア少年は不敵な笑みを浮かべ

「知っているよ…と言っても僕の馬鹿な仮定に過ぎないけどね」

と、言った。

フェードはこの少年が不気味なものに見えて仕方無かったのである。何故シャー青年の事を知っているのか、フェードには全く分からなかった。

するとイリア少年はフェードに向かってこんな事を言い出した。

「…会わせてよ、あんた今ある人と一緒にいるんだろ？その人に会わせてよ。フェード…いや、レイさん？」

それにフェードは青ざめるしかなかった。

「…レイさん、庇ってるんでしょ？どうして庇うの？あの人は逃げたんだよ？僕もシャルルも置き去りにしてね」

「…やめなさい」

「やめないよ、レイさん…会わせてよ、あの人に。それとも僕が無理矢理引き裂いてもいいんだよ？」

少年は歪んだ笑みを浮かべてフェードに迫る。

冷たい眼差しに歪んだ笑み…彼の周りから放たれる憎悪の気はフェードを貫かんとしている。

「許さないよ、僕は。レイザも、シャルルも…あの人もね。皆、隠したんだ。その為に僕が一体どんな目に遭ったと思う？貴女なら分かるだろう？レイさん、レイさんは許せる？レイザを」

少年の突き刺さるような問い掛けにフェードは首を振って

「聞かないで。もう聞きたくない」

拒み続けた。

少年は様々な感情が入り交じった複雑な表情を浮かべながら

「レイザだって分かるよ、僕の怒りがね。ゼーウェル・ドウ・アルデイもシャルル達と同じような事しかしてないもんね」

「…ゼーウエル…」

「シャルルはね、ゼーウエルの秘密を知ったばかりに殺されたんだよ、きつと。シャルルがね、こんなメモを2、3枚残してくれたよ。“幽霊が残念そうな表情で赤い糸頂上から垂らしながら異なる理論を持つ悪魔を切り捨てる。224が真実を握る・273036は過去の罪人、これが動くれつきとした機会の元である”ってね。意味の分からない文に答えが全てあるんだよ、224は『レイザ』、273036はね…『イリア』だよ…分かんないけど。ふふ…シャルルがレイザだけの事を残す為にこんな支離滅裂な文を書きなぐると思っ？」

「……ゼーウエル、ゼーウエルなのね」

フェードはもうイリア少年を誤魔化す必要もないと悟り、仮面をつけたまま話す。

「そうだよ…イリアとレイザを繋ぐものはゼーウエルしかいないよ、レイさん、ゼーウエルを許せる？シャルルを許せる？シャルルはね、余計な事に首を突っ込んで死んだんだよ…もつと酷いのはあの人…あの人にはシャルルを見捨てた…許せない、僕は許せない…」

「…イリア、もう言わないで」

憎しみのあまり、涙を流すイリアにフェードは少年の肩を抱くしか出来なかった。

イリアはまだ10歳だった…目の前に広がる真っ赤な血……自身を育ててくれたシャルルの死はイリアに大きな影響を与えた。

イリアはフェードに押さえつけられながらも歪んだ言葉を紡ぐ。

「調べた…まだ何も知らない中で必死に冒険者として修行を重ねながら情報を得た…そして、シャルルが身代りになって庇ったあいつに…レディンを見つけたよ一目見たんだけど、何にも覚えていないだよ…クツクツク…記憶喪失？笑わせるなよ…決してやるよ、あいつの心を。シャルルの無念を晴らす為にあいつの心を決して、決して…二度と立ち上げられないようにしてやる」

シャルルの死の真実を知ったイリア少年は歪み、レイザを、レディンを、ゼーウエルを、育ての親であるシャルルをも憎んだ。

「やめて、お願いよ、イリア…」

「何だよ、アレンに救われた癖に。貴女に僕を止める資格なんかないんだよ、ふふふ…レディンの記憶を掘り起こしてあげる。

レディンの事、好きなんですよ？

記憶が戻ったら嬉しいでしょ？レイさん。

ティアナとの仲も引き裂いてあげる…クツクツク…レイザもゼーウエルもイリア母様も憎いけどレディンだけは許せない…！」

イリア少年は苦痛に歪んだ表情を浮かべながら何度も邪悪な言葉を紡ぐ。

レディンはイリアを捨てて逃げ出した…イリア少年よりも自身が大事だから逃げ出したと思っているのだ。

「イリア…やめて、レディンを奪わないで、お願い…レディンとティアナを引き裂かないで…お願い…」

フェードはレディンを庇おうとして、今にもレディンに向かって行

きそつなイリアの腕を掴み、懇願した。
それに激昂したのはイリア少年である。

「黙れ…！貴女に何が……っ！何が分かるんだよっ！レディンツ…
！…レディンツ！」

イリア少年は今までの憎悪に満ちた言葉とは裏腹にレディンを求め、
狂ったように泣いていた。

レディンを頼っていたのに、彼は記憶を失い、何も分からなくなっ
てしまった事が一番辛く、憎かったのかも知れない。

その途端、イリア少年は身を震わせ、倒れそうになった…辛うじて
フェードが受け止めたけれど。

「イリア…」

イリアは物凄い高熱を出していた…恐らく慣れない長旅と修行の日
々…無理をしていたに違いない。

「取り敢えず宿屋まで運ばないと…」

イリアを放って置くことが出来ないフェードだが、宿屋まで抱える
には相当の時間がかかる。

「…放って置いてよ、レイ…」

意識だけはまだあるらしく、フェードを振り払おうとするが、フェ
ードは

「イリアを放って置いたら私、シャルルに恨まれるわ」

と、言った。

イリア少年は咳き込みつつも可笑しそうに笑いながら

「…っ…少しは…気に…してくれて、いるんだ…」

と、言った。

フェードは苦笑しながら

「私の責任なんだから自由にしてくれて構わないわ。ただし、下手な真似はしないでよ」

と、言った。

イリア少年は肩を竦めながらも僅かに頷いた。

覚束ない足取りでフェードに支えられながらイリア少年は歩いてゆく。

……自身を守ってくれと信じていたレディンの元へ。

レディンの事とイリア少年の気持ちの両方が分かるフェードは密かに溜め息をついた。

第十二節：暗黒の心、開かれし時（前書き）

さあ、始めようか？哀れな反逆者。

さあ、鳴いておくれ、美しき白い鳥よ。

美しき声を聞かせておくれ…か弱い鳥よ。

破滅への、前奏曲が鳴り響く。

さあ、おいで。

許しを請うのだよ、哀れな子羊。

第十二節：暗黒の心、開かれし時

アレンは溜め息をついた。

それは、あの日の事だった。

セイシエルを思い、父を裏切ってアルデイ家に味方をしたあの日…。アレンはセイシエルの事は知らない、一度か二度程度話したただけだ。ただ、それでもセイシエルとアレンを繋ぐ存在の為に父を裏切った。

「レイモンド卿…」

アルデイ家の法王の母、ラザニアの監視下で働く有名な医者…。そして、奇怪な最期を遂げた悲劇的な男の名前である。

レイモンド家はアルデイ家と繋がりがある為に葬り去られた。

そして…。忘れられないあの時…。レイモンド卿の息子も奇怪な最期を遂げた。

レイモンドとシャー青年ことシャルルがこれ程までに狙われたのは…。

「レイモンド卿が呪わしき禁術を示してしまったからさ」

父がアルデイ家を嫌う理由は禁術を示したから…。それだけでなく、その禁術をまるで実験か何かのように用いて生み出したからである。恐れを成したのか、罪悪感を感じたのか、レイモンド卿はきつと止めようとしたのだろうか。

アルデイ家に逆らったレイモンド卿は…。

アレンは苦々しい表情を浮かべた。

誰かが後ろにいるのだ、セイシエルの運命を狂わせ、レイザから全てを奪わせるようセイシエルに仕向けさせ、全てを狂わせた元凶が後ろにいるのだ。

シャルルも真実を知るために只1人で戦ったに違いない…目に見えない敵に対する怒りがアレンの中で渦巻いた。

「ティアナ…」

ティアナの運命も狂わせた元凶…。

ティアナには本当の両親が必要なのだが、両親が誰なのか、その真実を告げる勇気がなかなか出なかった。アレンはレイモンドの意思、レイモンドの下で仕える人々の為にティアナの事を引き受けた。

言えない…ティアナにそんな事を告げたら取り返しのつかない程傷付いてしまう。

レイナの事も、レイザの事も言えない。

…かと言ってセイシエルに「やめろ」と説得する事も出来ない。

セイシエルが取り返しのつかない事をしようとしている…それはアレンにも分かっていた。

「…そう言えばフェードはどうしている…フェードなら信用が置けるから同行を命じたが」

フェード…アレンは勿論知っている。

レイザの義妹レイ・アルデイである。

だが、彼女は義妹なので当然アルデイ家の人間ではない…レイザの義妹でなければ彼女は…。

「…レイ…」

結局自分は何も出来なかった…父も、自分も何も出来なかった。

父の反対を振り切ってシャルルに協力しておけば良かった、セイシエルに協力しておけば良かった。

間接的にしか関わらなかつた自分も罪深い。

レイザが自分を恨んで当然である。

セイシエルを、シャルルを救えなかつたのは間違いなく父にしか従えなかつた無力な自分であり、この家の責任である。

アレンは顔をあげて、殺気を放つ来客を見て、自嘲気味に笑った。

「……………来たのか」

待っていた、罪深い自分を裁こうとする…レイザに忠実な部下を。

「アルファード」

アレンのところに来たのはレイザの部下だった。

勿論、知っているのはアレンだけである。

「久しぶりですね、アレン。もう知っているのかしら」

アルファードの突き刺すような言葉にアレンは頷く。アレンが頷いたのを見たアルファードはため息をつきながら

「そう…レイ殿を匿ったのは貴方とゼーウエル卿よね。最も、彼女はゼーウエル卿を恨んでいるんでしょうけど」

言った。

アレンは苦笑しながら

「…ああ。しかしゼーウエルは何も言わない、レイが仇討ちしに来たとしても何も言わないだろう、黙って受け入れる。ゼーウエルはそういう奴だ」

と、アルファードに言い返した。

「…レイザ様にも言わないおつもりかしら？ 貴方は」

アルファードは突き刺すような、射抜くような目でアレンを見ている。

アレンはアルファードの逆鱗に触れる覚悟で答えた。

「…ゼーウエルがそう望むなら。アルファードよ、お前はゼーウエルをどんな風に見てきたのだ…奴にとってレイザは守るべき存在、だから奴はレイザに明かす事は無いだろう、私だって説得したいがゼーウエルの考えはそう簡単には変わらないぞ。…説得の協力はするがな」

「…貴方達はいつもそうだわ！」

アレンの予想通りアルファードは激怒し、アレンの頬を平手打ちした。アレンにとってはそれすらも予想通りである。

流石に剣を向けるような真似はしなかったただけ幸いだったが…。

「…大体他人事のように見て見ぬ振りをして来て貴方達に直接被害が出る恐れが出てきた途端に…！ レイモンドの研究を止めるのは貴方達の役目でもあったのよ、ゼーウエル卿がああなったのも貴方達の原因よ…ゼーウエル卿がお優しい方で良かったわね、でも私は違うわよ」

肩で息をしながらもアルファードは殺気を放ちながらアレンを見据えた。

主であるレイザ、ゼーウエルに対する忠誠心と、何もなかったライハード家に対する怒りが渦巻く。

けれどもアレンは全く反論しなかった。

「分かっているかしら？」

アレンが何も言わない事にアルファードは内心焦りながら問いかける。

「……その通りだ」

全て認めた……あっさりと。アレンの返答にアルファードは意外そうな顔をした。

「……ゼーウエルもレイザもあんな事にならなかった……奴さえ支持しなければ良かったのだ」

アレンの呟きにアルファードは違和感を覚え、アレンに問い掛ける。

「……奴さえ？」

「……知らないのか？お前達を使役する技術を編み出した暗黒魔術師……恐ろしく、しかし偉業を成し遂げた最強の暗黒魔術師を。ゼーウエルを生み出した冷徹な暗黒魔術師の存在を」

アレンの苦痛に歪むような表情を見たアルファードは不規則に心臓が鳴り始めるのを感じた。

「死の契約者を創り出した……ディアルト」

アルファードはその名前を聞いて驚かずにはいられない。

「…ディアルト…！ゼーウエル卿の…父親…死の契約の創造者…」

「そうだ、間違いなくディアルト。シャルルを抹殺したのもディアルトだ。ディアルトならばシャルルを暗殺するのも可能だ、違うか？アルファード、お前は知っているだろう…ディアルトの正体を。奴は常にゼーウエルの側にいた…ゼーウエルが可笑しな真似をしないようにするためにな」

そう言ってアレンは窓を睨む。

「…ヴェラーゼ。お前こそがディアルト…」

「…！」

アルファードは大きく目を見開く。
その途端…。

ガシャーン！

……パラパラ……。

…窓硝子が大破した…。

そこにいたのは…。

「よく分かったね、アレン君」

ニツコリと笑うヴェラーゼの姿だった…しかし、漂わせている邪悪な魔力と全体的に黒い…まさに暗黒魔術師と呼ぶに相応しい格好をしていた。

「あ、な…何故…」

アルファードは驚かすにはいられなかった…確かに魔術師の中でも上級者ならば姿を変える事は可能だが、姿はおるか自らが元々持っている性質そのものを変える事が出来る魔術師など聞いた事がない。

「驚かせてごめんね、アルファード。でも全てアレン君の言う通り、僕こそがディアルト・キースだよ…先代には会った事があるがアレン君には会った事、なかったな…初めまして、アレン」

ニツコリと笑うその笑顔さえも禍々しく見える…アルファードは動揺しているのか、怯えているのか、体を震わせている。

ディアルトは無邪気な笑顔を浮かべながらアレンに向かって手を伸ばした。

「…初めまして、ディアルト。そう、アレンだ…会えて嬉しいぞ、まさか私みたいな子供まで礼儀正しくしてくれるとはな」

そう言いながらもアレンは動揺を隠しきれない。取り敢えず差し出された手を握り返したが。

それに満足したのか、ディアルトは愉快そうに笑いながら

「あはは、ゼーウエルが世話になったんだ、挨拶位しておかないとね。最も…君じゃないんだよ、狙いはね」

不気味な事を言った。勿論アレンにはディアルトの狙いなど分かっている。

「……レイザとレディン、違うか？お前にとってレイザほど恐ろしい存在は無いだろう…レディンはシャルと共に…な。シャルか

ら真実を知った以上レディンは邪魔だ。レイザは言うまでもない」

アレンが言い放つとディアルトはお腹を抱えながら笑い始める。

「あははは！ご名答だよ、レイザの存在は前々から危惧していたよ……生け贄となるべき存在のゼーウエルが居なくなれば僕の計画は台無し。それなのにレイザも……ゼーウエルも……2人ともソフィアにそっくりだよ！」

歪んだ笑みを浮かべながらアレンを睨み付けるその瞳は狂気としか言い様がない。

「ソフィア……裏切った……裏切ってシリウスのところに行つたよ、ソフィアの望む事をしたのに……シリウスから何もかも奪い去って……地位も名誉も栄光もこの手でものにした。なのに、ソフィアは裏切つた。僕をアルディ家の当主選ばず、シリウスを選んだ」

ディアルトはクツクツと笑いながら語り始める。

「ラーナの制止を振り切つてソフィアを自分のものにしたよ、泣き叫ぶソフィアにも構わずにね。なのに神はゼーウエルを殺した……ソフィアの息子を、僕の息子を……僕は神を呪い、毎日毎日……それでもゼーウエルは泣き声すら上げない……そして僕は思った……ゼーウエルを悪魔に授ければ良いってね！」

覚えていた全ての魔法陣を書いて召喚魔法を用いた……そしてゼーウエルは生まれた……僕のおかげでね。

悪魔に印を刻み付けて僕に徹底的に仕えさせるようにして。クツクツ……ゼーウエルは僕のおかげで強大な力を得た、なのに……なのに！」

ディアルトは殺気を放ちながらアレンとアルファードを睨む。

放たれる魔力だけでこの部屋を滅茶苦茶に出来るのではないかと思わずにはいられない程の凄まじい力を放出している。

「レイザを選んだ。僕のおかげで生きているのに僕を裏切ってレイザを！レイザ、ゼーウエル…何故？レイザを何故庇う！あんな、あんな汚らわしい子供！…もう、ゼーウエルもこの手で殺すしかないね。可愛い我が子…ゼーウエルを殺したくなかったけど」

ディアルトは狂気に満ちた目でアレンとアルファードを睨み付ける…その狂気に2人は怯えていた。

その狂気に満ちた目だけで十分だった。ディアルトはクツクツクと笑いながら

「ゼーウエル、レイザ…どう？美しいと思わない？兄を慕う弟、弟を想う兄…何て美しいのだろう…でも僕からすれば汚らわしい。アレン、アルファード、君たちは後だよ。しかし初めて会ったんだ、これでも受け取ってね」

バリバリバリ！

閃光がアレン達に向かって放たれる。

アレンとアルファードは地に伏せ、やり過ぎしたが、煙が消えるとディアルトの姿もなくなっていた。

「…消えたわ、ディアルト…」

身を起こしたアルファードは自分を庇ったアレンに手を差し伸べた。

「大丈夫？アレン」

「…すまないな、アルファードこそ怪我は無いか？大丈夫か？」

アレンの問いかけにアルファードは頷いた。

アルファードの手を握り、立ち上がったアレンは直ぐに装備を整える。

「……ディアルトの狙いはレイザだ。アルファード、レイザの居場所は分かるか？」

アルファードは一瞬迷ったが直ぐに首を振り、こつ言った。

「…分からないわ、でも大丈夫よ、私がレイザ様を助けに行く。アレンは他に助ける人がいるでしょう？」

「…だが」

「助けは不要よ、アレン・フォン・ライハード」

アルファードはしっかりと口調でアレンの申し出を拒んだ。

勿論アレンにもアルファードが自分の申し出を簡単に受け入れる筈が無いということは分かっていた。

しかしアルファードは緊急事態であることは分かっていたので、アレンと共に大都市に転移する事にした。

「移動まで時間がないわ、転移位ならしてあげる」

「うむ、宜しく頼む」

流石は上級者が調教した召喚獣ではある…詠唱すらせずに転移魔法を使用する事が出来るのだ。

最も、性質そのものを改変した上で姿を変えていたディアルトには遠く及ばないが。

その頃…。

レディンは先に宿屋に着いていた…ティアナを驚かせようとずっと待っていた…あの後散々説明された果てに結局は屋台の店員のお勧めであるクロスのネックレスを買ったのだ。

しかし…果たしてこんな安っぽいものを貰って彼女が喜ぶのかどうなのか。

レディンはそればかり思い悩んでいた。

相手は騎士団長の妹だ…きっと上品で豪華な宝石の着いたネックレスやら冠やらを付けているに違いない。こんな安っぽいネックレスを渡してしまつて大丈夫なのか？

レディンは未だにティアナに好意を抱いた事を後悔していた。

ティアナを好きになつたのは良いがアレンが果たして許すのか。危険な旅に惹かれ、探求心の赴くままに国境を越えて行く冒険者である自分と騎士団長の補佐として動かなければならない立場にあるティアナの恋を。

溜め息をついていると、扉を叩く音がした。

「レディン、いる？」

「あ、ティアナ」

どうやら部屋に来たのはティアナのようだ。

…一体どうやって此処に来たのだろう…。

「入って良いかな」

と、ティアナが不安そうな声でドア越しに聞いてきた事にレディン

は己の不器用さに呆れながら

「いよいよ」

と、答えた。

ティアナが恐る恐るドアを開いて中に入って来た。ベッドに腰掛けているレディンの隣に座りながら

「…レディン、屋台の近くにいたってフェードから聞いたけどいなくて…宿屋かなあって。疲れたの？」

上目遣いで聞いてきた。

レディンは内心ドキドキしていながらもティアナに

「いや、その…まあ、疲れたって言うのもあるんだが…ちょっと待っていたんだ、ティアナを」

さっさと渡してしまうに限る…レディンはそう思い、綺麗な包みをティアナに渡す。

「…何だ、その…さっきは悪かった…その詫びだよ…うん、詫びだよ」

ティアナに押し付けるように渡したレディンの顔は真っ赤だった。その様子を見たティアナはクスクスと笑いながら

「そんなに気にしてくれていたのね」

ティアナのからかうような台詞にレディンは完全に顔を背け

「…う、うるさい！文句があるなら返せ…！」

と、言ったがティアナには全然効果がなかった。
ムキになるレディンをティアナは笑いながら

「貴方は可愛い人ね、レディン」

と、言ったものの彼女もレディンのプレゼントに喜んでいて、
背を向けたレディンは気が付かなかった。みたいたがティアナも内心
かなりドキドキしながらレディンに話し掛けていたのだ。
レディンはちらりとティアナの方を向いて

「…一応、好きそうなものを選んでみたが…どうだ？」

と、言った。レディンの焦りに

「うー…まだ見ていないわよ、レディン」

と、言ってティアナは微笑みながら急かすレディンを宥める。
ゆっくりと包みを開けると中から出てきたのはシルバークロスのネ
ックレスだった。

「…ありがとう、レディン。早速つけていい？」

いきなりの質問にレディンは戸惑いながらも「え…ああ、構わない
よ」と言った後、また横に視線を移した。

ティアナはネックレスを付けながらレディンの横顔を見ていた。

（レディンはやっぱり可愛いっ！この横顔、何て可愛いの！）

熟れた林檎みたいに真っ赤になっているレディンにすっかり夢中になっている…やはりティアナはレディンにメロメロのようだ…勿論レディンも同じである。

「もう付け終わったよ。レディンにも渡さないと！」

レディンが振り向くのを待ってティアナは包みを渡した。

「……ティアナ、これは？」

それを見たレディンは更に動揺した。

同じ包み？一体彼女がどうしてこれを？

「レディン、開けてみてよ。というかレディンって装飾品付ける？」

「あー…」

ティアナの問い掛けにレディンは曖昧に濁した。

因みに本当は装飾品を付けないのである…。

邪魔だから…。

指輪を付けたら剣等を持つときに邪魔、ネックレスは支障は無いのだが太く長いものと木の枝に引っ掛かって窒息死するかも知れない。

有り得ない事かも知れないが、あらゆる可能性を考えて行動するには装飾品は非常に煩わしい。

だが、折角ティアナが選んでくれたのだ。そんな事を言いたく無かった…。

包みを開けてみると…中に入っていたのはネックレスでも指輪でも無かった。

中に入っていたのはシンプルな作りの鉢巻きであった。

「これ…」

「前髪、長いなあと思ってさ。鉢巻き巻いたら良いかなあなんて！生地も良いもの使ってるみたいだし！」

ティアナは瞳を輝かせて自分を見ている…やっと落ち着いたのでまたドキドキして出したレディンはティアナをまともに見る事が出来ずにいた。

しかし自分が鉢巻きを付ける事を楽しみにしているティアナに付けないとは言えないレディンは鉢巻きを額に巻いた。

前髪を少し残して、額がなるべく見えるようにしながら鉢巻きを付けた。

「おーっ！レディン格好いいっ！」

付け終わったレディンを見たティアナは眩しい位の笑みを浮かべて喜んだ。

（ペースに乗せられたな…）

満面の笑みを浮かべて喜んでいるティアナとは対照的に完全にペーసుに乗せられたレディンは苦笑いをするだけだった。

コンコン…。

レディンの扉を叩く音がした…フェードが帰って来た…レディンはそう思い、扉を開けた。

「ああ、レディン殿にティアナ様！」

扉を叩いたのはやはりフェードだったが様子が可笑しい。

「レディン殿、ベッド空いてますか!？」

フェードの慌て振りにレディンは頷いた。

「良かった…後できちんとお話致しますからレディン殿、この子を
！」

どうやらフェードは少年をレディンの元に連れて来たようだ。

怯えるティアナに唾然とするレディンだが少年がうなされているの
は事実。

それに…それに…。

(俺はこの少年を見た事がある…)

レディンはフェードの肩に体重を預けている少年に見覚えがあった。
それと同時に何故か知らないが罪悪感が起こる。

「あ、フェード…その少年は私が…」

フェードは黙って少年をレディンに預けた。倒れ込んだ少年は微かな意識でレディンの顔を見ている。

ずっと見たかったあの笑顔…失ったあの日から。

少年はレディンの腕の中に身体を預け、安堵した。まだ、体は悲鳴を上げているが。

「…ティアナ様、行きましょう」

「……うん」

先程まであの時の冷たい笑みを浮かべた少年の登場に驚き、怖くなつたが、あの時とは違って熱に魘されながら苦しそうに呼吸を繰り返す少年を目の当たりにしたティアナは心配そうな表情をしながらフェードの後に着いて行く。

少年の無事だけを祈りながら。

……徐々に迫り来る敵の存在に気付きもしないで。時計台にいた筈のレイザは街の中心にいた。

「…レディン、シャルと同じやり方でお前を裁いてやる。この裏切り者が」

…銀色の細い剣を片手にレイザは悲しみと怒りに身を震わせていた。

だが、身を震わせるレイザの姿を見た者がいた…。

「…レイザ、貴方は勘違いをしているわ」

ティアナが疲れのあまりに寝たのを見計らって宿屋の部屋から抜け出したフェードであった。

「お願い、シャルを…レディンを恨まないで」

フェードはレイザに近づく機会を探りながら誰にも聞こえないように呟いた。

第十三節：新たなる悪夢（ゆめ）に誘われる（前書き）

憎め、もっと憎め。

囁きかける声が響く限り逃れる事は出来ない。

己の存在は周りを不幸にしてゆくだけだ。

紛い物でしかないのなら、何故消滅させてくれないのだろうか。

こんな命、己の存在全てが紛い物ならば生きる意味も見出だせる筈はないのに。

怒りと憎しみと悲しみが交差する。

幼い頃の記憶が蘇る…その、憎しみはやがて自分も他人も破滅に導いてゆく。

第十三節：新たなる悪夢（ゆめ）に誘われる

「……レイザ様」

アルファードと共に戻って来たジャンはレイザに跪いた。

「ジャン、アルファードから聞いたぞ。あまり軽々しい行動は慎め。子供言えどな…」

「はっ…申し訳御座いません、レイザ様。以後気を付けます。」

ジャンはレイザに謝罪をした後、跪いたまま顔を上げ、指示を仰ぐ。レイザは冷笑を浮かべながらジャンに指示を下す。

「…まあいい、気にするな…それよりも。ジャン…お前にしか出来ない事だ…失敗は許さん」

「はっ…」

ジャンは顔を上げ、真っ直ぐとレイザを見つめる。

ただ、その目は虚ろで濁っている。

人形のように意思のない目を見て満足しながら伝える。

「…アルファードと共にレディンのところへ行け。ただしレディンを傷つけるなよ、良いか？」

良いかと問い掛けたがジャンに否定する術がない事をレイザは知っている。

ジャンが頷こうとするとアルファードはレイザの前に来て跪く。

「…お待ちください、レイザ様」

アルファードの強い口調にレイザは笑みを消して

「どうした？」

と、問い掛ける。アルファードはアレンの部屋での出来事を思い出しながら言い始める。

「レイザ様…私はレイザ様と共に行動すると言つのは？私がいらない方が…」

アルファードはレイザを単独にさせないようにするのに必死だった。レイザを狙うディアルトがいつ現れるか分からない…あの時もいきなり現れたのだから。

しかし、ディアルトの事などアルファードは言えなかった。

アルファードの煮え切らない態度にレイザは静かな怒りを湛えながらアルファードに命令を下す。

「…アルファード、レディンを必ず連れてこい…俺は奴に問い質さねばならんだ。場合によってはレディンを殺す」

レイザは単独行動をするつもりだと悟ったアルファードはレイザと同行しようとするがレイザは

「アルファード…俺に逆らうのか？」

と言って有無を言わずアルファードを睨み付ける…殺気を放つ視線にアルファードは何も言えず、結局ジャンと共に行くことにした。

アルファードとジャンの後ろ姿を見つめながら

「……………ティアナ、悪いな」

と、呟いて、悲しそうに笑ったが直ぐに冷徹な表情を浮かべながら宿屋の方に向かって歩き始めた。

「……………レイザ……」

街の外を歩きながらフェードはレイザを探した。

……レイザがこんな風になったのはゼーウエルのせいだとフェードは呪った。

シャルもゼーウエルのせいで死んだと確信している。

「ゼーウエル、私から何もかも奪うつもりなの？レイザもシャルも……レディンも」

レイザ……例えば血が繋がらなくともカインは兄なのだ……フェードの……レイの兄なのだ。

レイにはレイザしか居なかった。

8年前、自身の住む修道院がアルデイ家に襲撃されてしまい、レイ自身アルデイ家の幹部によって襲われた。ゼーウエルが助けてくれたのだが……レイザがゼーウエルに関わってから悪い事しか起きない。

「ねえゼーウエル、私は貴方を許さないわよ……レイザが貴方を慕っていてもね……！」

義理の両親と兄と育ての親を失い、必死に生きて……鍛えて、さすがのように騎士団に入団した。

アレンにだけは話して……必ず真実を明らかにして仇討ちをすると。

「……」

同時に見回りをしていたジャンはフェードの姿を発見した…。
フェードは立ち止まる…ジャンも立ち止まり、身構える。

「…ジャン・ブルネーゼ」

副団長であるジャンと合流して一瞬だけ安堵したが、ジャンの目を見たフェードは動揺する。

「…貴様は」

動揺するフェードにジャンは身構える。

「お前…レディンの仲間だろう…」

低く唸るような声にフェードはジャンが敵になった事を知り、身構える。

「…だからどうしたと？」

フェードが問い掛けるとジャンは剣を抜いて

「…ならば始末するまで。」

と言い放った。

キーン！

剣と剣がぶつかる音が響く。

「…ジャン、こんなところで乱闘騒ぎを起こすの？」

フェードはジャンの剣を振り払うがジャンは体制を変えて斬りつける。

「ジャン、やめなさい…」

<ジャン、やめろ>

フェードの声と同時にジャンの脳裏に響く悲しげな声…。

「……っ！」

ジャンは苦し気な表情を浮かべながら剣を構え直した。

「ジャン…」

フェードの悲しげな声が、悲しげな表情が再びジャンの動きを止める。

しかしジャンは不敵な笑みを浮かべながら剣を構え、垂直斬りを放つ。

フェードは容易く垂直斬りをかわし

「ジャン、やめて」

苦し気な表情を浮かべ、肩で息をするジャンに呼び掛ける。

「…見るな…やめろ…私は…っ！」

ジャンは呻くような声を上げ、フェードを睨み付ける。その途端…。
ズサッ！

フェードの体を刃が貫く……。

「…レイちゃん、あまりお転婆過ぎないでね、痛い目に遭うんだから」

アルファードは自身の魔力で作り出した刃でフェードを刺した。

「ぐっ…！…やめ、て…ジャン…」

フェードはその場に倒れた。

か細い声でジャンを説得し続けるフェードにジャンは次第に意思を取り戻してゆく。

「……フェード」

…シャルと共にいた少女…副団長になって直ぐ後に共に行動をしていた。

フェードは何も言わないが薄々気付いていた。

「…フェード…ド…？」

フェードがジャンに気付いた頃にはアルファードは既に消えていた。

「ジャン…！」

「…フェード、フェード…なのか」

ジャンは覚束無い足取りでフェードの元に近寄る。自身の部下であるフェードが瀕死の重傷を負った事に焦ったジャンはまだ臆気な意識を奮い立たせ必死にフェードの傷を治そうとする。そこへ。

「フェード、ジャン！」

アレンがフェードとジャンの姿を見つけ、駆け寄って来た。

「……アレン様！」

ジャンはアレンの姿を見つけ、ホッとした。

「大丈夫か？レイ……」

アレンの心配そうな表情を見てレイは申し訳なさそうに頷いた。ジャンはただ己の不甲斐なさに悔やみ、唇を噛み締めていた。

「ジャン、早く来い。レイザはとんでもない事をしようとしようとしているのだ！」

アレンはレイの手当てをしながらジャンを叱咤する。アレンが焦る理由はたった1つ。

ゼーウエルの父親であるディアルトがレイザを狙うには絶好のチャンスだからだ。

復讐心のままに突き進むレイザにディアルトが迫れば終わりだ。

ディアルトの生み出した『暗黒心』に捕らわれかけようとしているゼーウエルを救えるのは最早レイザだけなのだ。アレンは確信した。

ディアルトにとって脅威なのはレイザだけなのだ。

（例えそうだったとしても、ティアナ達ではレイザ程の力はない。ディアルトと対等に戦える力を持っているのはレイザだけだ！）

アレンの焦りを感じたフェードは掠れた声で

「アレン様、貴方だけ…でも行つて、下さい。レイザを…：…兄さんを…」

と、アレンに行くよう促す。
ジャンもアレンに向かって

「アレン様、事情は分かりませんが兎に角行つて下さいませ。アルファード、ティナ様を…。フェード様の事は私にお任せを。」

言った。

アレンは頷き、ティアナを救いに向かう。

（レイザ、馬鹿な真似は止せ！ティアナをも復讐の犠牲にするつもりか！）

一方その頃、レディンはと言うと。

「…少年、もう大丈夫か？」

先程まで熱に魘されていたイリア少年に向かって声を掛ける。
イリア少年は冷めた視線をレディンに向けながら

「あの子、フェードさんを追って行っちゃったんだ…早く行った方

が良いよ」

何となく嫌な予感がするイリア少年はレディンの腕を引っ張って向かう。

「…ねえ、レディン。期は熟したみたいだね」

イリア少年の不気味な呟きにレディンは何故か恐怖を感じた。

「…逃げちゃダメだよ、レディン」

イリア少年はレディンを憐れむような寂しげな目をして独り言のように呟いた。

「ほら、来たよ」

イリア少年とレディンは走って、走って…ひたすら走って…時計台まで来た。

レディンは目を見開かずにはいられない。

そこにいたのは…。

「……久しぶり、だな」

地獄へ誘う低い声…。

アルファードとレイザが時計台の下で待ち受けていた。

シャルルから話を聞いていたイリア少年は2人の姿を悲しげな表情で見つめて

「…やっぱり会っちゃった…僕は会いたくなかったけれど、シャルルの言う通りか。レイザさん」

と、話し始める。

レディンはレイザの姿を見て、動揺していた。

それ以降はイリア少年も悲しげな表情を崩さずにレイザを見つめる。イリア少年の問い掛けにレイザは笑った…。

それは自嘲する笑みか、勝ち誇った笑みか、冷笑か。

「…お前には会いたくなかったよ。シャルルは幼いお前に残酷な事を話したのか」

「違うよ、僕が知りたかっただけさ。レイザ…意味、あるの？たかが反逆者の残党がアルデイ家に復讐して何の意味、あるの？ゼーウエルが何をしようとしているか分かってる？」

イリア少年は憎しみと悲しみを込めてレイザに話し掛ける。

レイザは相変わらず笑っていたが、不意に笑みを消し、真剣な表情で

「…イリア、俺の邪魔をするな。俺はお前を手に掛けたくない、俺の目的はレディンだけさ。お前の母を捕らえ、アルデイ家に差し出したレディンだけだ！そこを退け！」

レイザの怒鳴り声にイリア少年はきっぱりと

「嫌です」

と言って拒んだ。イリアはレディンの前に躍り出て庇っている様子を見たレイザは悲痛な表情で

「…イリア、分かってくれ、俺はレディンだけは許せない…イリア、頼むから退いてくれ」

イリアを説得するけれどイリアは頑として首を縦に振らなかった。
レイザは悲痛な表情を浮かべ、イリアに尚も説得を続ける。
しかしいつまで経ってもイリアは退かない。

悲痛な表情は消え、冷徹な表情が浮かび上がる。

「…仕方無い…イリア、お前も死んでもらうぞ」

レイザは剣を抜き、イリア少年に向けた。
イリア少年も剣を抜き、中段に構える。

「レイザ、覚悟！」

イリアはレイザに向かって斬りつけようとするが、レイザは軽々と受け止め、振り払う。

レイザの悲鳴も剣が交わる音にかき消される。
アルファードは既に自身の手の内にあるティアナの喉元に短剣を突き付けながら勝負の行方を見守る。

人並み以上に剣の扱いが上手いとは言え、大人に…それも最強の剣闘士と謳われるレイザを相手にたかが少年であるイリアが太刀打ち出来る筈がない。

レイザの剣技をやり過ぎし、かわすしか術がなかった。

実力の差は歴然…イリア少年がレイザに倒されるのは最早時間の問題だった。

それでもイリア少年は全く退かない…何度も薙ぎ払われ、その場に倒れても直ぐに剣を構え直し、レイザの剣を受け止める。

レイザはイリア少年とレイザの一騎討ちに悲鳴を上げながら…。
目覚めてゆく残酷な真実…その場面が脳裏に過る。

<…この、裏切り者>

己の後ろ姿を見つめながら低い声で呟く青年の声…。

紛れもなく、まだ若かったレイザ…カインの声だった。

カインの涙と怒りに満ちた低い声を背に、それでも振り向けずにいた幼い自分とシャルル。

2人が抱き抱えていたのは瀕死の…カインの恋人だった。

カインを見捨て、アルデイ家にイリアを連れ去った幼いレイジンとシャルルだ。

ゼーウエルの言われるがままにイリアをアルデイ家の屋敷に連れ帰り、直ぐ様地下に向かう。

イリアは呻いている…シャルルは慌ててイリアをベッドに寝かせる。

…浮かび上がるのは…イリアとカインの子供が生まれる瞬間だった。そう、その為に…イリアを救う為にカインからイリアを切り離さなければならなかった。

だが…だがイリアは…。

<すまん、レイジン…2人は助かったが…イリア様は…>

シャルルの嘆き声が周囲を地獄のどん底に突き落とす。

しかし悲しむ暇もなく、何とかしなければならなかったあの時。

レイジンが顔を上げると同時にイリア少年は剣を飛ばされ、レイザに斬られようとしていた。

イリア少年は半ば死を覚悟し、振り下ろす剣をじっと見つめていた。

「……………レイザっ…！」

レイジンはイリアを庇おうと身を乗り出したが…。

……………カタン……………。

何かが…壊れるように、崩れるように…。

血も何もついていない銀色の短剣が床に落ちた。
レディンも、レイザもイリアも目を見開いた。

誰も、何も言えない…この悲しい試合を終わらせたのは……。
イリアを救ったのは…。

「…レイザ様」

イリア少年を斬ろうとしていたレイザの剣がイリア少年の前に躍り
出たアルファードの体を貫いていた。

「…この、少年は…貴方の…ずっと探して…いた息子では…ありま
せんか」

「…アルファード…」

「…レイザ様。自分の息子を…殺す…など悲し…過ぎる…では
…、あり…ませんか」

言葉を途切らせながらもアルファードは必死にレイザを説得する。

「…ティアナも…貴方の…」

そう言いながらアルファードは自分の体を貫いたレイザの剣を抜い
た。

「…そうさ、ティアナもイリアも俺の子供さ…」

アルファードは悲しみに満ちた表情を浮かべながらレイザの言葉を
聞いている。

「…でも、俺は捨てた。あの時から、アルディ家への復讐を誓ったあの時から俺は捨てた！何もかもだ」

「…レイザ様……」

アルファードは何かを言おうとしたが、何も言えなかった。ただ悲しげな表情を浮かべ、涙を流していただけだった。

「でも、アルファード…俺は…」

レイザは復讐を誓ったあの日から…始めて己のやった事を悔やんだがもう遅かった。

悲しげな表情を浮かべたままアルファードは既に息絶えていた。

レイザは血で真つ赤になった剣を持ったままぼんやりとアルファードを見下ろしていた。

「……レイザ」

やっとの思いで口を開いたのはレイジンだった。

「……レイジン、貴様……」

レイザの怒りの矛先はレイジンに向けられる。

「レイシア、貴様…貴様さえあんな事をしなければ……！」

「レイザ殿……」

レイザが憎悪に満ちた視線をレイジンに向けても、剣を構えてもレイジンは身構える事も何もしなかった。

「それで、レイザ殿が報われるなら」

にっこりと笑ってレディンは目を閉じた。

「イリア、ごめんね」

レディンはイリアに背を向けたまま呟いて、レイザの方に向かって歩き出す。

…レディンは自ら死を選び、そこに向かって歩いている。

…シャルルのように。

<ごめんね、坊主>

それが最後の言葉だった…朝、目を覚ましたらシャルルは血だらけで倒れていた。

広がる…真っ赤な血…心臓を銀の弓矢が撃ち抜き…無惨な最期を遂げたシャルル…シャルルがいなくなって…レディンもいなくなった。

「いやだーっ！置いていかないでっ…レディン…レディン！独りにしないでよ！」

「……イリア……」

イリア少年がレディンにすぎる様を見て驚いたのはレイザだった。それと同じ瞬間、レイザの背後からキラリと光る矢が飛んできた。

「……！」

レイザがそれに気付いた時は間近まで迫っていた。

振り向き、振り払おうとしたレイザは突き飛ばされた

「うっ！」

ドスッ！

「……………！」

起き上がったレイザの目の前に広がる光景は…アルファード以上の衝撃をもたらす事になった。

「レディン…」

レイザがレディンに歩み寄ろうとしたその時。

<みつけた。やっぱりここにいたんだね！レディシア君>

幼い…甲高い声が時計台に響き渡る。

甲高い声でレディンに話し掛けるが、姿は見えない。

<レディシア君…あんまり僕の手を煩わせないでよね〜シャルルがあっさり死ぬと思ったら君がアルディ家やファレス全域の秘密を探っていたわけかあ〜。しかも辿り着く手前まで来たなんて厄介だなあ>

「……………！？」

上空から響き渡る声にレイザもイリアも衝撃を受けた。

レディンがアルディ家やファレスに隠された秘密を探ろうとしていた事など知らなかった。

レイザでさえアルディ家やファレスに隠された秘密を知ることが出来なかったと言うのに。

ただ、レイインだけは刺さった矢を引き抜く事もせず、聞いていた。

<黙ってないで答えなよ、レイシア君。それとも…>

声の主がそう言うと同時に体に刺さった矢が更に深く刺さり、抉るように引き抜かれた。

「……っ！」

レイインは声にならない声を上げて血を吐き、膝をついた。

その様子を見て、勝ち誇り、狂ったように笑いながらレイインを嘲る。

<あはははっ！シャルルは勇敢だったよ、だけどその勇敢さが仇になるんだよ！あははは…あーっはっはっは！痛い？痛い？苦しんだろ？勝手に首を突っ込むからこんな目に遭うんだよっ！……来たの？ライハードの小倅が>

先ほどまで高らかに笑っていた声の主が見下ろし、低い声で呟いた。

「勝手な事はさせないぞ！」

レイインを庇うようにして大剣を抜き、構えていたのはアレンである。

声の主はアレンを見て残念そうに

<…あら、アレンまで来たの？つまんないな。まあいいや…実行せよ！>

言つと同時に命令を下す。

<まずはレディシアから血祭りにあげないと。その次はゼーウエル卿とラザニアとアイシアねっ！アレンなんかに構ってられないんだよね、これが！>

狂気に満ちた台詞を吐き捨てると同時に空間が歪み、レディンとティアナが吸い込まれてゆく。

「ティアナ！レディン！」

アレンとレイザとイリア少年はレディンを助けようとするが、3人も呪縛に遭い、動けなかった。

「レディン、ティアナ！」

呪縛に掛からなかったイリア少年は発生した空間に引き摺りこまれるティアナだけは何とか救い出したがレディンは歪んだ空間に吸い込まれた。

「レディン……ッ！」

イリア少年の悲鳴も虚しく、レディンは謎の声の主によって連れ拐われた。

第十四節：互いに想い、互いに愛するが、交わることもなく（前書き）

例え貴方が私を助けてくれたとしても。

貴方がいなければ立ち上がる事さえも私は出来ない。

貴方は私に力を、私は貴方に愛を。

どうか我が主、悲しそうな顔をしないで下さい。

例え許されたとしても天は許すことはないだろう。

その真つ直ぐな忠誠心に答える術も知らない非力な私を許してほしい。

嗚呼…嗚呼何と。

悲しきこの想い。

『相思相愛』

…けれども、この想いが交わる事も無く。

第十四節：互いに想い、互いに愛するが、交わることもなく

<…この臆病者が>

刻まれている声。

静かな怒りを湛えながら呟いた言葉に震え上がり、泣いていた。
…イリアに告白された事を知り、やって来たゼーウエル卿だ…。
その言葉に震え上がり、何も言えなかった。
恨まれているようで、疎まれているようで…近付けなかった。

<お前なんか生まれなければ良かった…！誰が認めても私はお前の存在など認めない…認めるものか！>

はつきりと知った…ゼーウエル卿は自分を恨んでいる…いや、自分を憎み、呪い、恨んでいる。

母がゼーウエル卿に対してそんな事をしていたなんて知らなかった。
…何を期待したのだろう。一番に自分を認めて欲しかった相手には一生認めてもらえないのに。

今でも変わらない…あの人の為に…あの人に認めて欲しくて、あの人にだけは見限られたくなくて必死だった。

何をして、どんなに努力しても、いくら力を得たとしても…一番欲しくて欲しくてたまらないもの…それだけが手に入らない。

自分が心から望んだものは一生手に入らない。

(ゼーウエル、私はこんなにも簡単に崩れてしまう。貴方が何をしようとしているか分からないけれど…どんな事があるうとも着いて行くから…独りにしないで…私も共に行かせて下さい…ゼーウエル)

その姿は遠く見えなくなつてゆくのをレイザは泣きながら見ていた。

あの時も、今もあの人は何処か遠い…イリアも故郷も何もかも失ってしまったレイザにはゼーウエルしかいなかった。

少し寂しげな笑みを浮かべながら、ゼーウエルは何かを伝えようとしているけれど聞こえない。聞こえないと察したのか…それとも何度と同じ事は言えないのだろうか、ゼーウエルは寂しげな表情を浮かべたまま暫く此方を見つめ、やがて俯いて去ってゆく。

我が主、貴方は何処へ行くのですか？

私は貴方の役には立てないのですか？

嗚呼、貴方には伝わらない。

嘆き、恨み、背き、背いて罪を犯して辿り着いた先は貴方だった。

貴方は何も言わない…突き刺すような視線が、刺々しい物言いに怯えて近付けない、聞けない。

ねえ、お願い。

私にはもう貴方しかいない…道具でもいいから、私を憎んでも構わないから側にいさせて。

…けれど、もしも願いが叶うなら。

どうか、あの人を…。

「…さん、レイザさん」

酷く悲しい夢を見ていた彼の耳に心配そうにしている声が聞こえる…レイザはゆつくりと目を開けた。

「イリア……」

やはり声の主はイリアだった。

「レイザさん、大丈夫？何だか気を失ったからアレン様に頼んで運

んだんだよ」

イリアの穢れのない純粹な眼差しにレイザは罪悪感で一杯だった。こんなにも穢れのない瞳をした少年が鋭利な刃を握り締めなければならなかった事に。

ずっと会いたくて追いかけていた人物を守れなかった事に。

「…そ、うか…すまない…レディン…」

レイザの掠れた声にイリアは俯いて

「…父さん、レディンは大丈夫…貴方の右腕だからきつと」

言ったが、レイザの手のひらに涙を溢した。

「……イリア…俺は…」

レイザが何を言おうとしているのかはイリアには分かっていた。こんな状態になっても彼はゼーウエルの側にいたいのか。

「…父さん、言わないでよ。知ってるから、そんなこと」

レイザとは永久に交わる事はない…それを知り、イリア少年は悲しそうな声で呟いた。

「ティアナには言わないよ、傷付けたくないから」

イリア少年がティアナの事を言った途端、レイザの表情は固まった。

「……イリア」

「大丈夫、言わないから。彼女にはレディンしかないもん」

レイザがどんな表情でティアナの名前を聞いていたのだろうか。どんな想いでレディンの名前を聞いていたのだろうか。

シャルルの側にいてレディンの事とレイザの事の両方を知るイリア少年は複雑な心境で何も言わずレイザの横顔をぼんやりと見ていた。暫く経つと…。

トントン。

扉を叩く音がする。

「イリア君、レイザ殿」

ドア越しに聞こえたのはアレンの声だった。

「アレン様」

イリア少年は反応し、レイザに許可を求めた。勿論レイザがアレンの入室を拒む理由等ない。頷いたのを見たイリア少年はドアを開けてアレンを招き入れた。

「レイザ殿、無事で何より。疲労で倒れたみたいだからな…」

「…そうか」

レイザが小さく呟くとアレンは

「…暫く休むといい。イリア少年、レイザ殿を見ていてくれ。外に

も兵士達に見張らせている」

そう言つてイリアに指示を下す。

「分かりました」

イリアが頷くのを見たレイザは僅かに苦笑した。

一方その頃、薄暗くぼんやりした灯りで照らし出された空間…。

「…ここは…」

見渡す限りの薄暗い空間…重苦しい雰囲気がいっつも醸し出されるところ。

「…ディアハート…」

ディアルトの愛という意味で名付けられた牢獄に繋がれていた事を把握したレディンではあるが脱獄する事を考える事はしなかった。

ディアハートを脱獄しても自身の末路は火を見るより明らかだった事をレディンは知っていた。

俯き、溜め息をついていると

「憐れだな、レディン」

レディンを憐れむような低い声が聞こえてきた。

声の主など顔を上げる事などせずとも分かる。

「ゼーウェル卿」

強い口調で自身の名前を呼ばれたゼーウェルは相変わらず憐れむよ

うな表情を浮かべていた。
それを見たレディンは顔を上げてゼーウエルに向かって

「俺が、惨めですか？ 貴方の目から見た俺は」

問い詰めた。

ゼーウエルは否定も肯定もせず

「少なくともお前は勇敢だったかな」

淡々とそう答えただけである。

レディンは恨めしそうな表情でゼーウエルに向かって話し始める。

「……貴方は間違ってる。例えば貴方がソフィア様から手酷い仕打ちを受けてもレイザ殿にそれを向けるのは間違ってる。レイザ殿は偶々生まれたただけだ……レイザ殿には『親を選ぶ』事など出来ませんよ、ゼーウエル卿」

レディンの恨めしそうな表情と睨み付けるような眼差しと、はつきりと過ちを指摘され、ゼーウエルは更に低く、唸るような声でレディンに向かって言い放つ。

「……その様子では記憶を取り戻したか……レディシア……」

「ええ、貴方が一番よく分かっているんじゃないか？ 俺がどうやって記憶を取り戻した事くらいはね。シャルルから聞いて調べた……貴方は悲しい上に憐れだ」

ダンッ！

レディンの台詞を聞いたゼーウエルが鉄格子を叩いた。

「……黙れ」

低く唸るような声…地獄の底から這い上がるような声にレディンは黙った。

憐れだ…その言葉がゼーウエルの逆鱗に触れたみたいだ。

「……何が分かる、レディシア…貴様如きの人間に私の何が分かる……」

静かに怒りを湛えながら呟いたゼーウエルに対してレディンは心の中で恐れた。

決してその恐れを表に出さないけれど。

「お前に私の何が分かる……それ以上言うな、レディシア……」

徐々に怒りを露にしながらゼーウエルは殺気を放った視線をレディンに向けるが、レディンもそこで怯むわけにはいかなかった。

「では何故貴方は闇魔術師サイオニックになったのです？宿命を背負わせた闇魔術師を貴方は最も憎んでいる筈でしょう？レイザ殿よりソフィア様よりも」

レディンの問い掛けにゼーウエルは答える事はしなかった。

レディンから視線を外し、下を向いている。

<ゼーウエル卿。どうして憎むのですか？母上も、イリアも…アル
ディ家も>

レイザを助けた後、自らアルディ家に戻り…牢獄に向かった時に出会った自身の闇…。

レイザは知らない、ソフィアもシリウスもラザニアもアイシアも自分にとっては憐れであり、憎しみを向ける存在でしかない事を。

何よりも自分の父親の狂気を止められなかった『あの医者』を、父親という恐ろしく偉大な魔術師を生み出し、狂気に取り付かれても我が身可愛さに放置したライハード家も。

結局は自分にとっては何もかも憎む存在でしかない事をゼーウエルは知った。

「クツクツク…レディシア…。」

俯いたゼーウエルは、ただ低い声で笑っていた。

殺気のもった視線よりも怒りを滲ませた低い声よりも恐ろしく、狂気に満ちていた。

真実を知る為にシャルルを使い、追い込んだゼーウエルの様子をレディンはただ見守る事しか出来なかった。

そんなレディンを嘲笑しながらゼーウエルは睨み付けた。

「『何故、闇魔術師になったのか』だと？シャルルから聞かなかったのか？シャルルはそれを貴様に話さなかったのか、レディシア？だとしたら奴もただの臆病者か」

彼は真つ直ぐと、殺気を放った視線をレディンに向けながら話す。

「そんなもの、簡単だ…この私を生み出した究極の魔術を完全に完成させ、更にそれを破壊の魔術に変えて何もかも壊してやる…！それだけが私の生きる唯一の支えであり、力になった！アルディ家に対する復讐と全てに対する報復だけが私の支えだった！」

「……………！」

レディンは目を見開き、何も言えずにゼーウエルを見守っていた。その間にもゼーウエルは殺気に満ちた視線をレディンに向けながら言い放つ。

「…悲しかった…ずっと悲しかった…私はただの『試作品』でしかなかった事が…。憎かった…その試作品を止める為にレイザを生み出した事が…試作品を生み出した癖に勝手に放り投げて逃げ出した母が、それを生み出した父が…止められなかった叔父が…見て見ぬ振りをした全員が…あの忌々しい宿命からレイザとイリアだけが逃れた事がなっ！」

「……………！」

ゼーウエルの狂気に満ちた台詞にレディンは何も言えず、呆然と見守っていた。

やはりゼーウエルとレイザは交わりそうで、実は永久に交わらない事を改めて思い知らされる。

「…なあ、私の38年間は何だった？私の存在等忌々しいものでしか無いではないか…。奴等の身勝手な理由で生み出されたと知ったあの日から私は力を手に入れる為に闇魔術師になった！レイザのような生まれつき優れた才能がない私が唯一すぎる事が出来る存在だった！闇魔術師になって、力を得て…全てを壊してやる事だけが！存在しているもの全てをこの手で壊す事だけが！…シャルル…シャル青年…奴も一度此方に来た…」

「ゼーウエル卿…！」

殺気に満ちた台詞と同時にシャルルの名前を出した事にレディンは思わずゼーウエルの名前を呼んだ。

そんなレディンに構わずゼーウエルは続ける。

「シャルルは私に向かって真実を知りたい等と言ったさ…それを利用して真実を追求させた…真実を知って絶望するシャルルを見たかった…あの医者が、シャルルの父親が究極の魔術を父に教えたという事実を知って絶望するシャルルが見たかった…なのにシャルルは殺された！父によって殺された！ソフィアも、シリウスも何もかも父は先に奪ってゆく…全てを奪ってゆく…身勝手な理由で私を生み出した癖になっ…！…クツクツク…」

そこまで言い終わるとゼーウエルは殺気を放ちながらも再び俯き、含み笑いをしていた。

最早レディンの目の前にいるのはゼーウエルではなく、悪魔だった。絶望的な雰囲気の中でレディンはゼーウエルと対峙した。

…遂に、対峙した。

……悪の復讐者と正義の使者が。

7年前

「レディン、わざわざ呼び出して悪かったな」

冒険者として国境を越えて旅をしていたレディンをヘレナまで呼び出したシャルルに内心何かあったのではないかと思いつながらも決して表には出さず、笑顔を貼り付けて

「シャルル！どうしたんだい？」

愛想よく心をかけて言った。

それに対してシャルルは悲しみを湛えながらレディンに懇願した。

「お前に頼みがあるんだ…ゼーウエル卿とレイザ隊長の両方に仕えていたんだろ？」

懇願するシャルルの真剣な表情にレディンはたちまち背筋をぴんと伸ばして黙って聞いていた。

「…俺は多分長くは持たない…だから、お前に託す。無責任な俺を許してくれ、レディン」

シャルルの台詞にレディンは青ざめて

「シャルル…まるで最後の別れみたいに言わないでくれ！」

と言ったがシャルルはきつぱりと

「最後の別れだ…俺はもうダメだ。目をつけられた…だから、お前に託す。」

…ゼーウエル卿を救ってくれ…頼む！」

そう言った後、再びレディンに懇願した。

レディンは戸惑い、シヨックを受けたままシャルルに向かって問い掛ける。

「…俺に出来ると思うのか、シャルル…レイを、レイザ隊長を、イリア様から全てを奪ったゼーウエル卿を俺は許せると思うのか？」

「そんなの百も承知だ！でも君なら分かるだろ？アルディ家に仕えていた君なら…アルディ家の事も…頼む！ゼーウエル卿を救ってくれ、レディン！」

…出来るのか。

8年前、自分の立場が危うくなったからと言ってレイの修道院にいた修道僧全員を皆殺しにした彼を…。

レイザよりも遥かに深く、底の無い憎しみを抱く彼を…闇に囚われた彼を…。

漆黒の闇を、底無しの憎しみを、深い悲しみを背負う彼を救うことなど出来るのか。

結局あの時は曖昧に濁しただけだった。

今、交わる事のなかった視線がぶつかる。

ゼーウエルの赤い瞳は憎しみと悲しみ…様々な負の感情が入り交じり、凄まじい殺意を放っていた。

レディンは何も言えない…底無し沼のように深い憎しみを背負うゼーウエルを救う術などなかった。

レイザを思うレディンは何とかゼーウエルの底無し沼のように深い憎しみから何かを見出だそうと、じつとその赤い瞳を見つめていた。ゼーウエルは相変わらず歪んだ笑みを浮かべながら突き刺すような鋭い視線でレディンを見つめながら含み笑いをし、

「…クツクツク…私は10年前に究極の力を手に入れた…それを以て破壊してやる…！この私の邪魔をするな、レディシア…！邪魔をするなら貴様もこの手で葬り去ってやる…！」

邪悪な言葉を紡ぐ。

レディンが動じず、黙っている事に苛立ちながらもゼーウエルは怒

りのままにレディンを攻撃する事はなかった。
2人の間に広がるのは不気味な雰囲気と死のような低い含み笑いの声だけだった。

シャルもこんな風にゼーウエルと対峙したのだろうか…レイザはどんな思いでゼーウエルに仕えていたのだろうか…ゼーウエルはどんな感情で自身の真実と対峙し、どんな思いでレイザを憎み、助けたのだろうか。

これさえ知ればもしかしたらゼーウエルから何かを見出させるのかも知れない。

ゼーウエルも不意に含み笑いを止め、笑みを消し、牢獄に繋がれたレディンの瞳を見つめた。

…死のような沈黙が広がる…。
最早2人には何もいらなかった…激しい視線が唯一の武器になっていた。

その頃の宿屋では。

「兄さん、どついう事なの!？」

目を覚ましたティアナがアレンから事情を聞いて問い詰めていた。

「ティアナ、本当に済まなかった…私が不甲斐なかった…」

レイザを庇って連れ拐われた事や今、レイザを匿っていることもティアナには言えなかった。

「違うでしょ! ねえ何で私に話せないの!?! 本当は違うんでしょ! 教えてよ! 少年は知ってるじゃない!」

「……ティアナ」

アレンはそう言われる度に引き裂かれるような思いがしたが、それでもティアナには言えなかった。

誰が殺人を犯した男の娘、近親相姦で生まれた娘と言えるだろうか。実の姉と弟が知らないうちに互いに惹かれ合った果てに生まれた子供……そんなこと言える筈がなかった。

イリア少年も今だからこそ受け入れる事が出来るのは想像を絶する覚悟や執念があったからである。

或いはシャルルの執念がイリア少年を良い意味でも悪い意味でも駆り立てたのかも知れない。

「ティアナ」

何も言わずに黙って耐えているアレンを見兼ねたのか、降りて来たイリア少年が口を開く。

「レディンは君を思って庇ったんだ、分かってやりなよ。君が一緒に行っても足手纏いになるだけだと思っけど」

「……！」

ティアナが怒りに満ちた目で見ていたが、イリア少年は怯まない。

「真実を知る覚悟も持たないお嬢様と一緒にレディンが迷惑するよ。」

君は真実を知る為に努力してきた？そうやってアレン様に教えてと言ってきただけなんじゃない？

……甘いね、ティアナ。そんな事ではレディンの背負うものを支えるなんて出来ないよ」

「イリア少年…」

「知りたいなら教えても良いけど認めたくなくて耳を塞ぐようならそれまでだよ、どんなに残酷でも、どんなに悲しくても、どんなに苦しくてもいつもそこに立ち向かわなければならぬ…目を逸らす事も許されなかったレディンを支えるにはそれだけの覚悟が必要だよ。出来る？」

イリア少年のはっきりとした台詞にティアナは怒りに満ち、涙目で睨んでいた。

ティアナやレディンを思っているからこそ、イリア少年は敢えて厳しい事をティアナに言い放つ。

「目を逸らしたら君はレディンを…」

「黙ってよ！」

ティアナはイリア少年の頬に凄まじい平手打ちを喰らわせる。

「私だつてレディンの力になりたい！でも誰も何も言ってくれない、なら私はどうしたらいいのっ！？教えてよっ！イリア、ねえ教えて！何でもいい、どんなに辛くてもいい、苦しくても構わないから教えて！お願い！」

ティアナはイリア少年の肩をガタガタと揺らしながら泣きわめいた。彼女は何時でもレディンの事しか言わない…イリア少年は何処か切ない表情でただそれを受け止めていた。

アレンだけはイリア少年の切ない表情の意味を直ぐ様見抜き、何も言えなかったが、降りて来たフェードがアレンの元に来た。

「アレン様、直ぐにお越し下さいませ」

アレンは振り向き、頷いた。

フェードはこっそりとレイザの部屋の見張りをしていたのだ。

ティアナがいるのでレイザの名前は出せなかったが、直ぐに用件を知ったアレンは

「すまない、ティアナ…イリア少年、行かなければならない…」

申し訳なさそうに言ったがイリア少年は首を振って

「アレン様、大丈夫ですから行って下さい」

と言った。

二階のレイザがいる部屋に辿り着いたアレンは中に入る。

…装備を整えたレイザがそこに立っていた。

「俺はレディンとゼーウエル卿を助けに行く…だがその前に貴様を此処に呼ばなければならなかったな…アレン・フォン・ライハード」

「…レイ…ジャンのところへ」

「…分かりました」

フェードはレイザとアレンに一礼すると部屋を出ていった。

ガチャン！

扉が閉まるとレイザはアレンの喉元に剣を突き付け、アレンに迫る。

「真実を話せ、アレン・フォン・ライハード。言わなければ此処で貴様を斬り捨てる」

剣を突き付けられたアレンはそれを振り払う事もせず、黙っていた。レイザが自分に剣を突き付ける事など最初から分かりきっていた。

「私は当主に相応しくもないのかも…」

アレンは自嘲気味に呟くとレイザに向かって一言

「知りたいか？」

と、問い掛ける。

「ああ、知っているなら話せ。貴様が俺を庇うのは…レディンを調査団に引き入れたのは、レイを騎士団にしたのは貴様が真実…または真実に近いものを知っているからだろう。」

ゼーウエル卿とほぼ同期だった貴様なら知っているのだろうか？」

レイザは鋭い視線でアレンを真つ直ぐと射抜くように見つめた。

「ああ、そうだ。ゼーウエルとはほぼ同期だ、それに…ゼーウエルを生み出した元凶がライハードの出身者だからな」

アレンの言葉にレイザは理解出来ずに

「…ゼーウエル卿を生み出した元凶？」

と、聞き返した。

レイザの理解出来ないといった表情にアレンは目を見開いた。アレンは多少なりともゼーウエルの底無し沼のように深い憎しみの元凶を知っていると思っただからである。

しかしそれすらもレイザは知らないのだ…という事は？

「ゼーウエルを父親違いの兄ということしか…イリアがお前の実の姉ということしか知らないのか…？」

アレンの険しい表情と問いかけにレイザは頷き、答えた。

「ああ、ゼーウエル卿が母から虐待を受けていたことは16年前に知った。ゼーウエル卿が豹変したのは今から10年前だ」

本当にレイザは何も知らないのだ…ゼーウエルの深い憎しみも何も…。
ただ、豹変した事を知っているということはレイザとゼーウエルが再会したのは10年前ということになる。

「…そうか…レイザ…」

ゼーウエルが何も打ち明けなかったという事は少しでもレイザに対する罪悪感や愛情の表れなのかも知れない。

ゼーウエルの思いを無視してレイザに打ち明けるべきか、ゼーウエルを尊重するか…。

「何を悩む必要がある。話さなければ此処で貴様を斬り捨てる…ジヤンやイリア、ティアナもレイもまとめな」

実際にはアレンだけを斬り捨てるつもりだったがアレンがいつまで経っても口を開かない事に焦ったレイザはティアナ達を使って彼を

脅迫した。

「ゼーウェル…レイザ……………分かった」

アレンは降参し、レイザに剣を下ろすよう目で指示をする。

「…では、聞かせて貰おうか。しかし貴様の言っている事に少しでも偽りがあったら斬り捨てるぞ、忘れるな」

「…分かっている」

どこか歯切れの悪い返事をして解放されたアレンは窓の方に向かって歩いた。

…相思相愛…レイザはゼーウェルに対して絶対的な忠誠を誓っている。

ゼーウェルはレイザに対して憎しみ…一方では愛情を抱いている。この2つの感情がいつか交わる事をアレンは密かに祈っていた。

第十五節：血塗れの刃を握り締め（前書き）

血色に染まるこの刃。

それは全てを切り裂いてゆく。

そう、汝も我も貫いてしまうのだ、その刃。

ああ、その刃は諸刃の剣。

痛み、苦しみ、跪き。

< さあ、始まりさ、破滅への前奏曲を今こそ鳴らせようか >

第十五節：血塗れの刃を握り締め

「ゼーウエル卿……」

死のような沈黙が広がりきつたこの牢獄内でレディンは口を開いた。

「何だ、レディシア」

ゼーウエルも淡々と答えるだけだった。

レディンは何を言ったら良いのかよく分からなかったが、一つだけ分かった事がある。

「レイザ殿は何も知らないのではないか？ 貴方はレイザ殿に何も言わなかったのではないか？」

ゼーウエルの先程の言葉から一つ答えを見出だした。

宿命から逃れたと言った……それはレイザもイリアも何も知らないという事になる。

激しい殺意と怒りが混じった視線に恐怖心で何も見えなくなっていたが、冷静になると少しずつ見えてきた。

恐怖心にとらわれていた時には絶対に見えなかった何かが。

「……何が言いたい」

ゼーウエルは相変わらず無表情で淡々と話すだけだった。

「貴方は……」

レディンは手首から流れる血にも構わず、沈黙が広がる牢獄の中で

答えを伝える為に口を開いた。

「貴方は本当はレイザ殿を、大切に思っているからこそ…何も言わないのではないか？」

「…違う…そんなこと、有り得ない！」

「…ならば何故、何故レイザ殿を助けたのですか！憎んでいたなら即座に始末している筈でしょう？貴方がやっていることはまるで逆だ、レイザ殿を…」

「黙れっ！」

恐怖に怯えていた時とは明らかに違う、凜としたレディンの瞳に内心驚いていたゼーウエルはそれを隠すように怒鳴り上げたけれど…。

(…憎んでいる…今でも私はレイザを憎んでいる！そう、憎んでいる…)

10年前

ゼーウエルはラザニアの命令通りに反対勢力を抹殺していった。

躊躇う事無く斬り捨ててゆく…その中にはレイザの義妹であるレイを育てた修道院の者達もいた。

「私の邪魔をするな…っ！」

立ち向かってくる敵には容赦はしない、斬り捨ててゆく…それが彼なりの礼儀でもあった。

しかしそれ以上に…。

「…っ！あんな、あんなものっ！」

聖職者：彼は聖職者という存在そのものを憎んでいたのである。だから容赦せずに斬り捨てる。

ラザニアの命令とは言え、彼は明確な殺意を以て聖職者と呼ばれる存在全てを斬った。

息絶えた聖職者の背中に剣を突き立て、何度もグサグサとメッタ刺しにする。

「クツクツクツク…」

冒涇としか言い様のない事をやっていた…。

気が付けば凄惨な光景が広がる…原型を留めない程の何かがある…。見分けのつかない死体…殺意のままに斬り捨てた結末がこうなった。急に恐れを成し、彼は怯え、その場から逃げ出した。

とは言うものの、血塗れになった服では帰る事など不可能なわけであり、ゼーウエルは人目を避けてアルデイ家へと戻って行く時に再会した。

「…随分、派手にやったものだ」

やはり自分は血の香りがする…こっぴつという運命なのか、私は。だから気が付かなかった。

「……………ゼーウエル、卿？」

か細い声が自分の名を呼ぶ事に…。

「……………っ！」

見つかった…逃げなければと思い、声のする方向に刃を向けた。

「ゼーウエル卿…やはり貴方でしたか…」

真っ黒な髪の色…すっかり容姿は変わったが、直ぐに分かった。

「……カイン…？」

「…ゼーウエル卿、何故そんな…」

「…かまうなっ！」

逃げるようにして、去ってゆく。

カインにだけは見て欲しくなかった…闇に囚われた己の醜い姿を。ラザニアの命令通りに実行する己の哀れな姿を。

今度カインを見たら自分はどうなってしまうのだろうか…醜く歪んでいる残酷な闇は徐々に浸透する。

ぽっ…ぽっ…。

雨が降ってきた…その雨は己の心を表していたように激しさを増してゆく。

「何故だ、何故…どうして私は…っ！」

刃を振り回しながら声にならない声で嘆く。

何故こんな目に遭わなければならない？

何故自分だけが？

愛情はおろか人間としても認められていなかったと言う真実を受け入れる等、酷すぎる。

父の魔術の試作品として生み出された事を知ったあの時から元々歪んでいたものが更に歪んだ。

禍々しく、悲しく、暗く、黒く歪んでしまった。

悲しい…身勝手な理由で生み出された事が…父も母も叔父も義母も…彼に関わる存在全てを憎んでいた。

『死の契約』…その忌々しい単語が浮かんでは消え、消えては浮かび上がる。

「何故だ、何故私だけが…っ！何故だっ！」

泣きながら大木に何度も剣を突き刺す…突き刺しては抜き、また突き刺す。

「…ゼーウエル卿…やめて下さい…っ！」

悲鳴と剣の音は森の外にも響き渡っていた…ただならぬ予感がしたレイザが駆け付けたらこうなっていた。

「ゼーウエル卿っ！やめて下さい…！」

レイザの声は剣の音によってかき消され、届かない。

すると…突然剣の音が止んだ…ゼーウエルは剣を下ろし、低い声で呟いた。

「何故私だけが…」

繰り返される言葉…それは、全てに対する憎しみと悲しみ。

「…………。」

レイザは何も言えなかった…何が彼をこんな風にしたのか、全くわからない。

ゼーウエルにはレイザが映っていないのだろう…独り言のように呟いていたが、次の言葉はレイザに大きな衝撃を与える事になる。

「…………生きる意味等、最初から無かった…のに…………。」

「…………！」

何も知らないレイザの心に突き刺さる…今にも壊れていきそうな程、深い悲しみと絶望を背負っている。

背負い切れない何かが押し潰してしまいそうで、降り注ぐ雨が彼をかき消してしまいそうで…。

握りしめている血塗れの刃は彼の身も心も引き裂こうとしている。

「ゼーウエル…………！」

10年の間に何があったのかは分からない…それに彼がどうやって牢獄から抜け出したの事も分からない。

ただ、見るに耐えられなかった。

「やめて下さい…ゼーウエル…っ！」

後ろから見守っていただけだったレイザはゼーウエルの背中にしがみついた。

「もう、やめて下さい…ゼーウエル…お願いですから…………。」

…あれから10年…レイザの存在は …。

「ゼーウェル卿」

レディンの言葉の1つ1つがゼーウェルの心を貫く…もう、分かっているのだ。

ただ、認めたくないだけ、認めたら崩れ落ちるから認めたくないだけだ。

「貴方には分かっているはず、貴方の『復讐』もアレン様の目的も最終的には同じだと」

「違う…！」

否定しても無駄だ。

災いと災厄の元凶となるものを教えたライハード家の者も、それを駆使した者も、隠そうとし、悪用しようとしたアルデイ家の人間も、自分よりも災いをもたらした魔術が大事だった全ての存在が憎かった。

その憎しみの行き着くところは皮肉にも世界を揺るがさんとする者であるということに認めたくなかった。

(シャル…)

レディンの今の目はシャルにそっくりだった。

皮肉にも忌まわしき魔術を発見した男の息子の執念に救われようとしている…。

「…クック…」

ゼーウエルは含み笑いを浮かべていた。その含み笑いにレディンは確かな手応えを感じた…ゼーウエルが敗北を認めたということに…。だが…。

「ゼーウエル、何をやってるの？」

カツカツカツ…。

靴音を響かせながら凜とした声がする。

振り向いたゼーウエルは僅かに動揺しながら

「…ラザニア様…」

淡々と名を呼んだ。

「ラザニア様！」

ゼーウエルの義母にして叔母であるラザニアの突然の登場にレディンは驚きを隠せなかった。

そんなレディンをよそにラザニアは鉄格子に近付き、嘲笑しながら

「いい気味ね、シャルルの親友さん！確かレディシア…だったっけ？もうあなたの存在は8年前から分かっていたのよ、レディシア！」

と言った。

…8年前から分かっていた…？

レディンは血の気が引くような感じを覚えた…先程までは確かな手応えを感じたのに。

「レイザの息子はシャルル・レイモンドが隠したんでしょう？娘はアレン・フォン・ライハードが隠したみたいだし」

「知らない！」

レディンは即座に否定したが、ラザニアは声を上げて笑いながら鍵を取り出し、鉄格子を開けると…。

グサツ！

「……！」

ゼーウエルも目を見開いた…ラザニアの突然の行動に。

「死なない程度に。さっきから五月蠅かったのよね。ああ、シャルル・レイモンドとそっくりで目障りだわ！」

「ラザニア……！」

「ゼーウエル、あんたも牢屋に放り込んでやろうかしら。あんたが根回ししてレイザの子供を保護させた事位分かっているのよ？フフフ…私の邪魔をしないで、ゼーウエル」

ラザニアは冷徹な表情でゼーウエルを射抜くように見つめた。

レディンは鋭い痛みに呻きながらも悲鳴を上げる事はしなかった…あまりの衝撃で悲鳴を上げる事すら忘れてしまった。

へレナで聞いたシスターの狼狽する声…。

ああ、嗚呼…間違いない…。

8年前の『牧師殺し』と6年前の『シャー青年殺し』を企て、実行した犯人…そして…レディンの背中を打った人物であることも。

「フフフ…」

血に塗れた刃を舐めながらラザニアはぐったりとしているレディンを見る。

…こうして悲劇の幕は開けた…ラザニアの握り締める血塗れの刃によつて。

冷徹な女の笑みが全てを貫く。

悲しき銀の弓は、ありとあらゆる真実を照らし出す。

悲劇、訪れて何を仰ぎ見る。

嗚呼、罪深きは我が父よ。邪悪な魔術、極めるは誰が為に。

切なる声、悔やみや怒りすら、まるで塵の如し。

決して許すことなかれ。

「ラザニア…っ！」

ゼーウエルは狼狽した…ラザニアが何故レディンを貫いたのか分かんなく、ただ狼狽していた。

すると、ラザニアは

「レディンの為よ」

と、言ったただけだった。

レディンの為？

何故？

彼女は何を考えている…ゼーウエルでさえ、ラザニアの考えが分からなかった。

「私の為でもあるけれどゼーウエルには分からないわよね、きっと」

金色の髪を靡かせ、妖艶な笑みを浮かべるラザニアにゼーウエルは恐ろしささえ感じる。

…ラザニアはあまりにも若すぎる…。

もう、ラザニアは50後半なのだ…50にしては若く見える…。もししたらゼーウエルよりも下回っているように思える。

「……闇、魔術師……」

ラザニアは黙って首を縦に振る。

隙のない、余裕そうに笑っていたがゼーウエルにはラザニアのその表情が酷く歪に…いや、何故だか知らないがラザニアそのものが酷く歪に見えた。

…まるで、自分自身が歪に見えた時と同じく。

「貴方の目には私がどうい風映っているかしら？」

知りたいけれど知りたくない…残酷な真実が目の前に映し出される。シャルルの執念が導き出した真実が、今この時、映し出される。ラザニアの妖艶な笑みと共に、暗く…悲しく。

「死の…契約者…」

ゼーウエルは1つの答えを導き出し、呟いた声にラザニアは笑いながら

「そうよ」

と、言った後、ラザニアは射抜くような目でゼーウエルを見つめながら話し始める。

「…ゼーウエル、私が最初の実験台よ。酷いものね、貴方よりも若く見えるなんて…お兄ちゃんは残酷な人ね。私、ずっとお兄ちゃんがアルデイ家を支えているのかと思っていたわ、私…馬鹿だったのね。女という女を食い物にして…妹も実験台にしたの、フッフ…私、道具だったのよ」

「ラザニア…ラーナ…」

ゼーウエルを制止してラザニアは続ける。

「でもバレちゃった…私がラーナである事が。だけどね…私、お兄ちゃんを許せないの。ゼーウエル、分かって。シャルルを殺すつもりも、アルデイ家の幹部達を皆殺しにするつもりも、無かったの、私には。ただ、見抜けなかったの…シャルルは自分の利益に基づいて動いていたと思ったの…それに」

「……ゼーウエル卿を守る為、でしょう?」

「…レディン…!」

ゼーウエルは更に狼狽した…深手を負っていたレディンが口を開いた。

「シャルル…はアレン様にその事を…知らせるつもりでした…でも、シャルルは…」

そう言ったレディンの手から紙切れが落ちた…。
『嘘』とだけ書いた紙切れが。

「シャルルは既に自分が…ディアルトに狙われて…いたこと…分かっています…死ぬ前に…ラーナを見て『確信』したのです……」

レディンの穏やかな笑顔にラザニアは苦笑して

「皮肉ね、お兄ちゃんが執着する原因を作った闇魔術を発見した父親の息子にアルディ家は救われるのよね…。レイモンドが殺された時、私…直ぐに確信したの。フフフ…もう遅すぎたわね。レディン、ティアナ達とヘレナに来て、気分が悪くなった貴方を助けた『シスター』が私であること、いつ気が付いたの?」

「…目、です」

レディンが答えるとラザニアは相変わらず苦笑したまま

「…そう。多くは聞かないわ、レディシア」

と、言った。

ゼーウエルが黙っている間、ラザニアはレディンに向かって

「傷は大丈夫？」

と、聞いた。

レディンは苦痛に顔を歪め、

「うっ…いや……」

呻きながら答えるがラザニアは何処か残酷な笑みを浮かべながら

「でも、もう少しそのまま置いてね、レディン」

と、言った後、話し続ける。

「根回したのは私。その一方でアルディ家の幹部を抹殺していったわ。ディアルトの命令に服従しながらもね。

…イリアが連れて来られて、直ぐに地下でイリアに麻酔を施した。でも、体力が限界だった…イリアは死んだわ、ティアナと少年を生んで。

アレンにティアナを頼んで、レディンに少年を頼んだ」

「……」

「シャルルはつきり私がアルディ家の幹部であるレディンを殺しに来たと思ったのか、それとも…もう死を覚悟していたのか…玄関の前で仁王立ちして、必死に言葉を紡いで、私が襲い掛かっても決して逃げようとしなかった。でも、私がシャルルの手から銃を奪っ

て…力尽きた。レディンの姿も見つけたわ、でも、少年は居なかった。6年前に私はもうシャルとレディンに敗れたと思ったわ。例えレディンを襲って、記憶喪失になっても消えないもの、強さはね」
淡々と真実を話すラザニアにレディンとゼーウエルは黙っていた。
口が聞けなかった…ラザニアの話にショックを受けてしまった。
レディンもゼーウエルもまさかディアルトがそこまでラザニアを始め、全ての人間を追い込んだとは思っても見なかった。
ラザニアは悲し気に、苦し気に微笑みながら

「レディン、貴方とシャルの執念がティアナとイリア少年を救ったのね。あの2人はアルデイ家の血を引いていたとしても、媒体になることはないわ。貴方とシャルがアルデイ家を救おうとしているの、だから……ディアルトを倒してね」

と、言った。

ぼた…ぼた…。

涙が床にこぼれ落ちる。

ゼーウエルが泣きながら呟いた…痛々しい表情にラザニアは一瞬、険しい顔をしたが、すぐに穏やかな表情に戻して

「ゼーウエル、受け入れてくれる？私の最後の願いを」

と、聞いた。

ゼーウエルは勿論、レディンも質問の意味を理解出来ていた。

すなわち、結果はゼーウエルが消えるけれど、それでも構わないかと聞いているのだ、ラザニアは。

穏やかな笑顔で紡ぐ残酷な問い掛け…。

しかしゼーウエルにはもう迷いなど無かった。

「…それで、レイザが…ティアナ達が救われるならば」

泣きながら答えるゼーウエル…レディンも同じだった…。

元々、自分は悲劇の宿命を絶つためにシャルと結託して冒険者になったのだ。

「…ゼーウエル…行きましょう？それに、レディンも来てくれる？」

その言葉にレディンは驚いた…何と都合の良いことか。

今まで悪魔であったラザニアが自分まで闇に引き込もうとするとは、その、傲慢過ぎる精神に逆にレディンは降参した…到底敵わない。

「傷、治してくれたら……」

「あらそう、それだけで協力してくれるの。私、悪役だけど？」

「……敵いませんよ…良いところ取りじゃないか……」

「フッフ、それが私よ」

ラザニアの自信に満ちた表情にレディンはひたすら苦笑していただけた。

歪んだ方法と正攻法…結局彼等が目指していた『復讐』もアレンが目指していた『平和』も変わらないのだ。

一方…監獄の中と同じ位、重々しい雰囲気グレイザのいた部屋にも広がる。

レイザはアレンを試すような目付きで常に身構えている…アレンと

しては全てを話したいが、自身の父親を通じてラザニアやゼーウエル、シャルルやディアルトの事を知っているが故に話せないでいる。しかし、アレンは意を決して口を開くと……。

「……父が当主だった頃から、既に異変は起こっていた」

それについてはレイザも知らないわけではない。

「……確か貴様が17の時に亡くなった……だな？電車の事故で」

「……ああ……そうだ。まあ、それは後で置いておこう。」

……それよりも尚重要なのは、ライハードには優れた魔術師と学者がいたということ……その学者の名は……『アクロイド・レイモンド』だ」

「……っ！レイモンド!？」

レイザは驚き、思わず叫ぶ。アクロイドはシャルルの父親である。アクロイドは医者として有名だったが、まさか魔術を専門に扱っていたとは思わなかった。

しかも、アルディ地方ではなく、ライハード地方出身者であった事に驚いた。

アレンは更に険しい顔で話を続ける。

「……アクロイドは魔術の研究を進めていた……何をするつもりだったかは私にも知らないし、恐らくある人物を除いては誰も分からないだろう……」。

その魔術師とは『ディアルト』……レイザは知らない……かな」

「ああ」

レイザがはつきりと知らないと答えるとアレンは一息ついて、淡々と答える。

「……ゼーウエルの父親だ」

「……え……？」

レイザはまたもや驚いた…ゼーウエルの父親が元はライハード家の者とは…と、考えていたことに薄々気付いたアレンは

「だが、ディアルトはアクロイドの噂を聞き付けてライハード家にやって来たに過ぎない…ディアルトはアルディ家の長男だったが、当主はレイザの父親である『シリウス』だった。ディアルトはアルディ家を追い払われてさ迷い歩いた…そしてライハード家に目を向けたに過ぎない」

と、補足した。

何も言えないでいるレイザを思い、アレンは話すのをやめようかとも思ったが、いつかはぶつかる壁なのだ…ゼーウエルの辿る結末にもぶつからなければならぬ。

「ディアルトはアクロイドの助手になるために兵士になった。まあ元々ディアルトは心身共に鍛え上げられていたし、直ぐに才を発揮した。」

ディアルトの名前は瞬く間に広がり、専属の学者として勤めていたアクロイドはディアルトがこの兵士であることを聞き付け、ディアルトを呼び出して助手にならないかと言った…勿論、ディアルトがその申し出を断る筈もない、二つ返事で彼は助手になることを了解した。

…それが全ての始まりだった……だが」

「だが？」

レイザが聞き返すとアレンは疲れきった表情をしながら

「アクロイドはディアルトがアルディ家に乗っ取るうとし、シリウスを抹殺しようとしていることを即座に見抜いた……いくら、名前を変えたとしても誤魔化すにはディアルトは余りにも整いすぎたのだ」

アレンのその言葉にレイザは血の気が引いていく……その先の結末など何と無く予想が出来る。

「今まで好意的だったアクロイドが急にディアルトから避けるように研究書物を隠した……それを見つけたディアルトはアクロイドに詰め寄った……アクロイドがディアルトに対する不信感を露にし、逃げ出した。ディアルトは執拗にアクロイドを追い掛け、殺した……自殺に見せ掛けてな」

やはりか……やはりディアルトはアクロイドを抹殺した……その後は……。

「魔術書物を手に入れたディアルトはソフィアに目を向けた……妹ラーナの必死の説得も頑として聞き入れず、ディアルトはソフィアを無理矢理自分のものにした……」

「……………ゼーウェル……………！」

ディアルトがソフィアに……という部分を聞いたレイザは思わず悲鳴にも似た声を上げる。

ディアルトとソフィアの子供はゼーウェル（セイシエル）である。

それなら、ゼーウエルが自身を含むアルディ家の人間を憎む理由も分かる。

レイザは驚きと悲しみ…両方が入り交じった表情でアレンを見ていた。

無理矢理身籠った子供…それがゼーウエル…その事を知ったゼーウエルが両親の愛情を一身に受けた自分を恨んでも何ら不思議ではない。

寧ろ恨むなど…憎むなど言う方が無茶苦茶である。

もしもレイザがゼーウエルの立場だったらきつと同じように両親達を憎むだろう。

「…レイザ、まだ続きがある…恐らく、ゼーウエルが最もお前に隠したい真実なのだろうな…」

「……………え？」

まだあるのか…レイザは目を見開いて険しい表情で立っているアレンを見ていた。

一方のアレンは顔を歪め、俯いたまま、感情を抑えながら呟いた。

ゼーウエルの意志を尊重出来ない事に対して心の中で謝罪をしながら…淡々と言った。

「ゼーウエルは……………ゼーウエルは、生まれる筈のない子供なのだ…」

「……………！？」

レイザは衝撃を受け、暫く我を忘れてしまっていた…。

生まれる筈のない子供？

アレンの淡々とした一言を聞いたその時、10年前のゼーウエルに再会した時の事が脳裏に過る。

<私の……生きている意味等、なかったのに……>

独り言のように、彼は呟き、雨に打たれながら持っている剣を何度も木の幹に突き刺していた。

「……セイシエル……っ！」

聞きたくなかった言葉をあの時、聞いた……。

知りたくない、知らなければならぬけれど知りたくない……知ってしまえば、踏み込んでしまえば、ゼーウエルが消えてしまうような気がして、踏み込めなかった。

「……レイザ……」

レイザは本当にゼーウエルを兄としても、主としても尊敬し、愛していたのだろう……。

しかし、結末は変わらないのだ。

「……レイザ、お前なのだ……本当は」

アレンはどうしても言わなければならなかった……本当の当主はシリウスであり、レイザであると。

ゼーウエルは異端であり、レイザにとっては敵にしかならないと。

「……セイシエルは……死に魅入られた……死の契約によって生み出された子供だ……悲しいがセイシエルはお前の兄にはなれない……まして

や主になど絶対にならない……セイシエルはお前の敵なのだ……敵でしかない……」

「黙れっ！」

レイザは髪を乱して叫んだ。

「違う、違う！セイシエルは俺の兄だ……！俺にはもうセイシエルしかいないのに……！」

「……レイザ……」

レイザは狂ったように泣き叫び、セイシエルを求めたけれど、否定してはくれない。

嫌だ、嫌だ……ねえ、どうか。

どうか否定して……。

貴方は私の兄ですよね？

異端児ではないですよね？

「セイシエル……っ！」

泣いて、泣いて、泣き崩れ……レイザは声を上げて泣いていた。

アレンはそれを見つめる事しか出来ないでいた……レイザはセイシエルを求め、泣いていたのだ、無力な自分に何が出来るだろうか……いや、何も出来ない。

そう考えると過酷な真実に全力で向き合ったシャルルに対して尊敬の念を抱かずにはいられなかった……。

誰もが逃げ出したくなるような残酷で悲劇的な真実を見出し、それに向き合った果てに短い命を終えたシャルル……。

彼が生きていたら…と、思わずにはいられなかった。
きつとアルデイ家の人間はシャルルによって恐怖心を覚えたのだろ
う。

泣き叫ぶレイザの声はイリア少年やジャンとレイの部屋にまで響き
渡る。

何を知ったのかは知らないが、敵でしかなかったレイザの泣き叫ぶ
声に同情してしまった。

フェードは目を細め、眉を寄せ、呟いた。

「…レイザ…」

誰にも聞こえないよう呟いていたのかも知れないが、ジャンにはよ
く聞こえていた。

「フェード…レイザのこと、気になるのですか？」

「……ええ」

フェードが絞り出すような声にジャンはどう励ませば良いのか分か
らなくなった…自分にとってレイザは敵、それも憎い敵だ。

シャルルを自ら手に掛けたとは思っていないが、彼を殺した犯人に
手を貸していると思っっているからだ。

しかし、彼にも何か事情があるのかもしれない…少なくとも、今の
悲痛な叫び声を聞いていたら敵とは思えない。

アレンはレイザを通して自分達にも何かを告げたいと思っっているの
かも知れない…。

「シャルル、お前は一体何なのだ……？」

「もしも、彼がゼーウエルに会ったというならば、彼は何をゼーウエルに告げたのか。」

「彼は何の為に命をかけたのか…。」
「考え込むジャンにフェードが話し掛ける。」

「ジャン、貴方も気になるのね」

「未だか細かい声、だがしっかりとジャンに言葉を返すフェードにジャンは頷く。」

「フェードは苦笑し、一息つくつと、」

「……シャルル、彼が医者であり、アクロイド様の息子であることは知っているわ。けど、どうして彼がゼーウエルに拘るのか…こんな危険な謎に足を踏み入れたのかが分からないの」

「と、言った。」

「もしかしたらフェードには…。」と思ひ、ジャンは意を決してフェードに話し掛ける。」

「あの、フェード様…。」

「続きを言おうとしたジャンを制止し、フェードは」

「追求しなげや。追い求めるのよ、ゼーウエルやこの悲劇にね」

「そう言いながらフェードはジャンにウインクをした。」

「その頃…ティアナはイリア少年と共に部屋で待機していた。」

「イリア少年はティアナに対する想いとレディンやレイザに対する想」

いの狭間で苦悩していたが、それでも沈みきっている彼女を何とか励まそうと必死だった。

…きつと彼女はたった1人の人物の言葉で笑顔になるのだろうか…イリア少年はそれを知っており、苦しかった。

ティアナは知らないけれど、ヘレナの村に度々ジャンやアレンとともにティアナが訪れる事があったのだが、偶々イリアは近くにある雑木林に薬草を取りに行っていた。

「疲れたな…シャルルの怪我を治す薬草、なかなか見つからない…」

シャルルの手が虫に噛まれて治療しようとしたのだが、薬草を切り忘れてしまっていたらしく、残っていなかった。

イリアはそれを取りに行くと言ったのだが雑木林の中は危ないと言って行かせてくれなかったが、それでも変わらなかった。

…シャルルに内緒で雑木林に向かったのだが、雑木林の中に入るのは初めてだったのでどこに薬草があるのかも分からない。

「…どこにあるんだろう…」

イリアはそれを探しながらどんどん奥に進んでいく。

辺りが暗くなつてゆくのに…夜の雑木林は危険なところであることも知らないまま。

ただ、シャルルの為に。

それだけだったのだ、シャルルの為に出来ることは自分でしよう。

バサバサッ！

「……っ」

鴉の飛ぶ音が響き、イリアは泣きそうになる。

薬草は見つからないし、おまけに道が分からなくなってしまった。

「シャルル…」

涙を堪え、イリアはどんどん進んで行くが、明かりすらない雑木林の中を歩くのは危険だった。

「いた…っ！」

おまけに得体の知れないものにまで噛まれた…。

怖い、怖い、暗闇も、孤独も。

「シャルル…うっ…シャルル……」

剣も持っていない…こんなにも怖いところだとは思っていなかったから。

ヒュン…！

「……………っ！」

イリアはあまりの怖さに目を閉じた。

…殺される…！

「“アベル”」

「……………ふえ……………」

来たのはシャルルだった。

足元には獣が落ちていた…シャルルが助けに来てくれたのだ。

「アベル、無事で良かった」

「シャルル…！」

差し出されたその手を握ろうとしたが、後ろから声がした。

「まあ、可愛らしい少年！」

「あ、ティアナ様！」

シャルルの他にも誰かいたのか…幼いながら、何となく分かった。
…シャルルの親友であるライハードの騎士と…お嬢様であることを。
護衛の騎士の制止を振り切って話し掛けてきた。

「ねーねー、あなた、なまえなんていうの？」

ライハードのお嬢様とは思えない無邪気な笑顔に何故か惹かれる。

「……アベル」

「アベルくんかあ！いいなまえだねー！あたしはティアナっていうの。よろしくねーアベルくん！」

握ってくる小さな手と真っ直ぐな瞳を見ることが出来ない自分が恨めしかった。

「…よろしく、ティアナちゃん」

無邪気で純粋な幼い笑顔につられ、笑みをこぼした。

…一度きりだったけれど。

(……ティアナ)

この想いを打ち明ける術を知らない自分には、ティアナを守ることしか出来ない。

(僕が、君を守るから)

幼い頃に見た、あの眩しい笑顔を支えに生きてきた。

…偽りの名前とともに。

(僕はアベルじゃない…僕はイリアなんだ、君の…)

叶わない想いを胸に、ただ佇んでいたが、やがてそつと扉を開けた。

(シャルル、僕は“アベル”として向かわなければならぬんだ、ごめんね)

ティアナに迫った時に持っていた銀色の刃を装備し、彼は飛び出した。

…どうか、ティアナに銀色の刃が見えていないように…。

ただ、それだけを祈りながら。

第十六節：朱色の狂気（前書き）

暗き闇の中で鋭く輝く瞳。

怒りに燃える赤き瞳よ、その瞳に宿る狂気は激しい憎悪と執着。

嗚呼、其れほど迄に欲しいのか、彼の人を。

しかし、その強き意思は決して揺らぐ事は無いだろう…。

何もない虚無の世界で望むことは唯一つ…。

『虚無の世界で汝とただ二人きり…』

………邪悪な声で彼の人を闇へと誘う。

第十六節：朱色の狂気

セイシエルが牢屋に向かったとき、戻って来ない。

「やはりお前はレイザが大切なのか……レイザをあいしているのか……！」

そこに佇んでいたのは“ゼーウエル”である。

暫くセイシエルの自由にさせていたが、彼自身のはつきりとした反対の意思を示され、激昂していた。

「……してやる」

無惨な方法で、残酷なまでに苦しめて。

苦悶に満ちた表情を浮かべて、地獄に落としてやる。

「レイザ……っ！殺してやるっ！」

セイシエルがレイザを守ろうとする限り、此方に来てはくれない。ならばレイザを抹殺し、セイシエルも限界まで苦しめて墮落させるまで。

「……許しを請え、セイシエル……この私に跪け。」

“ゼーウエル”の瞳にギラギラと輝いた狂気が走る。その狂気をたたえたまま、振り向いた。

「……ヴァン・フェイ……奴は戻っているのだろうか？」

何処にいたのか…灯りのない部屋から低い声が響く。

「あの方は戻って来ていますよ、マインド様」

ヴァンと呼ばれた男は口角を上げて報告したが、彼はヴァンを睨み付けて言い放った。

「…ヴァンよ、その名で呼ぶな。私の名は『ゼーウエル』だ、忘れるな…」

ぴしゃりと言ったことにヴァンは笑みを消して頭を下げ、謝罪の言葉をお口にす。

「申し訳御座いません…」

そして、顔を上げて真っ直ぐと、狂気をたたえた瞳を見つめ返し

「“ゼーウエル”様」

笑いながら言った。

その様子を見た彼もくいつと口角を上げてヴァンに命令を下す。

「…まあよい、ヴァンよ。まずはセイシエルを此処に連れてこい」

ヴァンは一瞬だけ止まったが、命令の意味が伝わったのか、ニヤリと笑った。

「…セイシエルを我々の仲間に取り入れ、乗り出すのですね？」

ヴァンの問い掛けに頷き、

「アルデイ家、ライハード家両方の全てを手に入れる為にな。だが、セイシエルにはラザニアがいて邪魔だ」

“ゼーウエル”は忌々しげに呟き、口を閉ざした。

ラザニア…ラーナ。

死の契約の失敗により、無惨な結果となった。

…年齢を取らなくなったのだ、もう彼女は60前後なのに、33歳のままで止まってしまった。

アイシアやゼーウエルと同じ年齢になってしまった。

(ラーナ…セイシエルは渡さん。私がもらっ…！)

ラーナに対する怒りと憎しみが沸き上がる。

「ゼーウエル様、あの息子を使うというのは？」

不意にヴァンが笑みを浮かべ、問い掛ける。

その問い掛けに対してゆっくりとその名を紡ぐ。

「……………『アベル』」

……ラーナとセイシエル…アルデイ家の最大の裏切り者であるレデ
イシアが命懸けで助けた赤ん坊に咄嗟につけた名前だった。

「…………アベルを使ってレイザを誘き寄せ、足止めをしている間にセイシエルを此方に連れてくる。レイザに危機が迫っているとわざとセイシエルに伝える…そして…………セイシエルを孤立化させる。レデイシアやラーナはあの方が止めるに違いない」

「僕のことかな？」

ヴァンが“ゼーウエル”に自身の提案したものを話していると、透き通った高い声が靴音とともに響く。

「……………ディアルト様」

ヴァンは僅かに驚いた声でディアルトの名前を呼ぶと、ディアルトはクスクス笑いながら

「レディシアとラーナは僕に任せてよ…フッフ。ヴァン・フェイ、君はアベルを何とかして…目障りだから。それに、セイシエルを捕らえるには十分な人がいるのでないか？ね、メーデル」

「はい、ディアルト様」

凜とした声がディアルトの質問に答えた…。

「…メーデル」

ヴァンの僅かに動揺した声にも構わず、メーデルは不敵な笑みを浮かべながら

「……………セイシエルは此方に連れて参ります。ヴァン・フェイがアベルとレイザの足止めを成功させたならね」

メーデルはヴァンをきつく睨み付けながらディアルト達に聞こえるように言い放つ。

「…メーデル…。」

ヴァンは不安そうな表情でメーデルを見つめていたが、彼女は構う事なくディアルトと“ゼーウエル”に深く頭を下げると背を向けて颯爽と去って行った。

メーデルの姿が見えなくなるとヴァンはディアルト達に向かって、

「…メーデルで大丈夫なのですか？」

と、質問するとディアルトは笑いながら

「ゼーウエルは『罪を受け入れる』心優しい人物だからね…何よりナナキ家を忘れる筈がない……だってね……」

そう言った後、カツと目を見開いて言い放った。

「メーデルの両親を抹殺したんだからねっ！ゼーウエルは！」

狂気の光をたたえながら言い放つディアルトにヴァンは僅かに怯んだ。

…彼は、本気でセイシエルを消そうとしている。

セイシエルの腕を妬み、先に上級魔術師になった彼を疎ましく思った。

…セイシエルの存在全てが疎ましく思っていた彼でさえ、ディアルトの狂気に気圧されそうになった。

「…任せますよ、ディアルト様」

“ゼーウエル”は大して気にする様子もなくディアルトに答えた。

彼の返事を聞いたディアルトは満足そうな笑みを浮かべてヴァンに

向かって肩を叩き、

「ヴァン・フェイ、君にも期待しているよ」

と、言った。

「……………御意」

ヴァンは跪き、ディアルトの目を真っ直ぐと見つめていた。

……………薄暗い部屋で、恐ろしい程の狂気が迸る。

この空間に長い間いたら可笑しくなってしまうだろう。

(……………これも、災厄なのか?)

災いなのかもしれない…………過去の罪…………欲望と愛憎が複雑に絡み合った…………。

だがしかし、ヴァンは口角を上げて立ち上がり、部屋を去る。

(セイシエル……………!)

自らもまた妬みと劣等感に蝕まれていた事を知っている笑みだった。

その頃、ラザニア達は…………。

「ラザニア様、私はどうすればよろしいのですか?」

レディンは未だ塞がりきっていない傷の痛みを顔に歪めながら問い掛ける。

ラザニアは冷淡な笑みを浮かべながら

「貴方は私についてきなさい…レディシア。いいわね？」

そう答えたただけだった。

ラザニアは一体何を考えているのだろうか。

「貴方は…」

「レディシア」

レディンがディアルトの事について言おうとしたその時、ラザニアはきつい視線で睨み付ける。

…言葉にしなくても、目が語っている。

“言うな”

その後、ラザニアは怒りを滲ませた声で

「……………奪取するのよ、『退魔』をね」

「……………！」

レディンは目を見開いた…退魔とは、闇魔術を跳ね返す究極の技である。

禁じられた魔術により、アルディ家の当主にしか受け継がれないものである。

しかし、それ以上に問題なのが…。

「…アクロイド卿が隠した『死術の書』と言うものも探し出さなければならぬのでは？」

レディンの言葉にゼーウエルは険しい顔つきで頷いた。死術の書とはディアルトの監視下でアクロイドが魔術の研究を重ね、ディアルトと共に闇魔術の全てを作り出し、一冊の分厚い本に全てを載せたものである。

だが、アクロイドは完全に完成する事を恐れ、隠したのだ。アルデイ家に深く関わっている人間ならば誰でも知っている事実である。

レイザが知らないのは、あくまでも彼が行動する側の立場であり、ソフィアとシリウスが命懸けで隠し通そうとした結果に過ぎない。レイザを助け出したゼーウエルは心の中で願っていた。

“カインとイリアに対する愛情だけは本物であって欲しい”

…母、ラザニア、アイシア…叔父…そして、カイン…。
いつか、シャルルが言ったのだ。

<ゼーウエル卿、あなたは本当はカインをあいしているんじゃないのか？あなたがカインを憎むのは、劣等感からじゃないのか？>

強い口調で詰め寄る。

シャルルの言葉一つ一つが心に突き刺さる。

…劣等感、妬み、憎しみ、不安、恐怖…負の感情は時に恐ろしいものだ。

<憎しみは愛情の裏返しだよ>

シャルルの言う通り、激しい憎しみは激しい恋慕にも思える。

…何故ならば、自分はレイザしか見ていない…レイザしか見えて

いない。

しかし、今はどうだろう？

必死に隠してきた思いをシャルルの意志を受け継いだレディンがいとも簡単に暴いた。

(レイザ…)

自分はレイザをあいしているのだ…彼しか見えなくなる程にまで、レイザをあいしているのだ。

「……私は、もう一度時計台へ向かう」

不意に言った言葉を聞いたラザニアは驚きを隠せない…しかし、ゼーウエルは何故か時計台にあると確信にも近い何かを抱いていた。

「ゼーウエル、一人で行動しないで」

ラザニアの必死の説得にもゼーウエルは聞かなかった。

「…ラーナ、私はそこに行かなければならないのだ」

止めようと、腕を掴んだラザニアの手に自身の手をそっと重ね、戻した。

「貴女には、守るべきものがある。私に構う暇はないでしょう？ラーナ」

「…セイシエル……。」

ラザニアの悲しみに満ちた呟きすら、聞く事はなかった。

ゆっくりとした足取りでゼーウェルはラザニアとレディンの元から離れていく。

「セイシエル…ッ！」

ラザニアは必死に追い掛けようとしたがレディンが止めに入った。

「ラーナ様！いけません！」

「レディシア、貴方まで邪魔をするの！？シャルも貴方もどうして邪魔をするの！？セイシエル…ッ！」

ラザニアはレディンを振り切ろうとしたが、悲しみに力を失った彼女は崩れ落ちるしかなかった。

血の繋がりは無くても、貴方は私の息子なの…。

……アイシアの兄なの…。

何も出来なかった罪深い私には、あの子を守る資格はないと言っているのか？

レディンはラザニアを慰める事もせず、ただ、犯した罪を後悔し、泣き崩れる彼女を見守るだけだった。

「……ラーナ…」

ラザニアが本当の母親だったら良かったのに。

ラザニアの悲痛な泣き声を聞いたゼーウエルはラザニアの思いに
えられない無力な自分を呪うしかなかった。

……どう、足掻いても。

……どう、戦ったとしても。

己の結末は只一つ。

「紛い物は……何時かは消えなければならない……」

ゼーウエルは声を殺して黙って泣くだけだった。

レイザの忠誠心にも、ラザニアの愛情にも応えられない無力な自分
を呪う事しか出来なかった。

やがて、顔を上げた彼は再び歩き出した。

……破滅への、道を……独りきりで。

「シャルル、待っていてくれ……」

塔を出た彼の目の前に広がる風景……。

夜になりゆく暗い空と灰色に近い雲が彼の結末を示すようだった。

一方……。

時計台ではメーデルが待ち構えていた。

「フフフ……ゼーウエル、私は貴方を許さないわよ……！」

死術の書を守らなければならぬ……彼女の復讐の心と下された命令
のもと、彼女はゼーウエルを討たんと待ち構えていた。

しかし、彼女は自身の両親を抹殺したゼーウエルの実力がどれ程の
ものか知りたかったのである。

「……勝負よ……セイシエル・ドウ・アルディ！」

もうすぐでセイシエルが来ることを彼女は何と無く予想出来ていた。ヴァンも既に動き始めている…失敗は許されない。

一方、乗船券売り場に1人の若者が立っていた。

「…あ、乗船券1枚頼む」

黒いサングラスを身に付けた男が、乗船券売り場で券を購入していた。

「1枚でよろしいのですか？」

「ああ、俺1人しかいないもんでな」

受け付け嬢の質問に淡々と答えただけだった。どうやら急いでいるらしい。

「…では、どうぞ」

男からお金を受け取り、券を手に入れると、周りの視線に構うことなく走っていく。

「…早く大都市に行かないといけない」

大都市に向かう男…この者は一体何者だろう。すると、船の前で男は立ち止まった。

男の目の前には若々しい旅人の格好をした男が待っていた。

「来たか！」

と、旅人の格好をした男が声を掛けると走ってきた男は

「ああ、待たせて済まなかったな…ラルク」

相変わらず淡々と答えただけだった。

淡々とした様子にラルクと呼ばれた男は苦笑しながら隣を歩きつつ言った。

「気にするなよ……さ、もうすぐ船が出る。早く乗ろうぜ……マクレーン」

ラルクの明るい様子に呆れながらもマクレーンと呼ばれた男は黙って首を縦に振り、船に乗り込んだ。

「もうすぐたどりつくぜ。あんたも会いたかっただろうな」

船に乗り込んだラルクは立ったまま隣にいるマクレーンに向かって問い掛けた。

「…会いたかったよ、俺にとってはシャルと同じ位思い入れがあるんだ。あの子の為なら何だってしてやるさ」

ラルクの問い掛けに淡々とした口調で答えていたマクレーンだが、先程までの冷めていた様子とは違っていた。

「……俺にとっては何より大切な存在なのだ、だから向かう」

ポツリと呟いたマクレーンの言葉をラルクはどこか切ない顔つきで聞いていた。

そして、船は出た。

破滅への道を歩くゼーウエル…。

ラザニアの本当の思いを知り、アルディ家の野望を打ち砕く為に動き始めたレディン…。

定期船に乗って大都市に向かう2人の男…マクレーンとラルク。

…セイシエルを瀕死の重傷に追いやって捕らえる為に動き始めたヴァンとメーデル…。

また…アレンに詰め寄るレイザとティアナの部屋を出たイリア少年。

真実を知るため、共に手を組んだジャンとフェード…。

徐々に近寄る悲劇……とめどなき無益なる闘いの果てに彼等は果たして何を見出だすのだろうか？

第十七節：まどろみ、微笑む（前書き）

聞こえるのだ、破滅への前奏曲が。

嗚呼、私はただ独り…それでも行くのだ。

<去らば、我が愛しき弟よ、無力な私を恨め>

けれど、もしもこの願いが叶うなら。

<最後にお前の顔が見たい>

汝の温もりを、もう一度。

ただそれだけで私は独り、破滅への道を歩いて行ける。

第十七節：まどろみ、微笑む

長い長い道のり…。

セイシエルは大都市行きの船に乗っていた。
意識が朦朧としてきた…短い一時の夢を見た。

…カイン、2人で罪に堕ちて行ったあの時… 10年前のあの時
…レイザと名乗っていた彼に再会し…。

間違っていたのだ、自分は。

絶望していたあの時、自分を救おうとしたカインの力を利用しなければ、まともに立つことも出来なかった。

自身の生い立ちを知り、憎しみと悲しみ…様々な感情に押し潰され
そうになった時に必ずレイザを利用した。

…酷く、悲しい方法で。

レイザは自分を恨むだろうか…それとも、やはりあの純粋な忠誠心
で許してくれるのだろうか。

出来れば恨んで欲しかった。

身勝手な事をしておいて…何も知らないレイザに自身の感情をぶつ
けた自分を。

そして…死に行く自分を。

ヴァンとメーデルがどう動いているかということとは、ある程度予測
出来ていた。

予測出来た上でわざわざ時計台に向かう。

メーデル・ナナキ…彼女にとって大都市の時計台は忌まわしき記憶
の場所だった。

何故ならばそこで両親が亡くなったから…両親をそこに呼び出し、
自分が殺めたから。

彼女は何時か絶対に自身を狙いにやってくる。

(メーデル・ナナキ……)

自身は死んでも構わない……。

ただ、レイザだけは死なないで欲しい。

レイザは自分にとって希望の光なのだ。

セイシエルが目覚めた時には、まだ海が広がっているだけだった。

一方その頃、定期船に乗り込んでいたマクレーンとラルク……。

「マクレーン、お前……会いに行くのか……本当に」

ラルクは不安そうな表情を浮かべながらマクレーンに問い掛けた。

「ああ、俺は会いに行くよ……何度言われても、それだけは変わらない」

マクレーンの答えは決まっていた。

ラルクも苦笑しながらマクレーンに向かって

「そうだよな、もうシャー青年がいなくなってから6年か……あの子は無条件で荒野に放り出されたからな」

そう言った。

マクレーンは俯き、

「俺はあの子を守れなかった……シャルも、レディシアも……イリア少年も……」

後悔の念に苛まされながら言った。

ラルクも頭を抱え、

「…レイザ…カインかあ。あいつも哀れさ…セイシエル卿を慕わなければ良かったのにな」

ポツリと呟いたが、マクレーンは苦笑しながら、

「…それは正論かも知れないが、カイン殿はセイシエル卿に恋い焦がれているから無理さ。それに…」

その先を言おうとしたところで、船が大都市に到着した。ラルクはマクレーンに向かって

「マクレーン、船が着いたみたいだな、早く降りよう！」

そう言いながらも既にラルクは歩き始めていた。

「待ってくれ、ラルク」

マクレーンも慌ててラルクの後を追った。

2人は人混みを掻き分けながら進んで行く。

相変わらず、大都市は賑わっている…世界でも有数の観光都市なのだから、仕方無いのだが。

複数の船から一斉に人が降りて行くのを見たマクレーンとラルクは焦りながらも人混みを掻き分けながら歩いて行った。

その頃、大都市に到着したセイシエルも船を降り、人混みを掻き分けながら進んで行く。

「相変わらず賑わっている…」

時計台の中に入ったら誰も近寄れない程の残酷な欲望が広がっているのに。

…ただ、表面だけを見て、目を輝かせている。

「知らなければ、私も表面だけを見ていたのかも知れないな」

いちいち深く考えることは、とても面倒臭いから。

真実から逃げる事は、とても簡単だから。

真実と向き合う方が難しい。

レイザの子供であるイリア少年とティアナに事実を伝えない事は、とても簡単だ、隠せば良いのだから。

だけど、幼い子供のうちから事実を話さなかったら…後で知った時、彼等の受ける傷は深い。

イリア少年は何も知らないカインとイリアが結ばれた果てに生まれた子供である事を知っている。

シャルルが言ったに違いない。

アルデイ家がシャルルを恐れたのは、彼がどんなに残酷な事実でも逃げる事は一切しなかったから…事実と向き合い、真実を知る事をしたからだ。

そういう意味ではシャルルはとても偉大だった…イリア少年に幼いうちから事実と向き合わせるような事をしたからだ。

彼は気付いていたのだろう…何も知らない子供のうちから事実と向き合わせる事が、結果的に受ける傷は小さいと。

「…………カイン…………」

やはり、自分もアレンもそういう意味では弱いのかも知れない。

結果的にアレンはティアナを守る以上に自身が傷付かないように、彼女を守っている。

自分も、自分自身が傷付かないようにカインを守っているのだ。戦闘能力は強くて、心は弱いままだった。

だが、自分にはもう許されない。傷付かない方法など、ある筈がない。

人混みを掻き分け、漸く街の中に出た彼に休息の2文字はない…一刻も早くレイザに会わなければならないのだ。目的の宿屋までは此処からそう遠くない。

「早く行かなければ」

ゼーウエルは空を睨みながら、レイザのいる宿屋へと向かった。その頃、マクレーン達は何故か宿屋の方向に歩き始めた。

「ラルク、大きい宿屋の方にいるのだろうか？」

マクレーンがラルクに問いかけたが、ラルクは答えることを渋っていた。

ラルクは彼が動く事を内心では反対していた。

「マクレーン…俺は…」

それを言おうとしたが、マクレーンはラルクに言った。

…強い口調で。

「…ラルク、お前がレイザを庇いたいのには分かるが、ゼーウエル卿の意志がレイザを尊重する限り俺は動かなければならない。

…『アベル』とレイザを助けなければならないのだ……悲劇を食い止めるためにな」

そう言われるとラルクは頭を掻きながら頷き、「こつ言った。」

「レディンが大都市に行くと言っていたから合ってるとは思いますが」

そう言った後でラルクはやはりマクレーンに教えてはならないのではないかと思った。

マクレーンはレイザをあまりよく思っていない…その理由はよく分かるのだが。

マクレーンとレイザの両方を知るラルクは終始不安そうな表情を浮かべながら宿屋への道を歩く。

しかし…。

「……………」

「うわっ！」

マクレーンがいきなり立ち止まったため、ラルクは彼の背中に顔をぶつけてしまった。

「あいたたた…マクレーン…!!…あ、あれは？」

文句を言おうとしたラルクはマクレーンが啞然とした理由が直ぐに分かった。

「……………セイシエル様」

マクレーンの表情が硬直する。

姿は変わっていても、彼には直ぐに分かった。

「セイシエル様、レイザを…？」

呆然と立ち尽くすマクレーンの表情が変わっていくのをラルクはハラハラしながら見守っていた。

シャルルがレイザ側の人間であるならマクレーンはセイシエル側の人間である。

(レイザに手を上げないでくれ…！)

表向きではレイザを助けると言っているマクレーンだが、それは正論に過ぎない。

人の心はそう簡単には変わるものではない。

セイシエルも例外ではない。

自身を捨てた母に対する憎しみは母が死んでも消える事はなく、寧ろ増すばかりだった。

間違っているとは分かっているけど、まだあどけなさを残すカインに激しい憎しみの矛先を向けた。

それが、かえって“ゼーウエル”を育て上げ、奴等の野心を叶えようとする事も。

「レイザ！」

マクレーンは宿に向かって物凄い速さで走り始めたが、あまりの速さにラルクはマクレーンに追い付く事が出来なかった。

「マクレーン、早まるな！」

ラルクも勢いよく走り出すがマクレーンのスピードには到底追い付かない。

憎しみに溺れてはならない、悲しみに押し潰されてはならない。

マクレーンもセイシエルもレイザも皆、助かって欲しいのだ。ラルクは叶わない願いを胸にひたすらマクレーンの後を追った。

（嘲笑されても構わねえ、幹部失格なんてどうでもいい！俺は俺自身の為にマクレーンを止めなければ、メーデル達を阻止しなきゃならねえんだよ！）

馬鹿にされようとも。

アルディ家の幹部失格だと罵られようとも。

アルディ家の逆者のレッテルを貼られようとも。

これ以上、マクレーンが歪んでいく姿を見たくなかった。

だが、マクレーンは宿屋には乗り込まなかった。

その寸前で止まり、前を見ていた。

「マクレーン……」

宿屋を出たイリアと会ったからだ。

「……少年……アベル少年」

マクレーンは信じられないと言わんばかりの表情で偽りの名前を呼んだが、イリア少年は苦笑しながら彼に向かって言った。

「また、そうやって呼ぶんだ……アベル・オージリアス・マクレーン」

マクレーンの名前を呼び返したイリア少年の表情は何処か歪んでいた。

アルディ家の幹部にあまり良い印象のない彼がマクレーンだけを好意的に見る事は出来なかった。

マクレーンがシャルルを助けていればという思いがイリア少年の中にはあるのだ。

それに、イリア少年は嫌な予感がした。マクレーンがわざわざこんなところに来るとはどういうことなのかと。

イリア少年は自分の身の危険を察し、慌てて踵を返したが間に合わなかった。

「アベル少年、済まないが…」

「……マクレーン？」

ラルクは何故だか知らないがマクレーンの台詞や行動に危険を感じた。

そして…。

「ラルク、やはり俺には出来ない…済まないな」

グサツ！

「ぐっ…」

マクレーンは何の躊躇いもなくそばにいたラルクの腹部を短剣で貫いた。

ラルクは呻き、その場に膝をついた。

「イリア少年……！」

マクレーンはやはりあの時に壊れてしまったのだ…セイシエルを守る為にディアルトと戦って壊れてしまった。

「…やっぱり貴方は壊れてしまったんだ」

イリア少年は逃げることもせず相変わらず冷めた様子でマクレーンの行動を見守っていた。

自分がじっとしていたらティアナには手を下さないと思っていたからだ。

イリア少年の手首を掴んだマクレーンは疲れ切った表情で呟いた。

「イリア少年、カインの子供でなければ…君とは親友になれたかもしれない」

「……レイザさん」

「イリア少年、来てほしい。何としても……！」

マクレーンの悲痛な叫びとともにイリア少年は上空を見上げた。

……来た、やって来た。もう逃れられない。

勢いよく、燃え上がる炎。

逃げ惑う人々。

……全ては悲劇の始まりを象徴する。

「セイシエル……！」

イリア少年を抱いたマクレーンはあっという間に消え去った。

「…イリア君…！」

その一部始終を見守っていたのはティアナだった。兵士達が突然起こった炎と混乱に便乗して襲来する敵に慌てて向かいながら戦って

いる間、彼女はラルクの元へ駆け寄った。

「大丈夫!？」

呻くラルクの元に何の躊躇いもなく近付いて止血を施す。

敵じゃない…一部始終を怯えながら見守っていたティアナはそんなことを考えていた。

「もう大丈夫よ、回復もしておいたわ!」

手早く治療を済ませ、ニツコリと笑うティアナの声に気付いたラルクがゆっくりと目を開けたら。

「……イリア様の……カインの……」

そこには嘗て禁忌を犯した姉弟の面影をはっきりと残した少女の顔が瞳に映る。

「気が付いた? ほら、立ち上がった」

ティアナは呆然とするラルクに手を差し伸べた。恐る恐るその手を掴み、彼女の力を借りて立ち上がる。

「傷が深くなくて良かったわ、宿屋まで行きましょう?」

彼女の申し出に迷うラルクは何気無く横を向いた。

遠くから長い髪を靡かせながら剣を振るう剣士がいたからだ。

「レイザ!？」

知らない筈がない…この剣士の名前を叫んだ。何と奇妙な光景。

「……どうしたの？」

彼の視線が一点を見つめている事に気が付いたティアナは聞いた。

「ティアナちゃん、来てくれ！もしかしたら…！」

ラルクはティアナの疑問には答えず掴んだ手を強く握りしめて駆け出した。

その頃、レイザは襲来した敵と剣を交えていた。

「アルデイ家の連中がいつかこうするとは思ってたがな…！」

ズサツ！

次々と斬り捨てる。

剣を構えたまま走っては斬り捨てる。

アルデイ家の者達が一斉に攻撃を仕掛けてくる事を予測していたアレンの手早い指揮が功を成したのか大して犠牲者を出すこともなく事態は徐々に沈静化していた。

…表向きは。

「レイザ…っ！」

指揮をとっていたアレンが協力しているレイザの元に辿り着き、顔色を変えて彼に問い掛ける。

「ジャンとレイを知らないか!？」

レイザは肩で息をしながら

「知らないぞ!あの2人、普通はお前の指揮下にいるはずだから変だな」

と答えた。

「やはりか…っ!」

アレンはまたしても己の不甲斐なさを痛感した。

「レイザ、あの2人は恐らく…!」

アレンがレイザに向かって自身が予測していたことを言おうとしたその時。

「レイザーッ!」

遠くから声が聞こえてきた。アレンとレイザは振り向き、驚きに目を見開いて叫んだ。

「ティアナ!」

駆け付けて来たティアナ…レイザは彼女を連れて来た剣士に更なる衝撃をもたらされながらも名前を呼んだ。

「ラルク…」

ラルクはやや気まずそうな様子で親友である彼の呼び声に答えた。

「カインか、やっと見つけ出せた」

「…ラルク…」

「ちょっと待って」

レイザとラルクを制止したのはティアナだった。

無然とした表情を浮かべながらレイザの元に近付いた。

バンツ！

彼女の手がレイザの頬を打った。

突然の行動。怒りに満ちた彼女の表情。

「貴方は血も涙もない人ね」

突き刺さるような眼差しと言葉。

しかしレイザは無抵抗だった。何も言わず俯いた。

「ねえ、驚いた？私が貴方の娘だって知らないとも思った？」

彼女の言葉を聞きながらも事態が収拾し、敵が全滅したのだと冷静に把握していた。

やけに冷静だった。

狼狽したのはアレンの方だったのかも知れない。

「貴方も兄さんも私を騙していたのね」

レイザは突き刺さるような眼差しと未だ対峙出来ずに俯いたままだった。

静寂。

そして、悲劇。

悲劇的でありながら、あまりにも呆気ない再会。

しかし彼女は怒ることもなく、恨むことも罵ることもなく、アレンに問い掛ける。

「騙してないなら教えてよ、兄さん」

知りたいのは一つだけ。

「この人は母さんを愛していたの？」

兄の隠していた書類を幼い頃から幾ら漁っても眺めても分からなかった事だった。

只、それだけが唯一分からなかった事。

「私はお前に話すべきだったな、何もかも」

アレンは口に出して答えたりはしなかったが、それ以上のジェスチャーでもうずっと前から答えていた。

「それならいいの」

ティアナは満面の笑みを浮かべて答え、俯いたままのレイザの頬を片手で包みながら

「父さん、助けに行きましょうよ、そんな顔をしないで」

「……ああ、ティアナ……」

あまりにも呆気ない再会に泣いているのはレイザの方だった。

声を殺して、彼女を傷付けて、騙していたことを悔やんだ。

アレンは答えていてくれたのに。

やがて自身の涙を拭っていた彼女の手に自身の手を重ねてゆっくりと下ろしながら言い放つ。

「時計台だ、俺の予想に過ぎないが時計台に本当の敵がいる」

「じゃあ行きましょう」

ティアナの声に頷いて答えるラルク、そして彼の元に近付いて手を差し伸べるアレン。

「初めまして、カイン・アルディ殿。ライハード家当主アレン・フオン・ライハードと申します、以後宜しくお願い致します」

「宜しく頼む」

レイザはアレンの行動の意味を知ったのか、笑みを浮かべて差し出された手を握り返す。

1人の少女によって長き戦いは終わり、新たな戦いが始まる。

聖なる救出者が、今此处に現れた。

悲劇的ながらも喜劇的。

悲しみの後には喜びがある。

しかし、喜びの後には悲しみがあるということを知り、彼等は未だ知らず。

それから時計台に向かって歩くティアナに歩み寄ったのはラルクだった。

「ティアナちゃん、もう知ってるのかい？」

心配そうな瞳。

ティアナはゆっくりと頷いて言った。

「レディンが私の母を連れ戻したこともね。でも、私はレディンに感謝してる」

「ティアナちゃん……」

ラルクは何とも言えない複雑な思いが込み上げてきて、言葉が続か

なかった。

皆が思っている以上にティアナは冷静なのかもしれない。未だ何も言わないラルクにティアナは少しだけ悲しそうな顔をしてぼつぼつと話し始めた。

「私だって最初は怖かった。知った時は怖かったし怒った…レディンを恨んだことだってあった…でもね」

「でも？」

ラルクの問いかけにティアナは笑って言った。

「レディンが私を助けてくれたもの」

彼女の微笑みにラルクも思わず笑った。

確かにレディンがいなければティアナもイリア少年も救われなかった。

向こうからすれば反逆者の汚名を着せられた上に妻子を引き裂かれてしまったのだから、怒るのは当然だったのかもしれない。

ティアナはもう一つ、ラルクに向かって言った。

「きっと父さんも母さんもレディンを恨んではいないわ。私には分かるの」

妙に自信満々な彼女の表情にラルクは救われた。

彼女には父親もレディンも恨んで欲しくなかった。冷静に知ってくれたことがラルクには嬉しく思った。

「カイン、良かったな」

そんなことを言ったらきつとカインのこと、顔を真っ赤にするに違いない。
ティアナから亡きイリアの面影を感じながらラルクは時計台に向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3461u/>

海に散る星

2011年11月16日13時15分発行